

Ⅲ 義務教育 9 年間を通じた
系統的・連続的・
協働的な学習指導例

◆◇ 義務教育 9年間を通じた一貫性のある外国語教育の全体像・系統表 ◆◇

校種 (総数)	学年 (総数)	「つながり」 あらゆる教育の目標・内容・方法の「国際的な接続」												「生かし合い」 ③人材の「協働」						
		①目標・内容の「系統性」												②方法の「国際的な接続」						
		学年目標 ※学年ごとの目標は、 各学校において適切に定める。	時期	コミュニケーション活動 (場面・機会)	単元名 (時数)	掲載 頁	基礎型 学習指導要領	発展型 学習指導要領	活動・教材の題材 主として 言語	主として 文化	プロジェクト型 学習 (個/協同)	反転型 学習	CAN-DO リスト	意図的 な接続	同校 内	自校 内	③人材の「協働」	学校 外		
小学校 (100)	第1学年 (5)	2学期	9月	(事例1-1-1)	あいさつ (1)	D.76														
			10月		ハロウイン (1)															
			11月		自分の名前 (1)															
	第2学年 (5)	3学期	12月	(事例1-1-2)	クリスマス (1)	p.80														
			1月		ともだちがしゲーム (1)															
			9月		あいさつ (1)															
	第3学年 (10)	2学期	10月		ハロウイン (1)															
			11月		自分の名前 (1)															
			12月		クリスマス (1)															
	第4学年 (10)	3学期	1月	(事例1-2-1)	クリスマス (1)	p.86														
			2月		ともだちがしゲーム (1)															
			4月		色 (2)															
	第5学年 (35)	1学期	5月		おやつ (2)															
			6月		数 (1)															
			7月		動物 (1)															
第6学年 (35)	2学期	10月	(事例1-4-1)	ハロウイン (1)	p.96															
		11月		動物 (1)																
		12月		クリスマス (1)																
中学校 (420)	第1学年 (140)	1学期	1月		あいさつ (3)															
			2月		スベ (3)															
			3月		数 (3)															
	第2学年 (140)	2学期	4月		自己紹介・好き嫌い (4)															
			5月		色・衣服 (4)															
			6月		ハロウイン (4)															
	第3学年 (140)	3学期	7月		ほしいもの (3)															
			8月		クリスマス (3)															
			9月		学校生活 (3)															
	第4学年 (140)	1学期	10月	(事例1-5-1)	学校生活 (3)	p.102														
			11月		クリスマス (3)															
			12月		卒業式 (3)															
	第5学年 (140)	2学期	1月		自己紹介とジェスチャー (3)															
			2月		アルファベット (4)															
			3月		誕生日 (3)															
第6学年 (140)	3学期	4月		できること (3)																
		5月		世界の子どもたちの生活 (3)																
		6月		時刻と一日の行動 (3+3)																
第7学年 (140)	1学期	7月		ハロウイン (1)																
		8月		クリスマス (1)																
		9月		世界の物語 (3)																
第8学年 (140)	2学期	10月		自己紹介とジェスチャー (3)																
		11月		アルファベット (4)																
		12月		誕生日 (3)																
第9学年 (140)	3学期	1月		できること (3)																
		2月		世界の子どもたちの生活 (3)																
		3月		時刻と一日の行動 (3+3)																

1 全体像について

(1) 各学年の目標

・各学年の目標は、【系統性】の理解に資するよう、各学校において、**実情に**応じ、系統表やレッスンプランの例を参考としながら適切に定める。

(2) 単元名

・単元名は、「**コミュニケーション活動**」(場面・働き)の【**連続性**】(スバイラルを含む)が象徴されるように名付けてある。

(3) 【連続性】確保と【協働】推進の視点

・【**連続性**】確保と【**協働**】推進の視点を示してあり、各々を取り上げている事例に○、重点的に取り上げているものに◎を付してある。

(4) 収録したレッスンプラン

・「全体像」中の網掛けは、指導事例として「**レッスンプラン**」を収録している単元を示す。

○小学校は、前書「**すぎなみ小学校外国語活動・レッスンプラン集(平成24年3月)**」において、6年間の全100時数分のレッスンプラン例を収録してある。本書では、前書から【**系統性**】の理解や【**連続性**】の確保、【**協働**】の推進を示すに当たって特に有益と考えられるものを選び、再構成して収録してある。

○中学校は、成長の多様性をより考慮し、例えば教科書に示される各Lessonの指導事例ではなく、各学年の各学期末～次学期開始に、当該期間の学習を総まとめする「**プロジェクト型**」学習のレッスンプラン例を収録してある。各学校においては、各プロジェクトが十分に実施できることを目標に指導計画を作成、各学年・学期の学習指導を構想・展開していくことが望まれる。

※中学校の教科書は、「Sunshine English Course」(平成24年度用、開隆堂)に準拠

2 系統表について

(1) 目標・内容(事項)の【**系統性**】の構造的理解、評価の方法の【**連続性**】の確保に資するよう、単元ごとの「**学習到達目標**」、それに準拠した「**単元の観点別学習状況評価の規準**」を掲載してある。

3 各レッスンプランについて

(1) 各レッスンプランは、「**全体像**」「**系統表**」「**前後の単元・学年のもの**」、再構成化した学習指導要領の「**目標・内容(事項)**」、「**指導に当たっての配慮点・指導計画の作成・内容の取扱い**」と同時に参照することが望ましい。なお、各プランの内容は、細かな学習や指導の手立てよりも、**系統性・連続性の理解・確保・協働の推進の量**となることを重視している。

(2) 9年間を通したCAN-DO リストの形での学習到達目標の設定に資するよう、単元の目標と評価規準を「**コミュニケーション活動に即して具体化した評価規準**」を示してある。

(3) 「**指導目標・内容**」の【**系統性**】と「**コミュニケーション活動**」の【**連続性**】、指導事項としての「**言語材料**」(音声や基本的な表現、文法事項)の配列を概説してある。

(4) 方法の【**連続性**】の確保に関するポイントも、指導内容の次枠である「**コミュニケーション能力**」と「**言語や文化に対する理解**」から、前後の単元・学年を中心に解説してある。

(5) 人材の【**協働**】の推進に関するポイントや可能性の提案を、「**自校内**」「**同校種内**」「**異校種間**」「**学校外**」から示してある。

(6) 指導計画は、「**主な学習活動**→**指導事項**→**学習活動に即した具体的評価規準**」を軸にまとめている。主な学習活動の「**主な**」の規準は、学習指導要領上の指導事項がある＝目標に準拠した評価をする場面である。

(7) 各時(本時)のレッスンプランは、小学校と中学校で掲載方法が異なる。

○小学校は、(単元中の) **1時数分の全て**を掲載してある。

○中学校は、**特にポイントになる時、各時のポイントになる部分**を抽出して掲載してある。特にMy Project 1では、最初のProjectとして単元計画中の全時のポイント解説している。Project 2以降は、Project 1のプランと同時に参照することが望ましい。

(8) 単元の活動や学習の成果をイメージできるよう、**児童生徒の活動している姿**、写真を添えて掲載してある。

事例 1-1-1	小学第1学年 9月	Keywords: 触れる、じっくり聞く、聞いたままをまねる、楽しむ
就学前教育		本単元
小学校第1学年10月「ハロウィーン」		
◆◆ あいさつ ◆◆		

1 単元の目標

- ・ 挨拶の言葉・表現に触れ、積極的にまねようとする。 (コミュニケーション)
- ・ 日本語と外国語の音声やその強弱、音素の違いに触れる。 (言語・文化)

2 目標に準拠した評価規準

	【関】コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【慣】外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元の 評価規準	新しい言葉や表現を、積極的に聞いたり、まねたりしようとしている。	英語の音声に触れ、リズムを楽しんでいる。	日本語と外国語の音声やその強弱、音素の違いに触れている。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	①新しい言葉や表現を、積極的に聞いたり、まねたりしようとしている。	①英語の音声に触れ、リズムを楽しんでいる。	① [言] 日本語と外国語の音声やその強弱、音素の違いに触れながら活動している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 小学校での外国語活動の導入となる本単元は「あいさつ」であり、コミュニケーション活動に即した目標は「挨拶の言葉・表現に触れ、積極的にまねようとする」、また「日本語と外国語の音声・音素の違いに触れる」である。コミュニケーションの場面の連続性としては、第2学年9月に同じく「あいさつ」を扱う。しかし挨拶は、毎時間の外国語活動において用いる表現である。なお、第1学年では「触れる」、第2学年では「親しむ」というように活動内容が系統的に発展していく。

イ [言語材料(音声や基本的な表現)] 主な音声や基本的な表現としては、下表を前提とする。小学校第1学年から第4学年では、外国の言語や文化に初めて触れることに配慮し、友達との関わりを大切に、外国語に触れる活動や日常生活や学校に関わる活動を、身近で基本的な表現を使いながら、体験的なコミュニケーション活動を行う必要がある。挨拶は、「関わり」の上でも「日常生活・学校」を送る上でも最も身近で基本的な表現であると言え、コミュニケーションを開始する最初の契機となるものである。

就学前教育	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
—	〈第1学年 9月「あいさつ」〉 Hi. How are you doing? Pretty good., etc.	〈第2学年 9月「あいさつ」〉 Hello. How are you doing? Pretty good., etc. 〈第2学年 1月 「ともだちさがしゲーム」〉 Hello, How are you doing? / Pretty good. What's your name? / My name is ~., etc. 〈第5学年 4月「あいさつ」〉 My name is ~. I like ~., etc.

Ⅰ 小中一貫教育
理論編

Ⅱ 外国語教育
理論編

Ⅲ 外国語教育
実践編
全体・系統

Ⅲ 外国語教育
実践編
小学校

Ⅲ 外国語教育
実践編
接続・導入

Ⅲ 外国語教育
実践編
中学校

Ⅳ 資料編

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア [各時の展開] 小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育 9 年間を通した連続性が確保されていく。

イ [スパイラルを通じた慣れ親しみ] 音声や基本的な表現は、6 年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6 年間の各単元でスパイラルに出現するように配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ [評価と活動の記録] 小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第 5・6 学年においては、中学校の 4 観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておき、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどとしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ [コミュニケーション能力（音声や基本的な表現への慣れ親しみ）] 初めて外国語に触れることに配慮し、表現をじっくり聞かせた上で、できる／できないの視点からではなく、挨拶に対する応答の言葉・表現を楽しんでまねさせることから活動を始めるようにする。ここでは触れることにとどめ、第 2 学年の同単元では、表現をある程度聞かせた後にまねさせることで親しみをもたせていくことになる。

第 1・2 学年の挨拶に関する活動は、第 5 学年で世界の様々な挨拶に触れる素地になる。なお、挨拶は、コミュニケーションの開始として捉え、挨拶を挨拶にとどめず、実態に応じ、授業外も含めてコミュニケーションの「場面」を設定し「生きたことば」として音声や表現に慣れ親しませていく必要がある。

オ [言語や文化に対する理解（体験的な気付き）] 例えば“Good morning.”と「グッドモーニング」など、日本語と外国語との音声・音素の違いに触れさせ、第 2 学年の同単元では違いに気付かせていく。第 5 学年では、触れ、気付かせたことを素地に、世界の様々な言語・挨拶に触れることで、言語に対する関心をより高めていくことになる。しかし、言語や文化に対する体験的な気付きは、活動の内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないよう配慮する必要がある。つまり本単元では、コミュニケーション活動を通して、あくまで自然に音声やその強弱、音素の違いに触れさせることが重要である。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料（音声や基本的な表現）を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [同校種内] 学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で（ある程度）の整合を図ることが望ましい。

ウ [異校種間] 両校種の協働は、義務教育 9 年間を通した目標・内容（事項）の系統性、方法の連続性を「実感」をもって分かり合う先にある。したがって、とりわけ小学校低学年の教員は、積極的に中学校第 3 学年＝義務教育修了の姿に触れておく必要があるし、中学校の教員は、小学校に進学したばかりの児童の姿を知っておく必要がある。この経験が素地となり、実感のある 9 年間の系統性の理解や連続性の確保が進んでいく。また、このような経験は、小学校教員にとっては、自分たちが担った活動の成果がどのように中学校での学習に生かされていくかを知る機会にもなるし、中学校教員にとっては、いずれ自分たちが担う児童たちの学習の素地という観点から、小学校教員へ助言することもできる。

エ [学校外] ALT や JTE、外国語に堪能な地域人材等は、授業のみでなく、学校生活においても、児童に対し、英語で話しかけたり、接したりしてもらうようにしていくことで、自然と音声や基本的な表現に慣れ親しんでいくとともに、自ら外国語を表現するようになる。児童にとってこのような経験は、言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びにつながっていく。

5 本時（1/1時）

(1) 目標

- ・ 挨拶の言葉・表現、音声やその強弱、音素の違いに触れ、積極的にまねる。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
10分	1 Greetings ・授業の約束を確認する。 ・挨拶をする。返事 of 言葉を聞き、まねをする。 ・本時の流れを知る	・ 初めて外国語活動に取り組むに当たり、音声や表現をしっかり聞くこと、聞いたことを聞こえたままにまねることを伝える。 Hello. Let's start our English class. ○ 挨拶の返事をまねること。 ・ 人形などを使い、挨拶の仕方を実際 of コミュニケーションの場面を再現しながら示す。 ・ まねさせる時間を十分に取るようにする。 ・ 見通しをもてるよう本時のメニューを示す。	
	2 Songs & Chants ♪Hello Song ・ DVD を見る。 ・ ジェスチャーを付けて歌う。 ・ CD を聞いて音声をまねる。 ・ リズムに乗って歌う。	It's Songs & Chants time. ○ 英語の音声に触れリズムを楽しむこと。 Let's sing the "Hello Song." Let's watch the DVD. Let's sing. Please listen to the CD. Let's practice. Let's sing and do gestures. ・ できる／できないではなく、主体的で楽しい活動を重視するようにする。	☆【慣】① (言動・観察)
14分	3 Activity Dansinglish No.1 ・ DVD を見る。 ・ 一緒に踊る。(2回)	It's Dansinglish time. Let's watch the DVD. Let's dance together. ○ 新しい言葉や表現を積極的に聞いたりまねたりしようとする。こと。 ・ できるところからまねるようにさせる。	☆【関】① (言動・観察)
	4 Story Time Brown Bear ・ CD で話を聞く。	It's Story Time. Let's listen to the CD. ○ 外国語の音声やその強弱、音素の違いに触れること。 ・ 絵本を開き音声に沿ってページをめくる。その際、児童の様子を見ながら、次ページに期待感をもたせるよう、タイミングに配慮する。 ※ 活動のクールダウンとしての役割もある。	☆【気】① [言] (言動・観察)
5分	5 Greetings ♪Good-bye Song ①歌を聞く。 ②動作を付けて歌う。 ③CD に合わせて歌う。	Time is up. Let's sing the "Good-bye Song." ・ 初めて歌うことに配慮し、音声と動作を一つずつ取り上げ、じっくりと活動させる。 That's all for today.	



あいさつ

**Hi!
How are you
doing?**

Pretty good!



Wow!!

**It's
Dancinglish
time!**



英会話いそろ

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

事例1-1-2	小学第1学 1月	Keywords: 触れる、じっくり聞く、聞いたままをまねる、関わりを楽しむ、じゃんけん
小学校第1学年12月「クリスマス」		本単元
小学校第2学年 9月「あいさつ」		

◆◆ ともだちさがしゲーム ◆◆

1 単元の見目

- ・ 歌やチャンツ、ゲームを通した関わりを楽しもうとする。 (コミュニケーション)
- ・ 関わり合いを通して、外国語の音声や基本的な表現の楽しさに気付く。 (言語・文化)

2 見目に準拠した評価規準

	【関】コミュニケーションへの関心・意欲・態度	【慣】外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元の見目規準	歌やチャンツ、ゲームを通した関わりを楽しんでいる。	外国語を用いた歌やチャンツ、ゲームに取り組んでいる。	関わり合いを通して、外国語の音声や基本的な表現の楽しさに気付いている。
コミュニケーション活動に即した具体的見目規準	①歌やチャンツ、ゲームを通した関わりを楽しんでいる。	①外国語を用いた歌やチャンツ、ゲームに取り組んでいる。	① [言] 関わり合いを通して、外国語表現の楽しさに気付きながら活動している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導見目・内容(事項)の【系統性】の構造的な理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [見目・内容(事項)] 小学校第1学年での最終単元は「ともだちさがしゲーム」であり、コミュニケーション活動に即した見目は「(外国語を用いた)歌やチャンツ、ゲームを通した関わりを楽しむ」、また「関わり合いを通して、外国語表現の楽しさに気付く」である。コミュニケーションの場面の連続性としては、第2学年1月に同じく「ともだちさがしゲーム」を扱う。ここまでの単元では、音声や基本的な表現を一つ一つ扱ってきている。本単元では、これらをゲームの中でまとめて用い、「外国語を使ったゲームを楽しむ」ことになる。コミュニケーションの「開始」となる本活動は、第2学年の同単元も含め、外国語を通じて「かかわる」ことに比重が置かれている。なお、第3・4学年の「発表」では、「外国語を用いた」コミュニケーションに「触れる」ことになり、活動内容が系統的、且つ徐々に発展していく。

イ [言語材料(音声や基本的な表現)] 主な音声や基本的な表現としては、下表を前提とする。本単元で扱う音声や基本的な表現それ自体には、以後の単元への明確なつながりはない。しかし、第2学年の同単元では、「挨拶」に関わる基本的な表現が導入される。よって、この関連で見れば、本学年・単元では Hi, How are you doing? Pretty good.などが、第2学年の関連単元では What' your name? My name is ~、第5学年では I like ~.などへとつながっていく。

就学前教育	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
—	<第1学年 9月「あいさつ」> Hi. How are you doing? Pretty good., etc. <第1学年 1月「ともだちさがしゲーム」> Rock, Scissors, Paper, etc.	<第2学年 9月「あいさつ」> Hello. How are you doing? Pretty good., etc. <第2学年 1月「ともだちさがしゲーム」> Hello, How are you doing? / Pretty good. What's your name? / My name is ~., etc. <第5学年 4月「あいさつ」> My name is ~. I like ~., etc.

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア [各時の展開] 小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育9年間を通した連続性が確保されていく。

イ [スパイラルを通じた慣れ親しみ] 音声や基本的な表現は、6年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6年間の各単元でスパイラルに出現するように配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ [評価と活動の記録] 小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第5・6学年においては、中学校の4観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておき、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ [コミュニケーション能力（音声や基本的な表現への慣れ親しみ）] 本単元では、外国語に初めて触れることに配慮し、表現をじっくり聞かせた上で、楽しんでまねさせることから活動させていく。

なお、本単元では、ここまでに触れた音声や基本的な表現を初めてまとめたかたちで用い、ゲーム（コミュニケーション）を行う。このことを考慮し、流暢でなくとも、ゲーム（コミュニケーション）を継続することを重視するようにする。できる／できないの視点を（過度に）重視し、活動への苦手意識を経験してしまうと、音声や基本的な表現がより多様になる次学年以降の活動において、それらに親しみ、慣れ、慣れ親しんだ表現を用いてコミュニケーションを図ることが困難になる。特に、言語材料“Scissors”は音声をまねることが難しいことが予想されるため、十分な配慮が必要である。

オ [言語や文化に対する理解（体験的な気付き）] 言語や文化に対する体験的な気付きは、活動の内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になつたりしないよう配慮することが必要である。本単元で扱う「じゃんけん」は、日本において江戸から明治期に成立し、世界の国々へと普及したとの説（研究）がある。児童が、じゃんけんが日本のみで行われているゲームではないこと、「グー」「チョキ」「パー」が英語（を始めとする外国語）でどう表現されるのかということなどに気付かせることが望ましい。世界の国々の文化への関心の素地となるからである。ただし、あくまで児童の自発性を重視し、本単元で気付かなかった場合は、次学年以降の様々な単元や活動で気付きを促していくようにする。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料（音声や基本的な表現）を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [同校種内] 学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で（ある程度）の整合を図ることが望ましい。

ウ [異校種間] 両校種の協働は、義務教育9年間を通した目標・内容（事項）の系統性、方法の連続性を「実感」をもって分かり合う先にある。特に小学校第1学年においては、最初の単元における活動状況と学年最後となる本単元のそれを比較することで、児童の成長を実感することができる。連携関係にある幼稚園や子供園等の保育者、また一貫関係にある中学校教員には、本単元を土曜日（公開）授業などに位置付ける工夫により、積極的な参観を促すことが望ましい。

エ [学校外] 特に、ALT については、本単元で扱うじゃんけんのようなゲームを通し、世界の様々なゲームや遊びを伝えてもらう役割に担ってもらいたい。また、教員が活動を構想する際の材料となるよう、じゃんけんのような日本と世界とで一部共通し差異をもつゲームや遊びなどを、日常的に情報交換する機会を設定することも有効である。

4 本時 (1/1 時)

(1) 目標

- ・ 歌やチャンツ、ゲームを通じた関わりを楽しむ。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
3分	1 Greetings ・挨拶をする。 ♪Hello Song ・歌う。 ・本時の流れを知る。	Let's start our English class. Are you ready? Let's sing the "Hello song." ・見通しをもてるよう本時のメニューを示す。	
	2 Songs & Chants ♪Hello, Hello, What's Your Name? ・CD を聞く。 ・CD を聞き、音声をまねる。		
8分	It's Songs & Chants time. Let's sing the "Hello, Hello, What's your Name?" Please listen to the CD. ※Songs & Chants CD No.2 Let's sing together. ・できる／できないではなく、主体的で楽しい活動を重視するようにする。		
20分	3 Activity Dancinglish No.1 ・DVD を見る。 ・一緒に踊る。 ・カードで表現をまねる。 じゃんけんゲーム ・じゃんけんの言い方ややり方を知る。 ・先生 対 児童でじゃんけんをする。 ・隣同士でじゃんけんをする。 ・1人5個ずつおはじきを持ち自由に歩いてじゃんけんをする。なくなったら席に着く。	It's Dansinglish time. Let's watch the DVD. ※Contents No.1 Let's dance together. ・できるところのみ、まねさせるようにする。 ・絵カードを見せながら、じゃんけんの言い方のモデルを示す。 ・児童と一緒にゲームの仕方のモデルを示す。 ・ペアでまとまったゲーム(コミュニケーション)を初めて行うことに配慮し、流暢でなくてもゲームを継続させるようにする。 ○ 歌やチャンツ、ゲームを通じた関わりを楽しむこと。 ○ 外国語を用いた歌やチャンツ、ゲームに取り組むこと。 ○ 関わり合いを通して、外国語表現の楽しさに気付くこと。	☆【関】① ☆【慣】① ☆【気】① [言] (言動・観察)
	4 Story Time Brown Bear ・CD を聞く。 ・登場する動物の名前をまねる。		
12分	It's Story time. Let's listen to the CD. ・英語の音声を大切にし、CD から聞こえてくる原音をまねさせるようにする。		
2分	5 Greetings ♪Good-bye Song ・動作を付けて歌う。	Time is up. Let's sing the "Good-bye Song." That's all for today.	

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編



じゃんけんゲーム

**Rock, Scissors, Paper,
one, two, three!
Rock!**

I win!



I lose!!

It's a tie.

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (小) スタートコラム ◆◆
「聞くこと」「話すこと」の導入期の指導、就学前教育からの接続

一貫性のある教育を進めるに当たっては、外国語教育に限らず、就学前からの接続を見据えることが重要です。では、就学前の段階の外国語教育は、どのような状況にあるのでしょうか。

本コラムでは、これに関連して、二つの調査の結果を踏まえつつ、小学校の外国語活動・「聞くこと」「話すこと」の導入について大切になるポイントを考えていくことにします。

■Benesse 教育情報サイトが実施した調査（2006 年度、2008 年度）^[1]

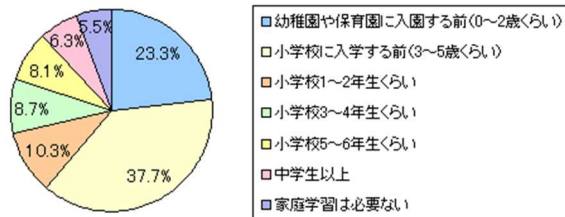
○アンケート対象・実施期間等

- ・対象：全国の当該サイトメンバー
- ・実施期間・回答者：2006 年度：2006 年 10 月 20 日～11 月 1 日 4,797 人
- ・実施期間・回答者：2008 年度：2009 年 3 月 18 日～ 3 月 19 日 1,531 人

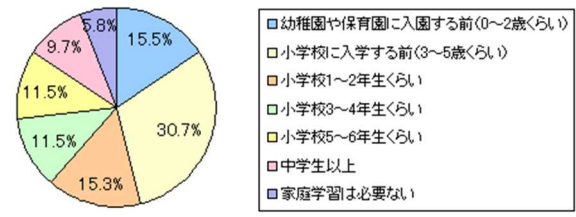
○調査結果（一部抽出）

「小学校での英語の授業だけでなく、家庭学習として英語に触れ始めるのは、何歳ごろからがよいと思いますか。もっとも近いものを1つお選びください。」

・2006 年度



・2008 年度

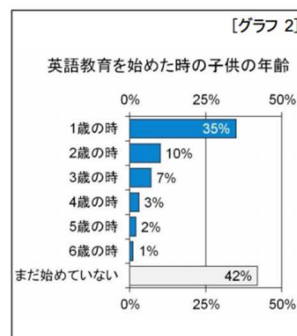
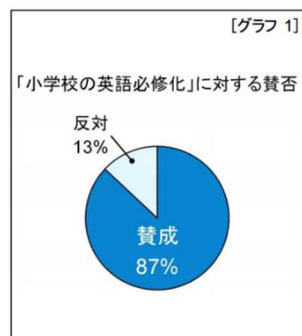


■トレンド総研が実施した調査（2014 年 1 月 9 日プレスリリース）^[2]

○アンケート対象・実施期間等

- ・対象：未就学児（小学校入学前 0 歳～6 歳）の長子がいる、20代～40代の女性、500 名
- ・調査期間：2013 年 12 月 5 日～2013 年 12 月 9 日

○調査結果（一部抽出）



[1] <http://benesse.jp/blog/20090430/p1.html> から引用・転載（2014 年 3 月 11 日現在）

[2] <http://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000058.000003448.html> から引用・転載（2014 年 3 月 11 日現在）

これらの調査結果を踏まえると、小学校入学前に、全員とは言えないまでも、複数の児童が何らかの外国語に触れる機会をもっていることが予想できます。小学校外国語活動の開始に当たっては、個人情報等への十分な配慮をした上で、学校生活や授業などの機会を通じ、小学校入学前の外国語に触れた経験について何らかの実態把握をしておくともよいかもしれません。小学校第1学年学級担任のみでなく、幼保小連携担当者の活躍も期待されるところです。

実際、こんなエピソードがあります。

教師：　　じゃあ、今日は、初めての英語活動です。まず…

児童A：　　せんせー、ぼくそれ知ってるよー？

児童B：　　せんせー、わたしもー

こういった状況にあらかじめ配慮した上で、音声や基本的な表現を使って外国語に触れる「聞くこと」「話すこと」の活動に当たっては、何より「音声をじっくり聞く」「聞いたまをまねる」、そして、「活動＝音声やリズムを楽しむ」ことが大切です。

けれど私たちは、どうしても、「しっかり教える」「身に付いたかを確認する」という他教科の指導のやり方を外国語活動にも当てはめてしまいがちです。また、まねて表現させることを急ぎ、十分な聞く時間を取らないことも多くあります。さらに、児童も教師も「文字がない」「書かない」ことが不安で、ノートにアルファベットなどを書かせるところから授業を初めてしまう、といったことが考えられます。自身がかつて受けた英語の授業がそういったものであれば、なおさらかもしれません。

また、多くの教科指導では1時間1時間の「ねらい」や「課題」が決まっていることが多いものの、外国語活動では、ある意味「触れる」「楽しむ」こと自体がねらいになります。児童も教師もやる意味がはっきりしない活動をすることに、不安を覚えるかもしれません。

しかし、小学校外国語活動の目標は、あくまで「音声や基本的な表現に慣れ親しませる」ことです。特に、中学校の「不定詞」「現在完了」「関係代名詞」といった「英語のままの理解」（内容の取扱い（8）の規定と関連、外国語教育理論編 p.58, 59）を要する言語材料（文法事項）は、小学校外国語活動の素地があってこそ十分に身に付きます。言語は、その使用ルールの全てを知識として体系にまとめることはできません。なぜなら、同じ言葉でも文脈（場面）によって使い方や意味が異なるし、時間や場所の変化に伴ってルールも変わっていくからです。

だからこそ言語は、知識としてルールを覚え、読むことや書くことからではなく、日常生活や身近な場面での実際のコミュニケーション、すなわち聞くこと・話すことを通じて慣れ親しませることから学習を開始する必要があります。

最後に。音声や基本的な表現に慣れ親しませる際には、視聴覚教材を活用し、“Authentic”なものに触れさせることが大切です。この時期の児童はとても柔軟で、聞いたまを覚えてしまうからです。例えば、カタカナを付けて音読することは、特別の配慮・支援でない限り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることにならないばかりか、後の学習によく影響を残してしまいます。

事例 1-2-1	小学第2学年12月	Keywords: 触れる・親しむ、じっくり聞く、聞いたままをまねる、楽しむ、文化的背景の尊重
小学校第2学年 1 1 月「自分の名前」		本単元
小学校第2学年 1 月「クリスマス」		
◆◆ クリスマス ◆◆		

1 単元の目標

- ・ クリスマスに関係のある言葉や表現に親しむ。 (コミュニケーション)
- ・ 活動を通して、クリスマスに関係のある言葉や表現、その背景にある文化に触れる経験を重ねる。 (言語・文化)

2 目標に準拠した評価規準

	【関】コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元の 評価規準	クリスマスに関係のある言葉や表現を通じた関わりを楽しんでいる。	クリスマスに関係のある言葉や表現に親しんでいる。	活動を通して、クリスマスの背景にある言葉や表現、その背景にある文化に触れる経験を重ねている。
コミュニケーション 活動 に即した 具体的な 評価規準	①クリスマスに関係のある言葉や表現を通じた関わりを楽しんでいる。	①クリスマスに関係のある言葉や表現に親しんでいる。	① [言] 歌や絵本、ゲームを通して、クリスマスに関係のある言葉や表現に触れる経験を重ねている。 ② [文] 歌や絵本、ゲームを通して、クリスマスの背景にある文化に触れる経験を重ねている。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 本単元は「クリスマス」であり、コミュニケーション活動に即した目標は「クリスマスに関係のある言葉や表現に親しむ」、また「クリスマスの背景にある文化に触れる経験を重ねる」である。外国文化の体験的理解に関わるコミュニケーション活動の題材の連続性としては、主として、小学校の6年間を通じ、「クリスマス」とともに「ハロウィーン」を扱う。内容の系統性としては、第1・2学年で「文化に触れる」、第3・4学年で「文化に関心をもつ」、第5学年では「文化の背景にあるものの見方や考え方に触れる」、さらに第6学年では「ものの見方や考え方の違いに触れる」というように発展していく。第2学年では特に、文化に触れる経験を「重ねる」ことに比重が置かれる。

イ [言語材料(音声や基本的な表現)] 本単元の活動の題材に関わる音声や基本的な表現としては、第1学年において Merry Christmas! をはじめとしたものを扱ってきている。第5・6学年で扱う What do you want for Christmas? のように、文としてまとまりのあるもの以外については、児童の実態を十分考慮するとともに、興味や関心に応じて柔軟に扱うようにする。

関連のある前単元	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
〈第1学年12月「クリスマス」〉 Merry Christmas! Christmas tree, Santa Claus, snowman, bell, candy cane, reindeer, balls, candles, stocking, etc.	〈第2学年12月「クリスマス」〉 児童の実態、興味・関心に応じて	〈第3・4学年12月「クリスマス」〉 〈第5・6学年12月「クリスマス」〉 What do you want for Christmas?

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア【各時の展開】小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育9年間を通した連続性が確保されていく。

イ【スパイラルを通じた慣れ親しみ】音声や基本的な表現は、6年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6年間の各単元でスパイラルに出現するよう配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ【評価と活動の記録】小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第5・6学年においては、中学校の4観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておき、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ【コミュニケーション能力（音声や基本的な表現への慣れ親しみ）】第1学年の外国語活動は、標準5時数である。よって、本単元を含め第2学年でも、表現をじっくり聞かせ、楽しんでまねさせる活動を重視する。ただし、本単元でコミュニケーション活動の題材とする「クリスマス」は、日本でも年中行事として（ある程度）定着していることが予想できるため、クリスマスに関係のある言葉や表現は、多くの児童が記憶にとどめている可能性が高い。そこで本単元では、児童の実態に応じつつ、ゲームのやり方について、実際にやって見せることを基本としながらも、簡潔な英語を用いた説明を取り入れていく。

オ【言語や文化に対する理解（体験的な気付き）】外国の文化については、言語と同様、活動の内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないよう配慮し、コミュニケーション活動で用いる題材を通じ、文化の差異に体験的に気付かせていく必要がある。また、クリスマスやハロウィーンをコミュニケーション活動の題材とする場合は、児童の文化的背景に対する配慮が必要である。

なお、クリスマスは、ある特定地域において、年中行事の最大に位置付く。その意味は多様にあるものの、一つは、本行事を通した関わりにより、相手の文化的背景を尊重することにある。したがって、道徳の内容項目「郷土愛」から「国際理解」へと至る系統性との関連を考慮し、体験的な活動を通じて、ユニバーサライゼーションに基づく異文化の理解・承認の素地となる経験を重ねさせることが重要である。こうした活動の連続が、例えば中学校のLast Projectで扱う教材“OLYMPIC CHARTER”の“Fundamental Principles of Olympism”（p.206に引用掲載）の実感を伴った理解へとつながる。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア【自校内】以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料（音声や基本的な表現）を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ【同校種内】学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で（ある程度）の整合を図ることが望ましい。

ウ【異校種間】本単元のように文化的行事を題材として扱う際には、連携関係にある複数の小学校と中学校が合同で「〇〇パーティー」を実施し、中学生にStory Timeでの読み聞かせ役を担ってもらうなど、児童と生徒が交流する機会を設定することもできる。さらに、第4学年、特に第5・6学年では、児童と生徒が外国語を使ってコミュニケーションを図る機会などへと連続的に発展させていくことができる。

エ【学校外】特にALTについては、当該単元の文化理解に関する題材に対して、幼少期の楽しい思い出などをスピーチしてもらうことが望ましい。この場合は、Story Timeをそれに充てることもできる。特に小学校第1・2学年では、写真や映像などの視覚情報を重視し、Story Timeと活動が類似するようスピーチをしてもらい、学年進行や児童の実態に応じ、徐々に英語でのスピーチへと発展させていくようにする。

5 本時 (1/1時)

(1) 目標

- ・ クリスマスに関係のある言葉や表現に親しむとともに、歌や絵本、ゲームを通して、クリスマスの背景にある文化に触れる経験を重ねる。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
3分	1 Greetings		
	・挨拶をする。 ♪Hello Song ・歌う。 ・本時の流れを知る。	Hello. Let's start our English class. Let's sing the "Hello Song." ・見通しをもてるよう本時のメニューを示す。	
15分	2 Songs & Chants		
	♪We Wish You a Merry Christmas ・DVDを見る ・ジェスチャーを付けて歌う。 ・サークル(グループでもよい)になりゲーム形式でCDに合わせて歌う。	It's Songs & Chants time. Let's watch the DVD. Let's practice. Let's sing and do gestures. ○外国の文化に触れる経験を重ねること。 ・歌えるところから、楽しさを重視して歌わせるようにする。 ・歌に合わせてプレゼント箱や絵カードを回す。当りは「持っている児童」「持っている児童の両隣」等の工夫をする。	☆【気】② [文] (言動・観察)
10分	3 Activity 1		
	クリスマスじゃんけん列車 ・出会った友達と Merry Christmas! と言ってハイタッチをした後にじゃんけんをする。負けたら後ろにつながる。	Can we play a game? We'll show you how. Please watch me. ・可能な限り簡潔な英語を用い、実際にやってみせながら説明するようにする。 ○言葉や表現を通じた関わりを楽しむこと。 ○外国の文化に関係のある言葉や表現に親しむこと。 ○外国の文化に関係のある言葉や表現に触れる経験を重ねること。 ・クリスマスの楽しい雰囲気作りをする。(ツリーの周りを回る、列車先頭の児童にサンタ帽子をかぶせるなど)	☆【関】① ☆【慣】① ☆【気】① [言] (言動・観察)
5分	4 Activity 2		
	Dansinglish No.1 ・DVDを見る。 ・一緒に踊る。	It's Dansinglish time. Please watch the DVD. Let's dance together.	
10分	5 Story Time		
	Is That You, Santa? ・絵本のお話を聞く。	It's Story time. Please listen to me. ・絵本を開き音声に沿ってページをめくる。その際、児童の様子を見ながら、次ページに期待感をもたせるよう、タイミングに配慮する。 ※ <u>ALTによるスピーチに代替してもよい。</u> ※ <u>活動のクールダウンとしての役割もある。</u>	
2分	6 Greetings		
	♪Good-bye Song ・動作を付けて歌う。	Time is up. Let's sing the "Good-bye Song." That's all for today.	

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

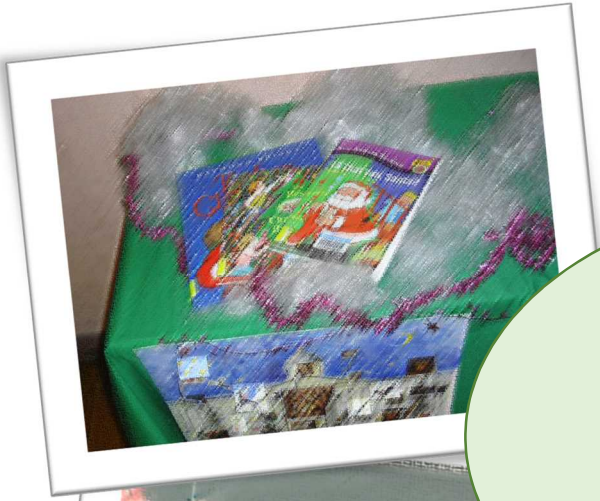
III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編



クリスマスじゃんけん列車

**Merry Christmas!
Rock, Scissors, Paper,
one, two, three!
Rock!**



**Merry Christmas!
Rock, Scissors, Paper,
one, two, three!
Scissors!**



I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (小) コラム1 ◆◆

異なる言語や文化に初めて触れる体験

「せんせい、こわいよー」

「せんせい、いやだよー」

みなさんは、初めて、自分とは異なる言語や文化をもつ人たちと出会った経験を覚えているでしょうか。その時、どんな感情を経験したでしょうか。

今の子どもたちは、自らが初めて触れた言語や文化とは異なるそれらについても、自然と受け入れることができるのかもしれません。

しかし、新しいものごとは、児童たちにとって興味や関心の対象であるとともに、時に、恐怖や不安を喚起するものでもあります。先生たちが一生懸命工夫して用意した教材や教具などが、時にそうした恐怖や不安を喚起してしまうこともあります。

それは、ハロウィーンを題材とした活動をはじめてやったときでした。先生たちは、授業の2週間も前から英語ルームを準備。がいこつや魔女、黒猫などの飾り付けを部屋中にし、たくさんの衣装も用意しました。ALT との打合せもばっちり。児童へのサプライズとして、授業の開始直後に衣装を着込んだ ALT が教室に入ってくることにしました。

実は、冒頭の「せんせい、こわいよー」は、ALT が教室に入った瞬間の児童の声でした。これが連鎖したのか、児童の幾人かは泣き出してしまいました。その幾人かの児童については、この後の1時間は、それぞれ外国語活動どころではなくなってしまったそうです。

また、ある先生は、こうした状況への配慮として、映像で異文化に触れる経験をさせてから、実際に活動するという計画を立てました。しかし、映像と実際は違うようで、やはり泣き出す児童が出てしまった例もあるようです。



こうした状況になるかどうかは、つまるところ当該の児童によります。「同じねらいを達成しようと思っても、児童が違えば、具体的な手だては異なる」という授業の基本に立ち返って、初めての異文化接触が楽しいものなるよう配慮していく必要があります。「楽しい」という経験は、後に、異なる文化、あるいはその背景にあるものの見方や考え方を理解し、承認する素地となるからです。

そして、もう一つ。この事例から分かることがあります。自分とは異なるもの、触れたことのないもの。そういったものごと、あるいは人でさえも、興味や関心のみでなく、「排除」の対象にもなり得ることで、両者は、紙一重のところにあるといってもいいかもしれません。

グローバリゼーションは、私たちの日常にも、たくさんの変化をもたらしつつあります。私たちは、今、日常的に言語や文化の違いを超え、遊ぶ子どもたちの姿を思い浮かべることができるはずで

ある児童が、こんなことを言っていました。小学校1年生です。

「先生、あの子と遊びたい。でも、なんて言えばいいのか分かりません。」

ここでの「なんて言えばいいのか分かりません」には、二つの意味があります。一つ、もっている言語は同じでも、遊びたいときになんと言えばいいのか分からない。二つ、異なる言語をもつ者同士、互いの言語で「遊ぼう」と語りかけるその仕方が分からない。

こうして言葉をテキストに起こしてみると、言語、ひいては文化が同じであろうがなかろうが、子どもたちの素直な気持ち（意）は「同じ言葉」に表現されるということが分かります。



そんな児童がいたときは、そっと支援してあげてください。

事例 1-3-1	小学第3学年 1, 2月	Keywords: 触れる・慣れる、まとまりのある音声や基本的な表現、振り返り
小学校第3学年 1 2月「クリスマス」		本単元
小学校第4学年 4月「曜日」		

◆◆ 発表 ◆◆

1 単元の目標

- ・ これまでに慣れてきた音声や基本的な表現を使い、聞いたり話したりする。 (コミュニケーション)
- ・ 日本語と外国語の音声の違いに関心を持ち、英語の音声的な特徴に気付く。 (言語・文化)

2 目標に準拠した評価規準

	【関】コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【慣】外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元の 評価規準	アイコンタクトやジェスチャーを 付けながら、積極的に関わろうと している。	これまでに慣れてきた音声や基本 的な表現を使い、聞いたり話したり している。	日本語と外国語の音性の違いに関 心を持ち、英語の音声的な特徴に気 付いている。
コミュニケー ション活 動に即した 具体的な 評価規準	①アイコンタクトやジェスチャーを 付けながら、積極的に関わろうと している。	①これまでに慣れてきた音声や基本 的な表現を使い、聞いたり話した りしている。	① [言] 日本語と外国語の音声の違い に関心を持ち、英語の音声的な 特徴に気を付けながら発表の準備 をしたり、発表したりしている。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 小学校第3学年での最終単元は「発表」であり、コミュニケーション活動に即した目標は「これまでに慣れてきた音声や基本的な表現を使い、聞いたり発表したりする」、また「日本語と外国語の音声の違いに関心を持ち、英語の音声的な特徴に気付く」である。コミュニケーションの場面としては、第1・2学年の「ともだちさがしゲーム」から始まる連続性上にあり、これ以降の全学年・最終単元が同じく「発表」、第6学年では「卒業スピーチ」を扱う。活動内容としては、第1・2学年のコミュニケーションの「開始」となる「かかわり」に比重を置いた「ゲーム」を受け、第3・4学年では音声や基本的な表現を使った「発表」を通じて「外国語を用いた」コミュニケーションに「触れる」段階となり、第5・6学年では「思いや考えを伝え合う」コミュニケーションへと系統的に発展していく。

イ [言語材料(音声や基本的な表現)] 本単元における音声や基本的な表現としては、これまでに慣れてきた音声や基本的な表現の全てが含まれる。なお、これまでの単元においても、アイコンタクトやジェスチャーなどの言語によらないコミュニケーションの手段には、様々な活動を通じて体験してきている。しかし本単元からは、徐々に、児童の主體的なアイコンタクトやジェスチャー等を扱っていくようになる。

関連のある前単元	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
〈第1・2学年 1月 「ともだちさがしゲーム」〉 当該単元までの音声・基本的な表現	〈第3学年 1, 2月「発表」〉 当該単元までの音声・基本的な表現 言語によらないコミュニケーションの 手段(アイコンタクト・ジェスチャー等)	〈第4学年 1, 2月「発表」〉 当該単元までの音声・基本的な表現 〈第5学年 3月「発表」〉 当該単元までの音声・基本的な表現 〈第6学年 3月「卒業スピーチ」〉 当該単元までの音声・基本的な表現

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア [各時の展開] 小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育9年間を通じた連続性が確保されていく。

イ [スパイラルを通じた慣れ親しみ] 音声や基本的な表現は、6年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6年間の各単元でスパイラルに出現するよう配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ [評価と活動の記録] 小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第5・6学年においては、中学校の4観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておく、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ [コミュニケーション能力(音声や基本的な表現への慣れ親しみ)] 連続性上にある第1・2学年「とちだちさがしゲーム」では、流暢でなくとも、ゲーム(コミュニケーション)を継続することを重視した。本単元「発表」では、アイコンタクトやジェスチャー、表情を交え、ある程度まとまりのある音声や基本的な表現での発表を重視する。なお、「ある程度まとまりのある」とは、これまでに体験した歌やチャンツ、英会話たいそう、絵本、またそれらの一部分である。質・量ともにどの程度のまとまりを発表させるかについては児童の実態に応じて判断するとともに、発表や準備時に、必要な支援を行うようにする。

オ [言語や文化に対する理解(体験的な気付き)] これまでの単元を通じ、日本語になっている英語と英語のままの音声の違いに触れてきている。本単元で意識する必要があるのは、児童自身が音声の違いに気を付けながら発表をすることである。ただし、あくまで重視するのは体験的な気付きであり、音声の違いや正確な発音を過度に追究することは避けるようにする。このことは、小学校6年間を通して同様である。

なお、「振り返りカード」を使った発表の振り返りは、第6学年の「相互評価シート」へ連続するとともに、発表の準備過程での協同学習と合わさって、「自己評価カード」を用い、学習到達目標に準拠して自らの学習状況を評価、課題を克服しながら進める中学校での「プロジェクト型」学習の素地となる。義務教育を通じ、自律的学習者として成長できるよう、学年進行や児童の実態に応じ、自己、ペア、グループの学習形態を自ら組み合わせることが大切である。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料(音声や基本的な表現)を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [同校種内] 学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で(ある程度)の整合を図ることが望ましい。

ウ [異校種間] 学年ごとの目標は、児童生徒や地域の実態に応じ、各学校が適切に定めるものとされている。したがって、本単元のように、学年の最終単元である程度のまとまりのある発表をさせる際には、連携・一貫関係にある中学校の教員と協働し、且つ、9年間を見通した学年目標に基づき、発表のまとまりの程度や長さ、量について十分検討を重ねることが望ましい。

エ [学校外] ALT や JTE、外国語に堪能な地域人材を活用し、本単元までに、英語のままの音声に十分に触れさせておくことが、日本語との音声の違いに気を付けながら発表する素地となる。特に発表など、まとまりのある音声や基本的な表現を扱う機会においては、ALT をコメント役とした協力的指導を展開することで、英語に特有、且つ、言語によらないコミュニケーションの手段を含めた称讃表現のバリエーションまた、称讃のタイミングなど、教師が学ぶことも多いと考えられる。

4 単元の学習・指導と評価の計画（2時）

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	◎これまでに慣れてきた音声や基本的な表現を振り返り、発表の準備をする。 1 Greetings 2 Songs & Chants ・これまでに慣れてきたと歌とチャンツをもう一度やってみる。 3 Activity1 ・これまでに慣れてきた Dansinglish をもう一度やってみる。 4 Story Time ・これまでの絵本を読む。 5 Activity2 ・これまでに慣れてきた歌やチャンツ、Dansinglish、絵本から発表するものを選び、発表の準備をする。 6 Greetings	○ 言語によらないコミュニケーションの手段を活用して積極的に関わろうとすること。 ○ これまでに慣れてきた音声や基本的な表現を振り返ること。 ○ 日本語と外国語の音声の違いに関心を持ち、英語の音声的な特徴に気付くこと。	☆【関】① ☆【慣】① ☆【気】① [言]
2 (本時)	◎これまでに慣れてきた音声や基本的な表現を発表する。 1 Greetings 2 English Show ・グループごとに準備したものを発表する。 3 Greetings		☆【関】① ☆【慣】① ☆【気】① [言]

♪ Hello. Hello.
Hello,
how are you?

I'm fine. I'm
fine. I'm fine.
Thank you.♪

And you?
♪

I'm fine.
Thank you!



発表

I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編

5 本時 (2/2時)

(1) 目標

- ・ これまでに慣れてきた音声や基本的な表現を発表する。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・ 指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
8分	1 Greetings ・ 挨拶をする。	Let's start our English class. We are going to have an English Show today. ・ それぞれが自信をもって取り組めるよう、アドバイスや声掛けを行う。	
	・ グループごとに発表の準備をする		
35分	2 English Show ・ グループごとに発表する。	Let's start our English Show. There are Greetings, Songs & Chants, Dansinglish, Activity and Story Time. ・ 授業の流れと同じ順番で発表を行うようにさせる。 ・ ①～⑥は一例であり、グループで選択したものを発表させる。 ・ 主体的に参加できるように、進行や発表材料、出入りなどについて適宜支援する。 ・ ⑤の Bears in the Night については、発表グループのリードに合わせ、クラス全体で Story を演じることもできる。 You did a good job. ・ 今まで活動してきたことに自信がもてるよう、グループの発表後に賞賛するコメントをする。 ・ 「 <u>振り返り</u> 」カードを使って、 <u>自分の発表を振り返る。ただし、できる/できないの評価になり過ぎないように十分配慮する。</u>	☆【関】① ☆【慣】① ☆【気】① [言] (発表・観察)
	①Greetings ♪Hello Song ②Songs & Chants ♪Rainbow ♪Seven Steps ③Dansinglish (No.4) ④Activity (game) Simon Says ⑤Story Time Bears in the Night From Head to Toe ⑥Greetings ♪Good-bye Song ・ 発表を振り返る。		
2分	3 Greetings ・ 挨拶をする。	You did very well today. We're very proud of you all. Thank you very much for such a wonderful English Show. See you next time. Bye.	

振り廻りカード 今日の自分の活動を振り廻ろう!				
1	Big Voice (大きな声で!)	Very Good	Good	Try Next
2	Eye Contact (アイコンタクトをしながら!)	Very Good	Good	Try Next
3	Smile (笑顔で!)	Very Good	Good	Try Next
4	Try (やってみよう!)	Very Good	Good	Try Next

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

事例1-4-1	小学第4学年10月	Keywords: 触れる・慣れる、最初から最後まで通す、日本語での説明は最小限、文化的背景の尊重
小学校第4学年 9月「数」		本単元
小学校第4学年11月「動物」		

◆◆ ハロウィーン ◆◆

1 単元の見目標

- ・ ハロウィーンに関係のある言葉や表現に慣れ親しむ。 (コミュニケーション)
- ・ 活動を通して、ハロウィーン背景にある文化に関心を高める。 (言語・文化)

2 目標に準拠した評価規準

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】 言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元 の評価規準	言語によらないコミュニケーションの手段を使ったり、ハロウィーンに関係のある言葉や表現を使ったりしながら、積極的に関わろうとしている。	ハロウィーンに関係のある言葉や表現に慣れ親しんでいる。	活動を通して、ハロウィーン背景にある文化に関心を高めている。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	①アイコンタクトをしたり、ジェスチャーや表情を付けたりしながら関わっている。 ②ハロウィーンに関係のある言葉や表現を使い、積極的に関わろうとしている。	①キーワードゲームを通してハロウィーンに関係のある言葉や表現に慣れ親しんでいる。	① [文] 歌や絵本、ゲームを通して、ハロウィーン背景にある文化に関心を高めながら活動している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的な理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 本単元は「ハロウィーン」であり、コミュニケーション活動に即した目標は「ハロウィーンに関係のある言葉や表現に慣れ親しむ」、また「ハロウィーン背景にある文化に関心を高める」である。外国文化の体験的理解に関わるコミュニケーション活動の題材の連続性としては、主として、第1学年から第3学年、また、以降の学年においても、「ハロウィーン」とともに「クリスマス」を扱う。内容の系統性としては、第1・2学年で「文化に触れる」、第3・4学年で「文化に関心をもち」、第5学年では「文化背景にあるものの見方や考え方に触れる」、さらに第6学年では「ものの見方や考え方の違いに触れる」というように発展していく。

イ [言語材料(音声や基本的な表現)] 本単元の活動の題材に関わる音声や基本的な表現としては、第1・2学年において Trick or treat? や Happy Halloween! を中心に扱ってきた。第5・6学年で扱う Who am I?, You are ~, I'm ~. のように、文としてまとまりのあるもの以外については、児童の実態を十分考慮するとともに、興味や関心に応じて柔軟に扱うようにする。

関連のある前単元	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
<第1学年から第3学年10月「ハロウィーン」> Trick or Treat? Happy Halloween!, black cat, ghost, jack-lantern, mummy, witch, skeleton, monster, etc.	<第4学年10月「ハロウィーン」> 児童の実態、興味・関心に応じて	<第5・6学年10月「ハロウィーン」> Who am I? / You are ~. I'm ~.

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア [各時の展開] 小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育 9 年間を通した連続性が確保されていく。

イ [スパイラルを通じた慣れ親しみ] 音声や基本的な表現は、6 年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6 年間の各単元でスパイラルに出現するよう配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ [評価と活動の記録] 小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第 5・6 学年においては、中学校の 4 観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておく、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ [コミュニケーション能力 (音声や基本的な表現への慣れ親しみ)] 歌やチャンツは、第 3 学年と比較し、語のまとまりが長くなり、内容も豊かになる。しかし、例えば、言えなかったところを何度も言い直させるなど、過度な繰り返し (練習) は避けるとともに、途中で止めることなく最初から最後まで通すことを基本に、音声として聞こえた表現をまねさせることを重視する。なお、ゲーム (キーワードゲーム) のやり方については、ここまでの学年においても、可能な限り簡潔な英語を用い、実際にやって見せながら説明をしてきている。ただし、ここまでに扱ったゲームは、既に日本のゲームとして体験したことがあるものが多く、改めての説明を必要としないことが多かった。本単元を含め、新しいゲームを体験させる際には、必要に応じ、日本語での説明を、最小限にとどめつつ加えるようにする。

オ [言語や文化に対する理解 (体験的な気付き)] 外国の文化については、言語と同様、活動の内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になつたりしないよう配慮し、コミュニケーション活動で用いる題材を通じ、文化の差異に体験的に気付かせていく必要がある。また、ハロウィーンやクリスマスをコミュニケーション活動の題材とする場合は、児童の文化的背景に対する配慮が必要である。また、特に外国文化の理解については、道徳の内容項目「郷土愛」から「国際理解」の系統に配慮することも重要である。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料 (音声や基本的な表現) を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [同校種内] 学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で (ある程度) の整合を図ることが望ましい。

ウ [異校種間] 本単元のように文化的行事を題材として扱う際には、特に第 4 学年、あるいは第 5・6 学年以降、連携関係にある複数の小学校と中学校とが合同で「〇〇パーティー」を実施するなど、児童と生徒が交流する機会を設定することもできる。その際には、中学校生徒からも英語でスピーチをしてもらうなどの内容を考えることも必要である。

エ [学校外] 特に ALT については、当該単元の文化理解に関する題材に対して、幼少期の楽しい思い出などを、適宜日本語を交えつつ、簡単な英語でスピーチしてもらうことが望ましい。その際には、道徳の内容項目「郷土愛」から「国際理解」の系統を踏まえてもらうことが大切である。例えば第 4 学年の場合、「我が国の伝統と文化に親しむ」「外国の人々や文化に関心をもつ」ことが趣旨となる。したがって、スピーチの内容には、外国の文化のみでなく、外国の人から見た日本の伝統や文化と関連付けた内容が含まれることが望ましいことになる。

5 本時（1/1時）

(1) 目標

- ・ ハロウィーンに関係のある言葉や表現に慣れるとともに、歌や絵本、ゲームを通して、ハロウィーンの背景にある文化に関心を高める。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
3分	1 Greetings ・挨拶をする。 ♪Hello Song ・歌う。 ・本時の流れを知る。	Hello. Let's start our English class. Let's sing the "Hello Song." ・見通しをもてるよう本時のメニューを示す。	
	2 Songs & Chants ♪Let's Go Trick-or-Treating ・DVDを見る。 ・表現とジェスチャーをまねる。 ・歌う。	It's Songs & Chants time. Let's watch the DVD. Let's practice. Let's sing and do gestures. ○言葉によらないコミュニケーションの手段を使いながら関わること。 ○外国の文化に関心を高めること。	☆【関】① ☆【気】① [文] (言動・観察)
7分	3 Activity 1 Keyword Game ・ゲームのやり方を知る。 ①ペアになり、消しゴムを一つ用意する。 ②キーワード（Halloweenの言葉）を一つ決める。 ③キーワードが聞こえたら消しゴムを取る。早く取った方が勝ちとする。 ・Halloweenの言葉をまねる。 ・ゲームをする。	Let's play a game. We'll show you how. Please watch me. ・可能な限り簡潔な英語を用い、実際にやってみせながら説明するようにする。 ○言葉や表現を使い、積極的に関わろうとすること。 ○外国の文化に関係のある言葉や表現に慣れ親しむこと。 ・ハロウィーンはあくまで活動の題材とし、体験的に触れるにとどめるようにする。	☆【関】② ☆【慣】① ☆【気】① [文] (言動・観察)
	4 Activity 2 Dancinglish No.7 ・DVDを見る。 ・一緒に踊る。 ・DVDのPractice Timeを見る。 ・カードで表現をまねる。 ・AとBに分かれてまねる。 ・パートを交代する。	It's Dansinglish time. Please watch the DVD. Let's dance together. Let's practice. Please sing and do gestures together. ・最初は、Aを教師、Bを児童とする。 Please change the parts.	
10分	5 Story Time Who Stole the Cookies? ・CDで話を聞く。 ・CDの音声をジェスチャーを付けてまねる。	It's Story time. Let's listen to the CD. ・児童の実態によっては、Stella the witch at Halloweenなどの紙芝居、ALT等によるスピーチで代替してもよい。	
	6 Greetings ♪Good-bye Song ・動作を付けて歌う。	That's all for today. Let's sing the "Good-bye Song." ※ 児童の実態と必要に応じ、カードなどで活動を振り返らせる。ただし、できる／できないの評価になり過ぎないように十分配慮する。	

Ⅰ
小中一貫教育
理論編

Ⅱ
外国語教育
理論編

Ⅲ
外国語教育
実践編
全体・系統

Ⅲ
外国語教育
実践編
小学校

Ⅲ
外国語教育
実践編
接続・導入

Ⅲ
外国語教育
実践編
中学校

Ⅳ
資料編



Keyword Game



I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (小) コラム2 ◆◆
学習の評価と記録

ここでは、「学習の評価と記録」に関わる基本的な知識から確認していきましょう。
小中一貫教育理論編 p.22, 23、外国語教育理論編 pp.47-51.も併せて参照してください。

外国語活動における評価・記録は、指導要録への記載事項とし、

「評価の観点を記入した上で、それらの観点到照らして、児童の学習状況に顕著な事項がある場合にその特徴を記入する等、児童にどのような力が身に付いたかを文章で記述する」

「評価の観点については、設置者は、小学校学習指導要領に示す外国語活動の目標を踏まえ、別紙5〔コミュニケーションへの関心・意欲・態度、外国語への慣れ親しみ、言語や文化に関する気付き〕を参考に設定する。また、各学校において、観点を追加して記入できるようにする」

とされています^[1]。

このことから、評価・記録は、数値によってではなく、各観点的趣旨^[2]に即し、コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準を設定、教師による「行動観察」、児童による「自己評価」「相互評価」などを方法として組み合わせ、継続的に活動を記録していく必要があります。

成績表等にも、上記を踏まえ、例えば1学期には「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、2学期には「外国語への慣れ親しみ」、3学期には「言語や文化に関する気付き」を記入するなど、1年度間にわたって、3観点がまんべんなく扱われるよう配慮します。

もちろんこれは例です。その他にも、学期ごとに3観点到わたって活動を記録するなどの選択肢も考えられます。そして、そうした記入のルールを定める際には、中学校における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定（外国語教育理論編 pp.47-52.）と同じく、その検討体制として、

「学習到達目標の設定過程に外国語担当教員等全員が参加し、管理職の理解や協力、リーダーシップのもと、言語を用いて何ができるようになることを目指すかという観点から、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有する体制を構築する。」

を参考にしつつ、活動状況を適切に次の学年や中学校へ引き継げるよう、評価・活動を記録していくことが大切です。

[1] 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）、別紙1 小学校及び特別支援学校小学部の指導要録に記載する事項等 学習に平成22年5月11日 文部科学省 pp.3-4.

[2] [1]と同通知 別紙5 p.21

さて、コラム1でも触れたように、他教科の指導方法を外国語活動にもそのまま当てはめてしまうことは、評価・活動の記録でも同じことが起こり得ます。その際たる例は、

- 「Songs & Chants をしっかり覚えたか」
- 「基本的な表現を幾つ覚えられたか」
- 「英会話たいそうをうまくできたか」

など、「何をどの程度覚えられたか」、ひいては「できる／できない」といった、外国語活動の評価の観点の趣旨に即さない活動の記録をしてしまうことです。評価は、目標や内容（事項）の系統性を十分に理解した上で、各観点の趣旨に即した規準を設定、学習状況を評価したり活動を記録したりすることが大前提です。

「振り返りカード」や「相互評価カード」を作成する際も同様です。Big Voice, Eye Contact, Smile, Try といったいつも共通して用いる質問のみでなく、当該の単元や時間の目標や評価規準を活用してカードを作るように心がけていく必要があります。また、こうしたアンケートは、例えば校内研究や研究授業の効果検証をする際、とても有用なデータになります。

振り返りカード 今日の自分の活動を振り返ろう！					
1	Big Voice (大きな声で！)		Very Good	Good	Try Next
2	Eye Contact (アイコンタクトをしながら！)		Very Good	Good	Try Next
3	Smile (笑顔で！)		Very Good	Good	Try Next
Try (すすんでやってみよう！)					
4	(1)	学校生活に必要な言葉や表現を使って、積極的にみんなと関わった！	Very Good	Good	Try Next
	(2)	世界と日本の学校生活を比べてみて、同じところや違うところに気が付いた！	Very Good	Good	Try Next

※5と6の質問項目は、次単元「学校生活」の目標や評価規準を基に作成

加えて、先にも書いたように、全ての観点をまんべんなく評価・記録することも大切です。それは言い換えれば、児童（生徒）の学習状況を多角的に見取るということでもあります。特に中学校外国語科においては、外国語の理解と表現の能力を評価する際、「読む」「書く」、そのための「知識」のみでなく、例えばパフォーマンスやコミュニケーションのテストなどを通じて、「聞く」「話す」についても十分に評価していく必要があります。

児童生徒のよさを発見し、積極的に褒め、学習や活動の意欲へとつなげていく。教師による評価の目的は、決して活動の記録に限定されません。

事例 1-5-1	小教第5年 1月	Keywords: 思いを伝える、目標に直結する歌・チャンツ、文化背景にあるものの見方等に触れる
小学校第5学年 1 2月「クリスマス」		本単元
小学校第5学年 2月「食事」		

◆◆ 学校生活 ◆◆

1 単元の見直し

- ・ 学校生活を送るために必要な教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりする。 (コミュニケーション)
- ・ 世界と日本の学校生活の共通点や相違点に気付く。 (言語・文化)

2 目標に準拠した評価規準

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【慣】 外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】 言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元の 評価規準	学校生活に必要な言葉やそれらを含む表現を使って、積極的に自分のことを伝えたり、相手のことを知ったりしようとしている。	学校生活を送るために必要な教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現を使って、時間割を伝えたり質問したりしている。	世界と日本の学校生活の共通点や相違点に気付いている。
コミュニケーション 活動 に即した 具体的な 評価規準	①学校生活に必要な言葉やそれらを含む表現を使って、積極的に自分のことを伝えたり、相手のことを知ったりしようとしている。	①教科を表す言葉やそれらを含む表現を使って聞いたり話したりしている。 ②曜日を表す言葉やそれらを含む表現を使って聞いたり話したりしている。 ③教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現を使って時間割を伝えたり質問したりしている。	① [文] 世界と日本の学校生活の共通点や相違点に気付いて活動している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的な理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 本単元は「学校生活」であり、コミュニケーション活動に即した目標は「学校生活を送るために必要な教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりする」、「世界と日本の学校生活の共通点や相違点に気付く」である。コミュニケーションの場面としては、第4学年「曜日」から本単元、第6学年「世界の子どもの生活」や「時刻と一日の行動」の連続性上であり、活動内容としては、第4学年では音声や基本的な表現に「慣れる」から第5学年の音声や基本的な表現を使って「思いを伝える」、そして、第6学年の「思いを伝え合う」へと系統的に発展していく。本単元は、第5学年末ということもあり、第6学年の内容に接近している。また、言語や文化に対する理解(体験的気付き)に関わる活動の題材は「日常生活や学校生活」であり、第6学年では、その違いの背景にあるものの見方や考え方の違いにも触れるという内容の系統性がある。

イ [言語材料(音声や基本的な表現)] 本単元の活動の題材に関わる音声や基本的な表現としては、下表を前提とする。第4学年においては、What day is it today? や It's Monday. を扱っており、第5学年から第6学年にかけて What で始まる疑問文が系統的に配列されている。

関連のある前単元	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
〈第4学年 4月「曜日」〉 What day is it today? / It's Monday., etc.	〈第5学年 1月「学校生活」〉 What subject do you like? / I like ~., etc. 教科名	〈第6学年 10月 「世界の子どもの生活」 Excuse me., I want to go to ~., etc. 〈第6学年 11, 12月 「時刻と一日の行動」 What time is it now? / It's eleven o'clock. What time do you get up? / I get up at 6:00., etc.

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア [各時の展開] 小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育 9 年間を通した連続性が確保されていく。

イ [スパイラルを通じた慣れ親しみ] 音声や基本的な表現は、6 年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6 年間の各単元でスパイラルに出現するよう配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ [評価と活動の記録] 小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第 5・6 学年においては、中学校の 4 観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておく、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ [コミュニケーション能力 (音声や基本的な表現への慣れ親しみ)] 歌やチャンツは、これまでの学年においては、当該の単元や時の目標に直結しないものを扱っていることもある。しかし、第 4 学年あたりからは、本単元の“The Days of the Week”のように、目標に直結するものを意図的に扱うことが望ましい。一方、第 6 学年や中学校を見据え、外国語の音声やリズムを楽しみ、表現や理解の能力の素地となる Songs & Chants、Activity の英会話たいそう、Story Time の教材などは、児童の実態を考慮し、バランスよく取り入れていく必要がある。また、第 5 学年ともなると、基本的な表現は一文ないしそれ以上に及ぶこともあるため、児童によっては、まねることが困難な場合があることも予想される。原則、一文ないしそれ以上のまとまりとしてまねさせるようにし、適宜、一部分のみ言わせる、発音を補助するなどの個別の支援、また、英語リーダーやその順番などを決め、協同学習を推進していくなどの工夫をする必要がある。

オ [言語や文化に対する理解 (体験的な気付き)] 本単元では、世界の学校生活の映像を観る活動が設定されている。過度に細部にわたったり、形式的な指導になつたりしない限りにおいては、映像を見て気付いた共通点や相違点をワークシートにまとめさせるなどの活動を取り入れてもよい。こうした活動を通じて生活の共通点や相違点に気付き、その背景にあるものの見方や考え方に触れておくことが、第 6 学年においてもものの見方や考え方の違いに触れる体験の素地となる。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料 (音声や基本的な表現) を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [同校種内] 学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で (ある程度) の整合を図ることが望ましい。

ウ [異校種間] 特に第 6 学年においては、中学校への進学を見据え、中学校外国語科の教員と合同の教材研究を実施し、1 単位時間の協力的指導などを展開していくことが望ましい。その際には、年間指導計画などの単元においてそのような協働を行うのか、連携関係にある小学校との調整を行う必要もある。ただしその際には、系統性の十分な理解と連続性を確保した指導を構想することが大前提である。例えば、中学校外国語科の文法指導を前倒して実施するといったことには、特に注意する必要がある。

エ [学校外] 学校生活は、国や地域、その背景にある文化によって、日本との様々な共通点や相違点がある代表的な題材となる。したがって、高等学校や大学、インターナショナルスクール等との連携により、ALT や学生ボランティアを含めた様々な国の人、世界の国々で生活したことのある人などをゲストティーチャーとして招致することで、文化差異への気付きはより一層豊かなものになる。その際には、児童の実態を十分考慮した上で、幼少期の思い出などを簡単な英語でスピーチしてもらうこともできる。

4 単元の学習・指導と評価の計画（3時）

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	◎教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現に慣れ親しむ。 1 Greetings 2 Songs & Chants (15分) ・ The Days of the Week を歌う。 ・ 教科や曜日を使った歌やチャンツをする。(Hi! Friends 1 Lesson 8 I study Japanese Let's Chants) 3 Activity 1 (10分) ・ 教科を使った Missing Game をする。 4 Activity 2 (10分) ・ 曜日を使った Keyword Game をする。 5 Story Time (5分) ・ 読み聞かせを聞く。(My Pet) 6 Greetings	○教科を表す言葉やそれを含む表現に慣れ親しむこと。 ○曜日を表す言葉やそれを含む表現に慣れ親しむこと。	☆【慣】① ☆【慣】②
2 (本時)	◎教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりする。 1 Greetings 2 Songs & Chants (15分) ・ The Days of the Week を歌う。 ・ 教科や曜日を使った歌やチャンツをする。(Hi! Friends 1 Lesson 8 I study Japanese Let's Chants) 3 Activity 1 (10分) ・ 先生の好きな教科当てクイズをする。 4 Activity 2 (10分) ・ 好きな教科のインタビューをする。 5 Story Time (5分) ・ 読み聞かせを聞く。(My Pet) 6 Greetings	○教科を使った言葉やそれを含む表現に慣れ親しむこと。 ○学校生活に必要な言葉やそれを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりすること。	☆【慣】① ☆【関】① ☆【慣】③
3	◎学校生活に必要な言葉やそれを含む表現を使って時間を伝えたり知ったりするとともに、世界と日本の学校生活の共通点と相違点に気付く。 1 Greetings 2 Songs & Chants (15分) ・ The Days of the Week を歌う。 ・ 教科や曜日を使った歌やチャンツをする。(Hi! Friends 1 Lesson 8 I study Japanese Let's Chant) 3 Activity 1 (10分) ・ 今日の時間割は何？ (Hi! Friends 1 Lesson 8 Let's Listen 1) 4 Activity 2 (10分) ・ 世界の学校生活の映像を見る。 (Hi! Friends 1 Lesson 8 Let's Sing, Let's Chant, Let's Listen 2) 5 Story Time (5分) ・ 読み聞かせを聞く。(My Pet) 6 Greetings	○学校生活に必要な言葉やそれを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりすること。 ○世界と日本の学校生活の共通点と相違点に気付くこと。 ・形式的な指導ではなく、あくまで体験的な気付きを促すようにする。	☆【慣】① ☆【気】① [文]



I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

5 本時 (2/3時)

(1) 目標

- ・ 教科や曜日を表す言葉、それらを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりする。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
3分	1 Greetings ・挨拶をする。 ♪Hello ~ Cheers ~ ・歌う。 ・授業のルールを確認する。 ・曜日、月を確認する。	Are you ready? Let's start our English class. Let's sing the "Hello Song." English leaders, come to the front. ・ 英語リーダーの順番などを決めておき、リーダーの指示に従って歌ったり踊ったりさせる。 What are the English class rules? Smile, Eye Contact, Big voice and Be Quiet. What day is today? What is the date? ・ 児童の実態に応じ、必要ならば本時のメニューを確認してから進行する。	
15分	2 Songs & Chants ♪The days of the week ♪Let's Chants (Hi! Friends 1 Lesson 8 I study Japanese) ・ CD を聞く。 ・ 歌う。	It's Songs & Chants time. Let's listen to the CD and sing the songs. ・ 教科名は発音が難しいことも予想されるため、以後の活動も含め、発音や強勢の正確さを追究し過ぎないようにする。	
10分	3 Activity1 先生の好きな教科当てクイズ ・ ゲームのやり方を知る。 ①グループで他学年や学級の先生の好きな教科の予想を発表する。(黒板で集計) ②当該の先生に、好きな教科を質問する。予想が当たった場合は1ポイントとする。 ・ ゲームをする。	Please watch us. (1) What subjects do you like? (2) I like A and B. Please guess two subjects. Let's start. ○ 教科を使った言葉やそれを含む表現に慣れ親しむこと。 ・ 活動を楽しめるように、先生の写真を用意するなどの工夫をする。	☆【慣】① (言動・観察)
10分	4 Activity2 好きな教科のインタビュー ・ インタビューの仕方を知る。 ①ペアで好きな教科を質問し合い、カードに記入する。 ②時間内に決められた人数にインタビューし、カードに記入する。 ・ インタビューをする。	Next it's Interview time. We'll show you how. (1) What subjects do you like? (2) I like A and B. ○ 学校生活に必要な言葉やそれを含む表現を使って、自分のことを伝えたり相手のことを知ったりすること。 ・ 原則一文をまとめて言わせるようにする。ただし、個人差を考慮し、適宜部分のみ発音を補助するなどの支援を行う。	☆【関】① ☆【慣】③ (言動・観察)
5分	4 Story Time My Pet ・ 読み聞かせを聞く。	It's Story time. Please listen carefully. ・ 内容を推測しながら聞かせるようにする。	
2分	5 Greetings ♪Good-bye song ・ 動作を付けて歌う。	That's all for today. English leaders come to the front. Let's sing the "Good-bye Song." ・ 英語リーダーの順番などを決めておき、リーダーの指示に従って歌わせる。 ※ <u>児童の実態と必要に応じ、カードなどで活動を振り返えらせる。ただし、できる/できないの評価になり過ぎないように十分配慮する。</u>	

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

事例 1-6-1	小学第6学年 2, 3月	Keywords: 思いを伝え合う、相互評価、言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜び
小学校第6学年 1月「世界の物語」		本単元 接続・導入 Start Project 「自己紹介を通して積極的に関わろう」
◆◆ 将来の夢から卒業スピーチをしよう ◆◆		

1 単元目標

- 卒業スピーチを通じて、将来の夢から自分の思いを伝えたり、相手のことを知ったりするためにコミュニケーションを図る。(コミュニケーション)
- 日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付くとともに、言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付く。(言語・文化)

2 目標に準拠した評価規準

	【関】コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【慣】外国語への慣れ親しみ (外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ)	【気】言語や文化に関する気付き (言語や文化についての体験的理解)
単元の 評価規準	なりた職業について、積極的に質問したり伝えたりしようとしている。 慣れ親しんだ言葉や表現を使い、積極的に思いを伝えたり知ったりしようとしている。	様々な職業名を表す言葉や「～になりたい」という表現を聞いたり話したりしている。 慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを組み立て、将来の夢から自分の思いを伝えたり相手のことを知ったりしている。	様々な職業名の多様な言い方に気付いている。 日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付いている。 言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付いている。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	①なりた職業について、積極的に質問したり伝えたりしようとしている。 ②慣れ親しんだ言葉や表現を使い、積極的に思いを伝えたり知ったりしようとしている。	①様々な職業名を表す言葉を聞いたり話したりしている。 ②「～になりたい」という表現を使って聞いたり話したりしている。 ③「～になりたい」という表現や将来の夢に関係のある言葉や表現を使って自分の思いを伝えたり相手のことを知ったりしている。 ④慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを組み立てている。 ⑤慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを通して、将来の夢から自分の思いを伝えたり相手のことを知ったりしている。	① [言] 様々な職業名の多様な言い方に気付いて活動している。 ② [言] 日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付いて活動している。 ③ [文] 言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付きながら活動している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的な理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア【目標・内容(事項)】小学校の最終は「将来の夢」と「卒業スピーチ」の複合単元であり、コミュニケーション活動に即した目標は「卒業スピーチを通じて、将来の夢から自分の思いを伝えたり、相手のことを知ったりするためにコミュニケーションを図る」、また「日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付く」とともに「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付く」である。コミュニケーションの場面は、第1・2学年の「ともだちさがしゲーム」から始まる連続性上にあり、第3学年から第5学年までが「発表」を扱ってきている。活動内容は、第1・2学年がコミュニケーションの「開始」となる「かかわり」に比重を置いた「ゲーム」、第3・4学年では音声や基本的な表現を使った「発表」を通じて「外国語を用いた」コミュニケーションに「触れる」、第5学年は「思いや考えを伝える」コミュニケーションへ系統的に発展してきた。さらに、言語や文化に対する理解(体験的な気付き)については、小学校の到達点として、スピーチの姿勢・態度の背景にある「日本と外国のものの見方や考え方の違いに触れる」体験の素地を生かし、「言語や文化の違いを超えて、思いを伝え合う喜び」にまで気付かせていきたい。

イ【言語材料(音声や基本的な表現)】本単元では、これまでに慣れ親しんできた音声や基本的な表現、言語によらないコミュニケーションの手段の全てを、「自分の夢から卒業スピーチをする」というねらいに照らして、適宜に組み合わせて扱う。この後は、中学校外国語科の「読むこと」「書くこと」を含めた4技能の活動の中で、慣れ親しんできた言語材料を扱っていくことになる。

関連のある前単元	本単元、同学年中の関連単元	関連のある後単元
〈小学校第 1・2 学年 1 月 「ともだちさがしゲーム」〉 〈小学校第 3～5 学年 1, 2 月 「発表」〉 当該単元までの音声・基本的な表現 言語によらないコミュニケーションの 手段 (アイコンタクト・ジェスチャー等)	〈小学校第 6 学年 3 月 「卒業スピーチ」〉 当該単元までの音声・基本的な表現 各児童のスピーチに必要なもの	〈接続・導入 Start Project〉 小学校活動での音声・基本的な表現 〈中学校第 1 学年 1 学期～2 学期始め〉 主語 (一人称)、be 動詞・一般動詞 (肯定文・否定文・疑問文)、 助動詞 (do, does)、Wh Question (What, How many~?), 複数形

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校全学年共通

ア [各時の展開] 小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤とする。この展開枠は、中学校外国語科においても継承され、義務教育 9 年間を通した連続性が確保されていく。

イ [スパイラルを通じた慣れ親しみ] 音声や基本的な表現は、6 年間を通して慣れ親しませるものである。よって、各々の音声や基本的な表現は、6 年間の各単元でスパイラルに出現するよう配列してある。ただし、各単元・各時においては、音声や基本的な表現の反復や習得ではなく、それらを用いて実際にペアやグループ、学級全体でコミュニケーションを図る時間を十分に確保するようにする。

ウ [評価と活動の記録] 小学校での活動の記録、中学校での評定という差異はあっても、その基本となる考え方は観点別学習状況評価である。とりわけ小学校第 5・6 学年においては、中学校の 4 観点による学習状況評価を見据え、例えば慣れ親しみを「聞くこと」「話すこと」に分離して評価・記録しておく、成績表などにはそれらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の方法の連続性が確保され、よりの確に児童の実態は引き継がれていく。

エ [コミュニケーション能力 (音声や基本的な表現への慣れ親しみ)] 本単元では、中学校外国語科への接続を見据え、可能な限り、児童の主体性を重視した「プロジェクト型」の学習として展開することが望ましい。卒業スピーチのモデルを映像などで示す際に、スピーチの達成目標を知らせ、それに対して自分の活動状況を振り返らせる。そして、自らの課題を明らかにした上で、それを解決しながら卒業スピーチを組み立てさせていく。その際、課題を明らかにするための観点を補助したり、児童の実態によっては、中学校でのプロジェクト型の学習を見据え、1 時数程度を、自己、ペア、協同を選ばせたり組合せさせたりしながら準備や練習をする時間に充てることも考えられる。

なお、発表の際に用いる「相互評価シート」は、小学校第 3 学年 (以降) の「振り返りシート」から連続しており、中学校での CAN-DO リストの形での「自己評価シート」「相互評価シート」などに接続していく。ただし、「慣れ親しむ」ことが目標である小学校段階では、例えば振り返りや課題解決の過程が、できる/できないを評価したり、できないという自覚を過度に意識したりするものとならないよう、中学校での学習を見据え、十分配慮する必要がある。

オ [言語や文化に対する理解 (体験的な気付き)] 本単元では、日本語と英語のスピーチの姿勢・態度に関わり、両者の文 (章) 構造の違いに気付かせていくことが望ましい。英語は一般に、[主張・結論→理由・根拠→主張・結論] という構造を取ることが多い。そうした言語差異の背景には、文化を象徴するものの見方や考え方が在り、例えばそれは「自立」「自律」といったものである。ただし、小学校段階での目標は、あくまで、コミュニケーション活動の題材を通じた「体験的理解 (気付き)」である。したがって指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないよう十分配慮する必要がある。

そして、小学校の活動の集大成となる本単元においては、「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜び」への気付きが生まれる段階まで成長させていくことが望まれる。もちろん、何をもって「喜び」とするかは、小学校第 6 学年児童であっても、詰まるところ個人の価値による。しかし、この場合の「喜び」は、外国語を使ったコミュニケーションの「楽しさ」に代表される。例えば、外国語のある音声や基本的な表現に初めて児童が慣れ親しんだ時、休み時間などにおいて、児童が自発的に外国語を使ってみている姿に象徴される。楽しさは、中学校での学習意欲の素地となることを期待するものであるとともに、様々な教材を通して、世界大での絆・支え合いの大切さに自覚を深めていくことを願うものでもある。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全学年共通

ア【自校内】 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料（音声や基本的な表現）を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ【同校種内】 学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある複数の小学校で（ある程度）の整合を図ることが望ましい。

ウ【異校種間】 学年ごとの目標は、児童生徒や地域の実態に応じ、各学校が適切に定めるものとされている。したがって、本単元のように、学年の最終単元である程度のまとまりのある発表をさせる際には、連携・一貫関係にある中学校の教員と協働し、且つ、9年間を見通した学年目標に基づき、発表のまとまりの程度や長さ、量について十分検討を重ねることが望ましい。また、土曜授業や学校公開、プレスクールなどの機会において、小学校6年間の成果を多くの人々に伝えることができるよう、子供園・幼稚園の保育者、中学校の教員などから、評価コメントをもらったりする機会を設定することが望ましい。

エ【学校外】 将来の夢も、学校生活と同じく、国や地域、その背景にある文化によって、日本との様々な共通点や相違点がある題材となる。したがって、インターナショナルスクール等との連携により、ALTを含めた様々な国の人、世界の国々で生活したことのある人などをゲストティーチャーとして招致することで、文化差異への気付きはより一層豊かなものになる。その際には、児童の実態を十分考慮した上で、幼少期の思い出などを簡単な英語でスピーチしてもらうこともできる。

4 単元の学習・指導と評価の計画（3＋2時、複合単元）

単元	時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
将来の夢	1	◎様々な職業名を表す言葉に慣れ親しむ。 1 Greetings 2 Songs & Chants（10分） ・職業名を使ったチャンツをする。 3 Activity 1（10分） ・職業名を使ったゲーム①をする。 4 Activity 2（10分） ・職業名を使ったゲーム②をする。 5 Story Time 6 Greetings	○ 様々な職業名を表す言葉に慣れ親しむこと。 ○ 様々な職業名の多様な言い方に気付くこと。 ※ <u>次時以降を含め、Songs & Chants や Activity の活動内容、Story Time の教材は、児童の実態に応じて適切なものを用いるようにする。</u>	☆【慣】① ☆【気】① [言]
	2	◎「～になりたい」という表現に慣れ親しむ。 1 Greetings 2 Songs & Chants（10分） ・職業名を使ったチャンツをする。 3 Activity 1（10分） ・「～になりたい」という表現を使ったゲーム①をする。 4 Activity 2（10分） ・「～になりたい」という表現を使ったゲーム②をする。 5 Story Time 6 Greetings	○ 様々な職業名を表す言葉に慣れ親しむこと。 ○ 「～になりたい」という表現に慣れ親しむこと。 ※ <u>第2時については、児童の実態によっては第3時を繰り上げ、余剰の1時間をプロジェクト型・協働学習による卒業スピーチの準備に充ててもよい。</u>	☆【慣】① ☆【慣】②

卒業スピーチをしよう	3	<p>◎職業名を表す言葉や「～になりたい」という表現を使って、将来の夢を聞いたり話したりする。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Songs & Chants (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職業名を使ったチャンツをする。 <p>3 Activity 1 (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～になりたい」という表現を使ったチャンツをする。 <p>4 Activity 2 (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～になりたい」という表現を使って将来の夢を伝えたり聞いたりする。 <p>5 Story Time</p> <p>6 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な職業名を表す言葉に慣れ親しむこと。 ○ 「～になりたい」という表現に慣れ親しむこと。 ○ 「～になりたい」という表現や将来の夢に関係のある言葉や表現を使って、自分の思いを伝えたり相手のことを知ったりすること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【慣】① ☆【慣】② ☆【関】① ☆【慣】③
------------	---	---	---	--

卒業スピーチをしよう	1 (本時)	<p>◎これまでに慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを組み立てる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Review (15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでに慣れ親しんだ言葉や表現を振り返る。 <p>3 Activity (25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業スピーチのモデルを聞き、スピーチの達成目標を知る。 ・スピーチの達成目標を基に自分の活動を振り返り、卒業スピーチの目標を立てる。 ・発表の準備をする。 <p>4 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 慣れ親しんだ音声や基本的な表現を振り返ること。 ○ 日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付くこと。 ○ 慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを組み立てること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【気】② [言] ☆【慣】④ 																																						
	2	<p>◎卒業スピーチを通じて、将来の夢から自分の思いを伝えたり、相手のことを知ったりするためにコミュニケーションを図るとともに、日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付き、言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付く。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Songs & Chants</p> <p>3 Activity (30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業スピーチをする。 ・卒業スピーチにカードを使ってコメントする。 <p>4 Story Time (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ALT等のスピーチを聞く。 <p>5 Greetings</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="5">Evaluation Card for Friends</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="width: 5%;">1</td> <td style="width: 65%;">Big Voice</td> <td style="width: 10%;">Very Good</td> <td style="width: 10%;">Good</td> <td style="width: 10%;">So, So... Try Next</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>Eye Contact</td> <td>Very Good</td> <td>Good</td> <td>So, So... Try Next</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>Smile</td> <td>Very Good</td> <td>Good</td> <td>So, So... Try Next</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>Gesture</td> <td>Very Good</td> <td>Good</td> <td>So, So... Try Next</td> </tr> <tr> <td colspan="5">Try</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">5</td> <td>(1)</td> <td colspan="2">※自分で具体的な内容を決める</td> <td>Very Good Good So, So... Try Next</td> </tr> <tr> <td>(2)</td> <td colspan="2">※自分で具体的な内容を決める</td> <td>Very Good Good So, So... Try Next</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ○ 慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを通して、将来の夢から自分の思いを伝えたり相手のことを知ったりすること。 ○ 外国語を使って思いを伝え合う喜びに気付くこと。 ○ 日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付くこと。 	Evaluation Card for Friends					1	Big Voice	Very Good	Good	So, So... Try Next	2	Eye Contact	Very Good	Good	So, So... Try Next	3	Smile	Very Good	Good	So, So... Try Next	4	Gesture	Very Good	Good	So, So... Try Next	Try					5	(1)	※自分で具体的な内容を決める		Very Good Good So, So... Try Next	(2)	※自分で具体的な内容を決める		Very Good Good So, So... Try Next
Evaluation Card for Friends																																										
1	Big Voice	Very Good	Good	So, So... Try Next																																						
2	Eye Contact	Very Good	Good	So, So... Try Next																																						
3	Smile	Very Good	Good	So, So... Try Next																																						
4	Gesture	Very Good	Good	So, So... Try Next																																						
Try																																										
5	(1)	※自分で具体的な内容を決める		Very Good Good So, So... Try Next																																						
	(2)	※自分で具体的な内容を決める		Very Good Good So, So... Try Next																																						

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

5 本時（3/5時、卒業スピーチをしよう1/2時）

(1) 目標

- ・ これまでに慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを組み立てる。

(2) 展開

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
3分	<p>1 Greetings</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 挨拶をする。 ♪Hello～Cheers～ ・ 歌う。 	<p>Are you ready? Let's start our English class. Let's sing the "Hello Song." English leaders, come to the front.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 英語リーダーの順番などを決めておき、リーダーの指示に従って歌ったり踊ったりさせる。 	
15分	<p>2 Review</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでに慣れ親しんだ言葉や表現を振り返る。 a. 音声 b. 基本的な表現 c. 言語によらないコミュニケーションの手段 d. 外国の文化、その背景にあるものの見方や考え方 	<p>You are going to make a speech next week. I want you to tell us about your dream like this. I want to be an English teacher. I like English and Songs & Chants. Let's review what you have studied. What are they? They are ～, ～, and ～.</p> <p>○ 慣れ親しんだ音声や基本的な表現を振り返ること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「将来の夢から卒業スピーチをする」というねらいに照らして、必要なもの・適切なものをCDやDVDなども使いながら適宜取り上げるようにする。 <p>※ 取り上げる単元の例 第5学年4月「挨拶」、5月「スポーツ」 第6学年4月「自己紹介とジェスチャー」 9月「できること」、 10月「世界の子どもたちの生活」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スピーチに関わる外国の文化、その背景にあるものの見方や考え方、その違いなどについても、以下のモデルスピーチと合わせ、再度の気付きを促していくようにする。 	
25分	<p>3 Activity</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業スピーチのモデルを聞き、スピーチの達成目標を知る。 ・ スピーチの達成目標を基にこれまでの自分の活動を振り返り、課題を立てる。 <p>〈課題を立てる観点の例〉</p> <ul style="list-style-type: none"> a. 音声 ⇒相手に伝わる明瞭さ、大きさ、リズム等 b. 基本的な表現 ⇒自分の思いや考えが相手に伝わる内容とその量 c. 言語によらないコミュニケーションの手段 ⇒アイコンタクト、ジェスチャー、発表内容を補助するもの（道具、衣装等） 	<p>I'll show you an example.</p> <p>○ 日本語と英語のスピーチの姿勢・態度の違いに気付くこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前年度の第6学年児童の映像などでもよい。 <p>That's exciting! I think you can do that too.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて、適宜日本語で説明する。 ・ 振り返りカードなどを継続して実施してきている場合は、「ポートフォリオ」などとしてまとめておき、参照させるようにする。 ・ その際、できる／できないの評価に過度にならないよう配慮する。例えば、「より相手に伝わる明瞭な話し方をしよう」などが望ましく、「明瞭な話し方ができないから、それを克服しよう」などはあまり望ましくない。 ・ 「スポーツ」「食べ物」「職業」など、スピーチの話題を象徴する視覚情報を含んだカードなどを適宜用意し、準備の補助とする。 	<p>☆【気】② (言動・観察)</p>

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校


III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

	<p>・発表の準備をする。</p>	<p>Let's start.</p> <p>○ 慣れ親しんだ言葉や表現を使って卒業スピーチを組み立てること。</p> <p>・ 可能な限り主体的な課題解決を尊重しながら、適宜個別の支援を行う。</p> <p>※ 児童の実態に応じ、指導計画上の第 3 時を 2 時に繰り上げた場合は、次時を、より児童の主体性を重視した準備に充ててもよい。その際は、<u>中学校でのプロジェクト型学習を見据え、自己、ペア、協同の学習形態も、可能な限り児童自身に選ばせたり組合せさせたりする。</u></p>	<p>☆【慣】④ (言動・観察)</p>
<p>2 分</p>	<p>4 Greetings</p> <p>・挨拶をする。</p>	<p>That's all for today.</p> <p>・ 必要に応じて、これまでに慣れ親しんだ歌を歌うなどする。その場合は、英語リーダーの順番などを決めておき、リーダーの指示に従って歌わせるなどする。</p>	

卒業スピーチ



Hello, everyone.
I'm Haruno Sakura.
I want to be a CA (cabin attendant).
I can speak English.
I study English every day.
I want to go to Italy and America.
I want to be a CA, Thank you.

Great!
Nice dream.

Excellent!
I want to be a farmer
too.

Hello, everyone.
My name is Akino Kikuo.
I want to be a farmer.
I like flowers and vegetables.
I like animals, I have two rabbits.
I want to be a farmer.
Thank you!

- I 小中一貫教育
理論編
- II 外国語教育
理論編
- III 外国語教育
実践編
全体・系統
- III 外国語教育
実践編
小学校
- III 外国語教育
実践編
接続・導入
- III 外国語教育
実践編
中学校
- IV 資料編

◆◆ (小) コラム3 ◆◆

言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びとグローバル化、個にとっての学ぶことの意味

それは、移動教室・富士山の五合目での出来事でした。

児童たち： Hi! How are you doing?

外国の方： Oh, you speak English! I'm OK.

児童たち： Where are you from?

外国の方： I'm from Canada. Have you ever been to Canada?

児童たち： Yes! What's your name?

こうしたやりとりは、かれこれ 10 分くらい続きました。最初は数人だった児童も、なにごとかとたくさん集まってきました。外国の方もとても親切で、丁寧に対応して下さったようです。

実はこのとき、児童（小学校第5学年）は、外国語活動をはじめて3ヶ月くらいでした。英会話たいそうで音声や基本的な表現 10 文くらいに慣れ親しんだ段階です。普段から楽しく活動していることもあって、勢いそのままに外国の方に話しかけたそうです。外国語を使ってみたい。児童には、そんな気持ちもあったのかもしれませんが。

後から聞いてみると、児童たちは、自分たちの外国語（英語）が、こんなにも通じるとは思っていなかったそうです。だからこそ、思いが通じた・通じ合った時の喜びがひとしおだったそうです。

私たちは、この事例から何を学ぶことができるでしょうか。

実はこの事例、杉並区の目指す外国語教育像の小学校段階「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付く」（外国語教育理論編 p.43）を象徴する事例でもあります。

杉並区では、小学校第1学年から外国語活動を開始します。といっても、他教科等とのバランスに配慮しつつ、教育課程外・特設の時間、第1学年と2学年では5時数ずつ、第3学年と4学年では10時数ずつを標準（最低実施）時数としています。そして、その目標の主は、第二次性徴の発現・前青年期に入る前に、異なる言語や文化に「触れる」、そして、その「楽しさ」を味わうことです（外国語教育理論編 p.56）。

第二次性徴・前青年期に入ると、「間違いを恐れる」といった気持ちが強く出てしまう傾向があります。聞く・話すを中心とした活動であれば、なおさらです。だからこそ、加速するグローバル化の中で、多様な他者と共に生きる素地として、小学校第1学年から第4学年で「触れる」「楽しさ」を味わい、それを基盤として、小学校課程の修了までに、言語や文化の違いを超える「喜び」に気付いてほしい。

小学校段階での目指す外国語教育像には、そうした願いが込められています。

そして、そうした関係することの喜びは、一人一人にとっての、すなわち、「個人にとっての学ぶ意味」につながります。

人が学習や活動への意欲を高める要因は、複数あると言われます。その一つは、学ぶことの先に明確な目的や目標がある。別の一つは、学びや活動の対象自体に興味・関心がある。また別の一つは、分かる・できるからこそもっと学習したり活動したりしたい。そして、全てを支えている要因もあり、それが他者からの承認です。子どもたちは、例えば学習や活動で顕著な成果を出していたとしても、そこに、教師や保護者等の大人からの適切な承認がなければ、それを十分に実感できないと言います。だからこそ、特に小学校段階での児童には、他者の承認が必要です。

楽しいからもっと学びたい。学ぶから楽しい。学んでことを実際に使ってみたら、もっと楽しいし、言語や文化の違いを超え、人からも認めてもらえた。目指す外国語像にある「喜びに気付く」は、こうしたことを集約したものです。そしてそれが、将来、児童たちの「生き方」を支えていくものになることを願って。

本コラムの冒頭で紹介した経験は、ある児童にとっては、後に振り返るとき、自らの職業選択を含め、自己実現・生き方に大きく影響したものとなるかもしれません。

加速するグローバル化の中で、自らの喜び、よりよく生きたいという願いのために学習する。すなわちそれは、「個人にとっての学ぶことの意味」になるということです。

そして私たちは、小学校段階での教育を修了し、それを、中学校段階でより発展させていくこととなります。



事例1-6-2	小学校からの接続・中学校の導入	Keywords: 円滑な接続と導入、間違いを恐れず、音声と記号の対応、4技能の統合の最初の準備
小学校第6学年 3月「卒業スピーチをしよう」		本単元 My Project 1「自己紹介をしよう」
◆◆ Start Project 自己紹介を通して積極的に関わろう ◆◆		

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- 自己紹介について、間違いを恐れず、慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使い、自分のことを話して正しく伝えたり、相手のことを聞いて内容を正確に理解したりすることができる。
(コミュニケーション)
- 慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深める。
外国語を使って思いを伝え合う喜びへの気付きを深める。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】コミュニケーションへの関心・意欲・態度	【表】外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】外国語理解の能力	【知】言語や文化についての知識・理解
	単元の評価規準	間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使い、積極的に活動に取り組んだり、自分のことを話したり相手のことを聞いたりしている。	慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使い、自分の出身の学校名、趣味・特技、食べ物やスポーツ、教科などの好み、誕生日や将来の夢を話して正しく伝えることができる。	出身の学校名、趣味・特技、食べ物やスポーツ、教科などの好み、誕生日や将来の夢など慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使った自己紹介を聞いて内容を正確に理解することができる。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	①間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って積極的に関わっている。 ②間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使い、積極的に自分のことを話したり相手のことを聞いたりしている。 ③身振りや手振りをうまく利用して自己紹介をしている。 ④聞いたことについて簡単な動作や言葉で反応している。	①【話】慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使い、自分の出身の学校名、趣味・特技、食べ物やスポーツ、教科などの好み、誕生日や将来の夢を話して正しく伝えることができる。	①【聞】出身の学校名、趣味・特技、食べ物やスポーツ、教科などの好み、誕生日や将来の夢など慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使った自己紹介を聞いて内容を正確に理解することができる。	①【言】慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深めながら活動に取り組んでいる。 ②【言】外国語を使って思いを伝え合う喜びに気付きを深めながら活動に取り組んでいる。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア【目標・内容】小学校外国語活動からの接続、中学校外国語科の導入となる最初のプロジェクトは「自己紹介を通して積極的に関わろう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標の趣旨は「間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って、正しく伝えたり正確に理解したりすることができる」である。ここでの自己紹介は「聞くこと」「話すこと」が中心であり、「読むこと」が導入される。ただし、ここでの読むことは、「音声と記号の対応を認識する」、あるいはそれを「深める」ものであり、文や文章を読んで内容を理解することなどは含まれないことに留意が必要である（したがって評価においても、外国語理解の能力としての規準は設定していない）。また、校種間の接続・導入となる本単元（プロジェクト）では、特に「間違いを恐れず」ということも、これ以降の学習に大きく影響する内容となる。

イ【言語材料（音声や基本的な表現から文法事項へ）】主な言語材料（音声や基本的な表現、文法事項）の配列は、下表を前提とする。本プロジェクトでは、小学校外国語活動で慣れ親しんだ音声や基本的な表現を繰り返し用いることになる。

小学校（以前）	接続・導入（本単元）	第1学年1学期（以後）
慣れ親しんだ音声や基本的な表現 〈Dansinglish No.1〉 How are you doing? / Pretty good., etc. What's your name? / My name is~. Where're you from~? / I'm from~. 〈Brown Bear〉 What do you see? / I see a~, etc. 〈The Months of Year〉 January~ December	—	主語（一人称）、be 動詞・一般動詞 （肯定文・否定文・疑問文） 助動詞（do, does） Wh Question（What, How many~?） 複数形

(2) 学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■小学校外国語活動からの中学校外国語科への円滑な接続

ア【各時の展開】小学校段階の外国語活動では、各時の基本的な展開を「1 Greetings→2 Songs & Chants→3 Activity→4 Story Time→5 Greetings」とすることで、活動の連続性を確保する基盤としてきた。本プロジェクトでは第1時でこの基本型を使い、第2時から、中学校の展開の基本型へと緩やかに移行していく。そのため単位時間も、第1時は45分、第2・3時は50分を想定してある。

イ【コミュニケーション能力（慣れ親しみから能力の育成へ）】最も重要な点は、音声と記号の対応の認識である。本プロジェクトにおいては、小学校で音声として慣れ親しんだ基本的な表現等と記号の対応の認識を深めるため、音声と記号を同時に扱う Voice & Words の活動を設定している。具体的には、例えば第1時において、Brown Bear を材料に、聞いた音声や基本的な表現と一致するカード（記号＝文字や単語）を選んだり並び替えたりする活動や、Dansinglish の中の自己紹介に関する基本的な表現を使って問答し、聞いたものと一致するカード（連語及び慣用表現）を選ぶ活動がそれ該当し、必要に応じて、「現象＝音声＝記号」を分離せず同時提示するようにする。

なお、こうした一連の活動においては、できる／できないではなく、間違いを恐れず、楽しく活動をさせることを重視し、音声と記号の対応の認識を自然と深めさせていくことが重要である。楽しい活動を通じた関わりは、児童生徒が（入学前に）関係性を築く機会となり、中1ギャップの解消にも資するものになる。また、音声と記号の対応の認識は、中学校外国語科における本格的な読むことや書くことの導入、すなわち、4技能を統合していく最初の準備となるものである。

ウ【言語や文化に対する理解（体験的な気付きから理解と承認へ）】本プロジェクトでは、文化に対する理解の扱いはない。ただし、言語については、上記したように、音声と記号の対応の認識を深めることがそれに該当する。

エ【評価と活動の記録、評価】本プロジェクトは、中学校の観点別学習状況評価の観点を用い、診断的評価を行うものとして位置付けることができる。つまり、小学校外国語活動で慣れ親しんだ音声や基本的な表現を、中学校外国語科の指導目標・内容（事項）に準拠して評価した際に、個々の児童生徒がどのような学習状況にあるかを見取ることで、後の学習や指導に生かしていくことが重要である。

(3) 教育人材の【協働】の推進

ア【自校内】本プロジェクトは、第6学年の3学期（中学校入学前）・特設の時間に実施することを前提に構想してある。CAN-DO リストの検討体制に示されるように、学習到達目標の設定や、それに準拠した指導と評価の方法を共有した上で実施することが必須である。複数の小学校から進学してくる児童生徒の学習状況を見取り、必要ならば個別に支援をする、また、何より、小学校外国語活動の成果を中学校の学習に生かしていくためである。

イ【同校種内】連携関係にある複数の小学校がある場合は、同じ評価シートを用いて児童生徒の学習状況をまとめ、中学校へ事前に情報提供することなどが望ましい。

ウ【異校種間】本プロジェクトは、小学校と中学校が連携・協働し、中学校教員がT1、小学校教員が引き継ぎの意味を含め、複数でT2となり、協力的指導の中で展開することが望ましい。

エ【学校外】ALT や JTE、外国語に堪能な地域人材についても、異校種間と同じく、小学校と中学校が協力して指導を展開することが望まれる。ひいてはそれは、小学校外国語活動を充実させることに資する。

4 単元の学習・指導と評価の計画（3時） ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	<p>◎間違いを恐れず、慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使って積極的に関わる。</p> <p>◎音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深める。</p> <p>1 Greetings 2 Warm up ★3 Songs & Chants (10分) ・ Dansinglish No.1 を聞いて言う。 ・ I want to go to Italy.を聞いて言う。 ★4 Voice & Words (20分) ・ <u>Brown Bear</u> を材料に、聞いた音声や基本的な表現と一致するカード（文字や単語）を選んだり並び替えたりする。 ・ <u>Dansinglish</u> 中の自己紹介に関する基本的な表現を使って問答し、聞いたものと一致するカード（文字や単語）を選ぶ。 (ペア・グループ)</p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って積極的に関わること。</p> <p>○ <u>音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深めること。</u></p>	<p>単位時間 <u>45分</u></p> <p>☆【関】①</p> <p>☆【知】① [言]</p>
2	<p>◎間違いを恐れず、慣れ親しんだ外国語の音声や基本的な表現を使って積極的に関わること。</p> <p>◎音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深める。</p> <p>1 Greetings 2 Warm up 3 Songs & Chants (5分) ・ The Months of The Year を聞いて言い、その中の誕生日に関する基本的な表現を確認する。 ★4 Review (10分) ・ <u>Brown Bear</u> を材料にカルタをする。 ・ <u>Dansinglish</u> 中の自己紹介に関する基本的な表現を使い、聞いた文と一致するカードを選ぶ。 ★5 Main Contents (30分) ・ 自己紹介の基本的な構成を理解し、内容を考える。 ・ 自己紹介の練習をする。 (ペア・グループ)</p> <p>※学習者の実態によっては、自己紹介を発展させ、入学スピーチとしてもよい。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って積極的に関わること。</p> <p>○ <u>音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深めること。</u></p> <p>○ 間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使い、積極的に自分のことを話したり相手のことを聞いたりすること。</p> <p>○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。</p> <p>○ 聞いたことについて簡単な動作や言葉で反応すること。</p> <p>○ 慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って自分のことを話し正しく伝えること。</p> <p>○ 慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使った自己紹介を聞いて内容を正確に理解すること。</p> <p>○ 外国語を使って思いを伝え合う喜びに気付きを深めること。</p>	<p>単位時間 <u>50分</u></p> <p>☆【関】①</p> <p>☆【知】① [言]</p> <p>☆【関】②</p> <p>☆【関】③</p> <p>☆【関】④</p> <p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【理】① [聞]</p> <p>☆【知】② [言]</p>

Ⅰ 小中一貫教育 理論編

Ⅱ 外国語教育 理論編

Ⅲ 外国語教育 実践編 全体・系統

Ⅲ 外国語教育 実践編 小学校

Ⅲ 外国語教育 実践編 接続・導入

Ⅲ 外国語教育 実践編 中学校

Ⅳ 資料編



3	◎間違いを恐れず、外国語の音声や基本的な表現を使って自分のことを話したり相手のことを聞いたりすることができる。 1 Greetings 2 Warm up ★3 Review (5分) ・ Dansinglish, The Months of The Year, I want to go to Italy.の中の自己紹介に関する基本的な表現を確認する。 ・ 自己紹介の練習をする。 ★4 Main Contents (40分) ・ 全員の前で、自己紹介をする。	単位時間 <u>50分</u>	
	5 Greetings		☆【関】②③④ ☆【表】①【話】 ☆【理】①【聞】 ☆【知】②【言】

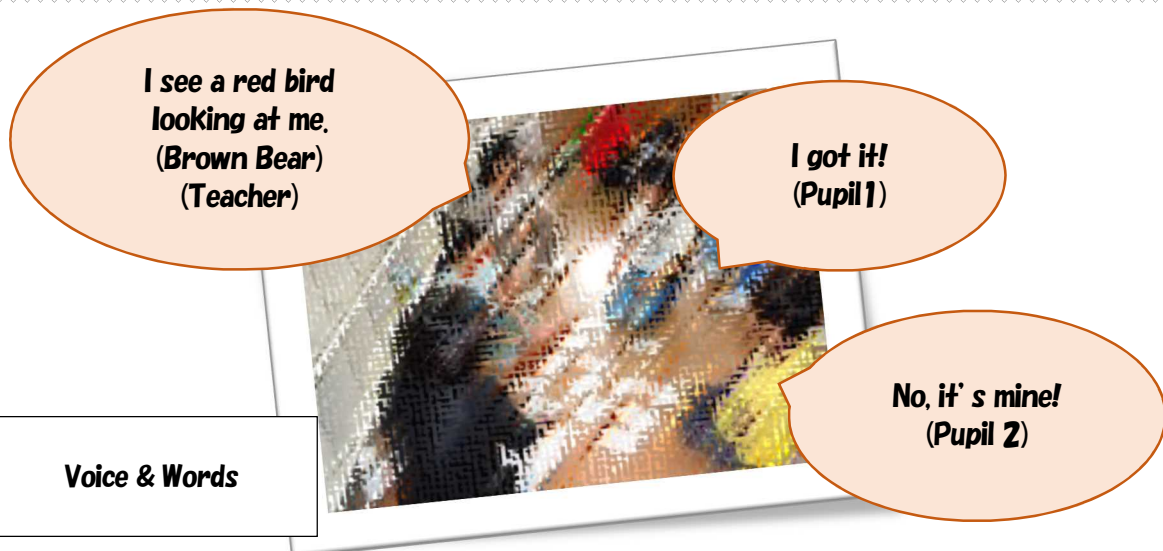
I	小中一貫教育 理論編
II	外国語教育 理論編
III	外国語教育 実践編 全体・系統
III	外国語教育 実践編 小学校
III	外国語教育 実践編 接続・導入
III	外国語教育 実践編 中学校
IV	資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 1/3時 : Songs & Chants, Voice & Words (単位時間 45分)

◎本時のねらい：間違いを恐れず、外国語の音声や基本的な表現を使って積極的に関わる。
音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深める。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
10分	3 Songs & Chants ・ Dansinglish No.1 を聞いて言う。 ・ I want to go to Italy. を聞いて言う。	・ 小学校と中学校の学習の意図的（円滑）な接続を図るために、音声やリズム、慣れ親しんだ基本的な表現など、小学校での活動内容を想起させる。 ・ 以後の学習活動のために、個々の小学校での活動状況を把握するようにする。	
<p>★Teacher Talk</p> <p>You enjoyed studying English a lot for six years in elementary school. What did you study? Do you remember Dansinglish? How about Songs & Chants? Please tell me. “Where’re you from?” Very good! That’s from Dansinglish No.1, right? “Ouch!” Yes. That’s from Dansinglish No.1 too. Today I want you to remember Dansinglish No.1 and ‘I Want to Go to Italy’, because they are very useful for today’s activities. Please listen to them and say them together.</p> <p>✓ Remarks</p> <ul style="list-style-type: none"> 楽しく活動させるとともに、小学校外国語活動での活動を想起させその成果を褒めることで、活動に生かしていく。 			
20分	4 Voice & Words ・ <u>Brown Bear</u> を材料に、 <u>聞いた音声や基本的な表現と一致するカード（文字や単語）を選んだり並び替えたりする。</u> ・ <u>Dansinglish</u> 中の <u>自己紹介に関する基本的な表現</u> を使って問答し、 <u>聞いたものと一致するカード（文字や単語）を選ぶ。</u> (ペア・グループ)	○ <u>間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って積極的に関わること。</u> ○ <u>音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深めること。</u> ・ <u>音声と文字や単語を同時に提示し、それらの対応関係の気付きを深めるとともに、読む・書くの円滑な接続のために、できる／できないではなく、楽しく活動させるようにする。</u> <u>カードに視覚情報を盛り込むことで [現象=音声=記号] の同時提示となる。</u> ・ 以後の学習活動のために、個々の小学校での活動状況を把握するようにする。	☆【関】① ☆【知】①【言】 (言動・観察)
<p>★Teacher Talk</p> <p>Next let’s talk about a story book. What story do you remember? Brown Bear? From Head to Toe? Who Stole the Cookies? In a People House? The Little Red Hen? OK. What is the beginning of Brown Bear? Well done! All of you remember it. Then let’s read this time</p>			



Ⅰ
小中一貫教育
理論編

Ⅱ
外国語教育
理論編

Ⅲ
外国語教育
実践編
全体・系統

Ⅲ
外国語教育
実践編
小学校

Ⅲ
外国語教育
実践編
接続・導入

Ⅲ
外国語教育
実践編
中学校

Ⅳ
資料編

(2) 2/3時 : Review, Main Contents (単位時間 50 分)

◎本時のねらい : 間違いを恐れず、外国語の音声や基本的な表現を使って積極的に関わる。
音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深める。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
10分	<p>4 Review</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>Brown Bear</u> を材料にカルタをす る。 ・ <u>Dansinglish</u> の中の自己紹介に関する基本的な表現を使い、聞いた文と一致するカードを選ぶ。 (ペア・グループ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時と同様、できる／できないではなく、楽しく活動させるようにする。 ○ 間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って積極的に関わること。 ○ <u>音声や基本的な表現と文字や単語との対応に気付きを深めること。</u> 	<p>☆【関】①</p> <p>☆【知】① [言] (言動・観察)</p>
<p>★Teacher Talk</p> <p>Today let's play cards with the words from Brown Bear. I'll read the cards one by one. Please find the matching card and take it quickly.</p> <p>Next I'll show you four long cards. Each card has one expression from Dansinglish No.1. Can you read them?</p>			
30分	<p>5 Main Contents</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己紹介の基本的な構成を理解し、内容を考える。 (自己紹介の基本的な構成) 1 Greetings 2 Name 3 Elementary School 4 Sports 5 Subject 6 Birthday 7 Dream 8 Extra 9 Greetings <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己紹介の練習をする。 (ペア・グループ) <p>※<u>学習者の実態によっては、自己紹介を発展させ、入学スピーチとしてもよい。その場合は、Extra の部分で入学スピーチに関わる内容を含ませることなどが考えられる。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒板に自己紹介の基本的な構成を掲示して確認していく。その際、小学校での活動からの意図的(円滑)な接続を図るために、内容を表す絵と文字を同時に提示するようにする。 ・ 自己紹介の内容のうち、1~3, 9 は必ず、4~8 は最低三つを取り上げるようにさせる。 ○ 間違いを恐れず、慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使い、積極的に自分のことを話したり相手のことを聞いたりすること。 ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞いたことについて簡単な動作や言葉で反応すること。 ○ 慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使って自分のことを話し正しく伝えること。 ○ 慣れ親しんだ音声や基本的な表現を使った自己紹介を聞いて内容を正確に理解すること。 ○ 外国語を使って思いを伝え合う喜びに気付きを深めること。 ・ 自己紹介は暗唱するようにさせる。 ・ 後の協同学習の素地として、できる限り自分たちで助け合って練習するようにさせる。 ・ 以後の学習活動のために、個々の小学校での活動状況を把握するようにする。 	<p>☆【関】②</p> <p>☆【関】③</p> <p>☆【関】④</p> <p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【理】① [聞]</p> <p>☆【知】② [言] (言動・観察)</p>
<p>★Teacher Talk</p> <p>Do you remember you made a "SOTUGYO Speech" at the end of the sixth grade or rokunensei? I think you spoke about yourself.</p> <p>Please tell me what you said. Name. Favorite sports. Birthday. Favorite subjects. Future dream. Look here. I put them in order.</p> <p>Please make a speech again for your new friends.</p> <p>✓ Remarks</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の主体性を重視し、手掛かり (clue) を与えながら小学校外国語活動の内容を想起させるようにする。 			

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

(3) 3/3時 : Review, Main Contents (単位時間 50 分)

◎本時のねらい : 間違いを恐れず、外国語の音声や基本的な表現を使って自己のことを話したり相手のことを聞いたりすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
5分	3 Review ・ Dansinglish, The Months of The Year, I want to go to Italy.の中の自己紹介に関する基本的な表現を確認する。 ・ 自己紹介の練習をする。 (自己・ペア)	・ 前時までと同様、できる／できないではなく、楽しく活動させるようにする。 ・ 前時と同様、自分たちで助け合って練習するようにさせる。	
	★Teacher Talk Today you're going to introduce yourself in English to your new friends. Won't that be impressive? Let's listen to the CDs and make sure of the words and phrases you're going to use for our self-introduction.		
40分	4 Main Contents ・ 全員の前で、自己紹介をする。 ※プロジェクトの過程から判断し、学習者の実態によっては、 <u>質疑応答を行うなどしてもよい。</u> ただしその際には、 <u>後の学習への影響を十分配慮し、英語に対して苦手意識等をもたせないようにするために、適宜日本語で応答を許可したり、教師が補助したりするようにする。</u> ※中学生からコメントをもらう機会を設定してもよい。	・ できる限り暗唱したものを基に、自己紹介をさせる。 ・ 聞く側は、紹介の内容に対して簡単な動作や言葉などで反応するように促す。 ・ 自己紹介の内容に対して自発的に出た質問は、コミュニケーションの一貫として、児童生徒個々の学習状況に十分配慮しながら適宜取り上げる。	☆【関】②③④ ☆【表】①【話】 ☆【理】①【聞】 ☆【知】②【言】 (言動・観察)
	★Teacher Talk Let's enjoy the speeches now. Speakers, please make your speech cheerful. Listeners, please say something to the speakers after the speeches to encourage them. You can also make comments on the speeches like this. "You're great!" "Excellent!" "I like your gesture." You can also ask some questions. Speakers, please answer the questions, if you can. If not, of course, you can say, "Sorry, but I don't know." Do you understand? There are two important things. The first is "You should express what you think or who you are in English." The other is "You should understand your new friends in English." ✓ Remarks ・ 話し手と聞き手のコミュニケーションを重視し、その円滑な運営に資する仲介の役割を重視する。		

Ⅰ 小中一貫教育
理論編

Ⅱ 外国語教育
理論編

Ⅲ 外国語教育
実践編
全体・系統

Ⅲ 外国語教育
実践編
小学校

Ⅲ 外国語教育
実践編
接続・導入

Ⅲ 外国語教育
実践編
中学校

Ⅳ 資料編



Hello!
My name is Tanaka Minori.
I want to be a soccer player.
I like sports and music.
I want to be a soccer player.
Thank you!
(Elementary School Pupil)

Excellent! I want to be a
soccer player too.
Please join our soccer club
next year.
(Junior High School
Student)



自己紹介
(小学生から中学生へ)

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (中) スタートコラム ◆◆
「読むこと」「書くこと」の導入期の指導、音声と記号

「先生、小学校の外国語活動は楽しかった。けど、中学校に入って読んだり書いたり、文法を習ったりするだけで、授業が面白くななくなりました。必要なのは分かってるんだけど…、でも、聞いたり話したりすることも、楽しいだけでなく、やっぱり必要だと思う。」

中学校では、いよいよ「読むこと」「書くこと」が始まります。「聞くこと」「話すこと」からの接続を踏まえ、これらをどう導入していくか。つまずきや学び残しを出さないよう、また、生徒から上記のようなつぶやきが出ないように、小学校の活動の素地をどのように生かしていくか。

さて、まず確認してほしいのは右図（外国語教育編 p.61 再掲）です。Start Project では Voice & Words を扱ったので、ここでは Words & Voice を使い読む・書くの導入を解説していきます。

■前提

英語は、他の欧米圏の言語と比較し、一般に、発音と綴りが一致しない言語として知られます。ネイティブであっても、特にスペリングの習得には苦勞するとの説があります。

例えば、eye は3文字（記号）ですが、発音してみると分かるように、音声数が一致しません。

a という文字（記号）一つをとってみても、例えば act と name のように、他の文字（記号）との組み合わせによって音声（発音）が異なります。

以下のステップは、Voice & Words の活動を行った経験がある、という前提です。

■ステップ

①Words & Voice において「も」、Start Project の Voice & Words の [現象＝音声＝記号] と同じく、(順列を変え) [記号＝音声＝現象] の三つの同時提示を基本とする。

音声については、なるべく Authentic なものを使う。

※記号を読む・書くからといって、記号のみを扱うことは避けるようにする。

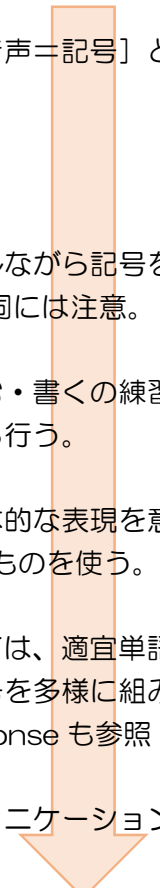
②まずはアルファベット。ある程度の反復練習（量）も必要。ただし、発音・音読しながら記号を書かせるなど、音声と分離しないよう配慮する。特に b と d のような鏡文字の混同には注意。

③次は単語。②と基本は同じ。c と a と t。組み合わせると cat といったような読む・書くの練習を、音声のみでなく、適宜現象（猫のカード等の視覚情報）と同時に提示しながら行う。

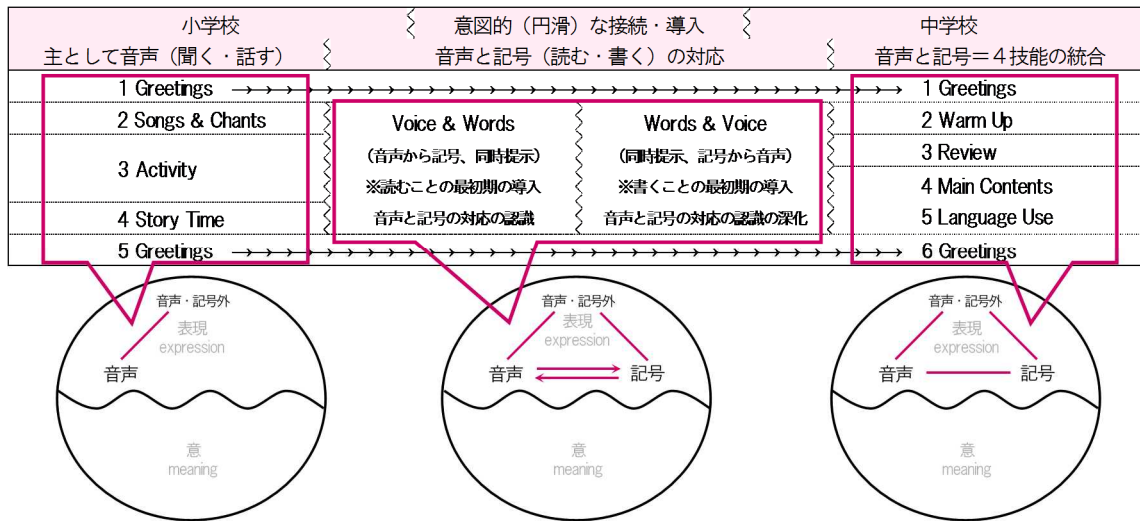
④次は文。②③と基本は同じ。特にここでは、小学校外国語活動で慣れ親しんだ基本的な表現を意識的に活用するようにする。練習のための練習ではなく、なるべく Authentic なものを使う。

⑤②～④は、例えば Warm Up（5分程度）で計画的に反復させる。基礎ケアとしては、適宜単語テストなども実施するようにする。タブレット端末等を使って、現象＝音声＝記号を多様に組み合わせる Warm Up をさせることなども有効。 ※My Project4 の Quick Response も参照

⑥学校の授業内では、なるべく授業内でしかできない、実際に言語を使用するコミュニケーション活動やプロジェクトを中心に展開。



I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編



図Ⅱ-6 (第二) 学習指導の展開の基本型による連続性の確保

——音声(聞く・話す)、記号(読む・書く)、音声・記号外(ジェスチャー等)の対応の認識の形成過程
(再掲、p. 61)

左頁が、特に導入期の学習指導です。徐々に文から文章へと移行していくわけですが、特に書くことについては、ある程度の量を書かせることも大切です。一文の正確さを追究しながらも、それにこだわり過ぎて二文、三文、四文に進まないのではなく、ある程度の文数を書かせてから一文一文をチェックするなど、一文とまとまりのある文章のバランスに配慮していくことが大切です。

また、読むことは「英語を理解すること」の一つであり、「英文を和訳する」ことが目標ではないことにも留意が必要です。もちろん、和訳が全く必要ないと言っているわけではありません。しかし、My Project5(第2学年2学期)配列の「不定詞」、7(第3学年1学期)の「現在完了」、8(第3学年2学期)の「後置修飾」や9(第3学年3学期)の「関係代名詞」などは、特に「英語のままの理解」を要する言語材料(文法事項)です(内容の取扱い(8)の規定、同p.58, 59と関連)。英語を英語のままに理解し、表現できる「言語の認識枠組み」は、(小)スタートコラムでも述べたように、現象=音声=記号を同時に扱う、すなわち、Voice & WordsやWords & Voice、その先にある4技能の統合的活動によってこそ育てていくことができるものです。

記号、読むこと・書くことの導入の際には、Voice & WordsやWords & Voiceを積極的に導入するとともに、その先に、英語のままの理解と表現、そのための言語の認識枠組みの育成、そして、4技能の統合を見据えて学習指導に当たってください。中学校で学びが分断せず、小学校で養った素地が十分に生かされるよう、そして、生徒が冒頭のようなつづやきをする事のないよう、9年間を通した一貫性のある教育を進めていくことが大切です。

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

事例 2-1-1	中学校第1学年 1学期末~2学期始	Keywords: 英語の文及びその構造、英語のままの理解・言語の認識枠組み構築の素地
接続・導入「自己紹介を通して積極的に関わろう」		本単元
		My Project 2「人を紹介しよう」

◆◆ My Project 1 自己紹介をしよう ◆◆

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- 自己紹介について、内容にふさわしく音読したり、正しく且つまとまりよく話したり書いたり、正確に読み取ったり聞き取ったりすることができる。(コミュニケーション)
- 日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いを理解し、間違いを恐れず、多様な言語や文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	自己紹介に積極的に取り組んでいる。 間違いを恐れず、自己紹介を通して、言語や文化の違いを超積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。	自分の名前や学校名、出身地、住所、家族、趣味・特技、部活動等について、内容にふさわしく音読したり、正しく且つまとまりよく話したり書いたりすることができる。	他者の名前や学校名、出身地、住所、家族、趣味・特技、部活動等について、正確に読み取ったり聞き取ったりすることができる。
コミュニケーション 活動に即した 具体的な 評価規準	① [読] 積極的に音読している。 ② [話] 身振りや手振りをうまく利用して自己紹介をしている。 ③ [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ④ [書] 間違えることを恐れず積極的に書こうとしている。 ⑤ [文] <u>間違いを恐れず、自己紹介を通して、言語や文化の違いを超積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。</u>	① [読] 正しい強勢、イントネーション、区切り、発音を用いて紹介文章を音読することができる。 ② [読] 自己紹介の内容にふさわしく音読することができる。 ③ [話] 自己のことを聞き手に正しく伝えることができる。 ④ [書] 語と語のつながりに注意して正しく自己紹介文を書くことができる。 ⑤ [書] 自己紹介としてまとまりのある文章を書くことができる。 ⑥ [話] 自己紹介としてまとまりよく話すことができる。	① [読] 自己紹介の内容を正確に読み取ることができる。 ② [聞] 自己紹介の内容を正確に聞き取ることができる。	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] 自己紹介に必要な表現と理解の知識を身に付けて言語活動に取り組んでいる。 ④ [文] 異なる言語や文化の自己紹介を聞いて、日本の自己紹介の内容や方法との違いを理解している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

- (1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要
- ア【目標・内容(事項)】本単元のプロジェクトは「自己紹介をしよう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は「内容に相応しく音読したり、正しく且つまとまりよく話したり書いたりする」「正確に読み取ったり聞き取ったりする」である。My Project 2 との連続性については、コミュニケーションの場面が「自己紹介」から「他者紹介」へと発展していく。また、Project 1 において自分の「名前・学校名」「出身地・住所」「家族」「趣味・特技」「部活動」等を扱い、Project 2 では「他者に対する自分の気持ち」「人柄」等が加わることで、コミュニケーションの内容が系統的に拡大していく。
- イ【言語材料(文法事項)】主な言語材料(文法事項)の配列は、下表を前提とする。Project 2 では他者紹介への場面転換に伴い、一人称から三人称が配列されている。しかし、配列はあくまで目安である。必要な語や連語、慣用表現を含めた表現が、以後の学期・学年に配当されていても、目標・内容の系統性の理解に基づき、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図ったうえで柔軟に取り扱う必要がある。

接続・導入（以前）	第 1 学年 1 学期（本単元）	第 1 学年 2 学期（以後）
慣れ親しんだ 音声や基本的な表現	主語（一人称）、be 動詞・一般動詞 （肯定文・否定文・疑問文）、助動詞（do, does） Wh Question（What, How many ~?） 複数形	代名詞（一・二・三人称） 三人称単数の現在形の文（肯定・否定・疑問） 助動詞（can）、 Wh Question（Who, When, Where, How）

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型学習】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習（1 学期）の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標（CAN-DO）を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまづきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて（授業外も含めた）個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力（4 技能とその統合）】小学校では、音声として聞いた基本的な話形に簡単な情報を当てはめたり付加したりして理解したり表現したり活動が主であった。中学校では、「主語＋動詞」をはじめとする文及びその構造を知識としても身に付けて外国語を理解し、自ら表現を作りだしていく。

ただし、言語材料・文法指導に終始することのないよう、聞く・話すの中で音声として文やその構造に触れさせ、音声と記号を対応させながら読む・書くに接続していく必要がある。さらに、日本語と英語の文構造の違いに体験的に気付かせていくことも重要である。つまり、4 技能、言語活動と言語材料の指導のバランスに配慮が必要であり、これが後に4 技能の統合的活動へと連続的に発展していく。また、体験的な文構造の違いの理解の蓄積は、「日本語を基にした英語の理解」が一定の限界を迎える「不定詞」「現在完了」「関係代名詞」等で「英語のままの理解」を可能にする「言語の認識枠組み」を構築していく。

カ【言語や文化に対する理解（理解と承認）】4 時又は 5 時において、ALT や外国籍の地域人材等の自己紹介を聞き、日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いを理解させる活動を設定することが望ましい。その際には、間違いを恐れず積極的にコミュニケーションを図るよう促すことが重要である。本プロジェクトより、第一観点「間違いを恐れず」の趣旨は、「外国語を使うこと」のみでなく「言語や文化の違いの超越」も含まれることに留意が必要である。この活動は、後続するプロジェクトの中で、ALT や外国籍の人々を紹介する、そうした人々と互いについて質問をしようといった活動へと連続的に発展していく。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア【自校内】以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ【異校種間】小学校教員をゲストティーチャーに迎え、評価コメントをもらう機会を設定することで、異校種の協働を促進していくことができる。その際の具体的な役割としては、小学校からの学習の積み重ねを評価する等、生徒が自らの成長を実感できるものにすることが望ましい。

ウ【学校外】ALT や地域に外国籍の人材がいる場合、単元の終末等において、自己紹介をしてもらう機会を設定することが望ましい。方法の連続性に記したように、多様な言語・文化についての理解や、その違いを超えて積極的にコミュニケーションを図る態度を育成する機会になるからである。

4 単元の学習・指導と評価の計画（4時＋1時（発展）） ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎ねらい ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	<p>◎自己紹介の内容にふさわしく音読したり、大切な部分を正確に読み取ったりすることができる。</p> <p>★1 Greetings ★2 Warm up ★3 Introduction & Review（10分） ・プロジェクトの目的を理解する。 ・1学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。</p> <p>4 Main Contents（20分） ・自己紹介モデル（A・B）を聞く。 ・聞いた内容を文章で読み、音読する。 ・自己紹介の基本的な構成を確認し、モデル文を当てはめる。</p> <p>5 Language Use（13分） ・複数の自己紹介モデルから一つを選んで暗唱し、ペアで伝え合う。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 既習事項を確認すること。</p> <p>○ 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。 ○ 積極的に音読しようとする事。 ○ 正しい強勢、イントネーション、区切り、発音を用いて音読すること。 ○ 内容にふさわしく音読すること。</p>	<p>☆【理】①【読】 ☆【知】①【言】 ☆【関】①【読】 ☆【表】①【読】</p> <p>☆【表】②【読】 ☆【知】①②【言】</p>
2	<p>◎身振りや手振りをうまく利用し、正しく話して自己紹介したり、聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応したりすることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm up 3 Review（8分） ・プロジェクトの目的と課題を再確認し、前時のペアワークを繰り返す。</p> <p>★4 Main Contents（25分） ・既習の表現の中から自己紹介に使うことができるものを、新出の表現とともに確認、ワークシート②に整理する。</p> <p>★5 Language Use（10分） ・整理した表現を使い、簡単な自己紹介をする。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること</p>	<p>☆【表】①【読】 ☆【表】②【読】 ☆【知】①②【言】</p> <p>☆【関】②【話】</p> <p>☆【表】③【話】</p> <p>☆【関】③【聞】 ☆【知】①②③【言】</p>
3	<p>◎自己紹介文を正しく書き、まとまりよく発表するとともに、聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応することができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Review（5分） ・プロジェクトの目的と課題とともに、前時で確認・整理した自己紹介に使う表現を確認する。</p> <p>★4 Main Contents（25分） ・ワークシート③を用い、自己紹介文を書く。</p> <p>5 Language Use（13分） ・自己紹介の練習をする。 (個人・ペア)</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 間違えることを恐れず積極的に書こうとすること。 ○ 語と語のつながりに注意して正しく書くこと。 ○ 内容的にまとまりのある文章を書くこと。 ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 与えられたテーマについて、まとまりよく話すこと。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。</p>	<p>☆【関】④【書】</p> <p>☆【表】④【書】</p> <p>☆【表】⑤【書】 ☆【知】①③【言】 ☆【関】②【話】</p> <p>☆【表】⑥【話】</p> <p>☆【関】③【聞】 ☆【知】②【言】</p>

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

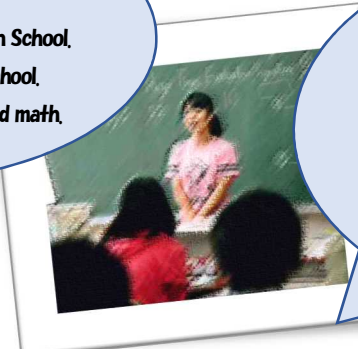
III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

4	<p>◎まとまりよく自己紹介をするとともに、その内容を正確に聞き取ることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Review and Practice (8分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的と課題とともに、前時で書いた自己紹介文を確認する。 自己紹介の練習をする。(個人) <p>★4 Performance and Evaluation (30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員の前で、自己紹介をする。 発表者以外は、評価シートを用いて自己紹介を評価する。(学習者の実態に応じて、適宜質疑応答を組み込む。) <p>★5 Consolidation (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。 <p>6 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。 ○ 与えられたテーマについて、まとまりよく話すこと。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 自然な口調で話される英語を聞いて内容を正確に聞き取ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【関】② [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】⑥ [話] ☆【関】③ [聞] ☆【理】② [聞] ☆【知】①②③ [言]
5 (発展)	<p>◎日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いを理解する。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Review (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを振り返る。 <p>★4 Main Contents (25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ALT・外国籍の地域人材等の自己紹介を聞く。 自己紹介をする。 日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いについて考え、発表する。 <p>5 Conclusion (13分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ALT・外国籍の地域人材等の自己紹介についての体験談 (失敗の体験等) や考え方を聞く。 <p>6 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 外部人材の自己紹介には、当該の言語や文化の特徴的な内容や方法を盛り込んでもらうことにより、日本との違いに気付くことができるようにする。(映像資料等で代用してもよい。) ○ 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超えて積極的にコミュニケーションを図ろうとすること。 ○ 日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いを理解すること。 ・ 異なる言語や文化をもつ人々とコミュニケーションを図ることは、どのような人でも一定の恐れなどがあることに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【関】③ [聞] ☆【理】② [聞] ☆【関】② [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】⑥ [話] ☆【知】①②③ [言] ☆【関】⑤ [文] ☆【知】④ [文]

Hello, class.
My name is Sasaki Yoko.
I'm a student at Minami Junior High School.
I'm from Higashi Elementary school.
My favorite subjects are music and math.



My family likes music. I can play the trumpet.
I have two brothers.
My brothers play the guitar and the piano.
We have home concerts. I love Jazz and Blues.
I want to be a musician in New York.
I want to speak English very well.
Thank you for listening.

自己紹介

- I 小中一貫教育 理論編
- II 外国語教育 理論編
- III 外国語教育 実践編 全体・系統
- III 外国語教育 実践編 小学校
- III 外国語教育 実践編 接続・導入
- III 外国語教育 実践編 中学校
- IV 資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 1/4時 : Greetings ~ Introduction & Review

◎本時のねらい : 文章の内容にふさわしく音読したり、大切な部分を正確に読み取ったりすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
2分	1 Greetings	・ All English での進行を原則とする。	
	・ 英語で挨拶をする。		
<p>★Teacher Talk</p> <p>Good morning, class. How are you doing today? Summer vacation is just around the corner.</p> <p>If you would like to communicate with the people from other parts of the world, you can often use English. You have studied English for three months here! You can listen and speak English and now you can read English too! Also you can write English! How exciting!</p> <p>✓ Remarks</p> <p>・ 定型表現の反復に終始せず、日常生活における言語活用の場面を想起できるよう内容を考えることが望ましい。</p>			
3分	2 Warm Up	・ 英語発声を通じて、英語学習への導入を図る。 ・ 速度を変えたり、発音の違いやリズムを意識させたりする。	
	・ 早口言葉を言う。		
<p>★Teacher Talk</p> <p>Let's enjoy the tongue twister for this month. Please listen to me.</p> <p>She sells seashells by the seashore. The shells she sells are surely seashells. So if she shells on the seashore, I'm sure she sells seashore shells. Can you do that?</p> <p>If you can say it in ten seconds, you're a great master of English. This time I will say it twice a little slowly. You can try it after that.</p> <p>✓ Remarks</p> <p>・ 中学校3年間を通じ、計画的に、オーセンティックで多様な表現に触れさせるようにする。</p>			
10分	3 Introduction & Review	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に学習・探究させるために、学習到達目標 (CAN-DO リスト) を明確に示す。その際、1 学年や3 学年までの目標も合わせて示し、義務教育終了時点での到達目標についても意識させる。 ○ 既習事項を確認すること。 教科書とワークシート①を使い、リストにある CAN-DO に対して自己評価させる。自分がプロジェクトの過程で解決する課題 (つまづき・学び残し) を立てさせる。 	
	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的を理解し、ワークシート① (CAN-DO リスト) に本プロジェクトの学習到達目標を書き込む。 1 学期の学習内容を確認し、自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 ※新出語句、文型 		
<p>★Teacher Talk</p> <p>It is wonderful to communicate with your friends or other people in English, Isn't it? I want you to tell us about yourself, it's called, "自己紹介". Yes. You did it once in April.</p> <p>This time, you can tell us about yourself in greater detail than in April, because you studied a lot for three months here. You can use everything you have studied since April.</p> <p>I will give you four hours for this. Please enjoy telling us yourself and listening to your friends. I think you should be a great speaker and listener.</p> <p>✓ Remarks</p> <p>・ 学んできたことに自信をもたせ、プロジェクトへの学習意欲を喚起する内容にする。</p>			

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

My Project 1 Self-Introduction Self-Evaluation Card									
No.	Contents	Before				After			
		Excel- lent	Very Good	good	Try Harder	Excel- lent	Very Good	good	Try Harder
1	[G]主語								
	[G]主語 + be 動詞の肯定文								
	[G]主語 + be 動詞の否定文								
	[G]主語 + be 動詞の疑問文								
	[G]主語 + 一般動詞の肯定文								
	[G]主語 + 一般動詞の否定文								
2	[L]簡単な言葉や動作で反応								
3	[L]話の内容の正確さ聞き取り								
4	[S]身振りや手振り								
5	[S]内容に合った音読								
6	[S]正しく伝える								
7	[S]声と身ぶりよくスピーチ								
8	[R]文章の内容の正確さ読み取り								

(2) 2/4時 : Main Contents ~ Language Use

◎本時のねらい : 身振りや手振りをうまく利用し、正しく話して自己紹介したり、聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応したりすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
25分	4 Main Contents ・自己紹介に使うことができる表現をワークシート②に整理する。 (自己→協同 (ペア))	<ul style="list-style-type: none"> 「名前・学校名」「出身地・住所」「家族」「趣味・特技」「部活動」から成るワークシート②に、使うことができる既習の表現を想起させ、新出のものとともに整理させる。 小学校での卒業スピーチを例文として提示する。その際、want to be など~中学校外国語科として未習の語句や文型であっても、学級・学年間で共通理解を図ったうえで、柔軟に取り扱うようにする。 自己学習とともに、ペアでの話し合いの時間を設定し、協働して各々の課題を解決できるようにさせる。 	
	★Teacher Talk Today you're going to speak about yourself briefly at the end of this lesson. Now make a pair and work with your partner. First let's review all the Programs we learned in this term. Please find useful expressions and put a tag on the page like this. Then, write them on your worksheet. Please check from beginning. I'll give you 15 minutes. Please talk with your partner and work together. OK?		
10分	5 Language Use ・整理した表現を使い、簡単な自己紹介をする。 (協同 (グループ))	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 自分の考えや気持ち、事実などを正しく伝えること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ・ 話すことのみでなく、聞くことも大切であることを意識付ける。 ・ グループで協働して各々の課題を解決できるようにさせる。 	☆【関】② [話] ☆【表】③ [話] ☆【関】③ [聞] ☆【知】①②③ [言] (言動・観察)
★Teacher Talk In this final step you are going to talk about yourself using the worksheet. First, please make a lunch group. Second, each of you will talk about yourself in that group. Please listen to your friends carefully. After the speech please make a comment, if you have. For example 'Excellent!', 'Good job,', 'Please speak loudly,' or 'You write a lot!'			

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

(3) 3/4時 : Main Contents

◎本時のねらい : 身振りや手振りをうまく利用し、正しく話して自己紹介したり、聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応したりすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
25分	4 Main Contents ・ワークシート③を用い、自己紹介文を書く。 (自己→協働 (ペア))	○ 間違ふことを恐れず積極的に書こうとする。 ○ 語と語とのつながりに注意して正しく書くこと。 ○ 内容的にまとまりのある文章を書くこと。 ・ 1時間目で理解した自己紹介の基本的な構成を意識して書くようにさせる。 ・ 同じ内容でも違う表現が使えることを意識させる。 ・ 自己学習とともに、ペアでの話し合いの時間を設定し、協働して各々の課題を解決できるようにさせる。	☆【関】④ [書] ☆【表】④ [書] ☆【表】⑤ [書] ☆【知】①③ [文] (ワークシート・観察)
	<p>★Teacher Talk</p> <p>Tomorrow we have a performance day. Your principal and homeroom teacher will be here to listen to you. Isn't it exciting?</p> <p>You have to finish writing and practice your speech today. Please take out your worksheet (2) and I'll give you another worksheet.</p> <p>If you finish writing, please show me. I'll check it and give you a good-job sticker.</p>		

(4) 4/4時 : Performance and Evaluation, Consolidation

◎本時のねらい : まとまりよく自己紹介をするとともに、その内容を正確に聞き取ることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
30分	4 Performance and Evaluation ・自己紹介をする。 ・発表者以外は、評価シートを用いて自己紹介を評価する。(学習者の実態に応じて、適宜質疑応答を組み込む。) ※学級規模によっては、時間の制約があるため、時数を増やす、グループでの発表を組み合わせるなど適宜工夫する。	○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 自分の考えや気持ち、事実などを正しく話すこと。 ○ 与えられたテーマについて、まとまりよく話すこと。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 自然な口調で話される英語を聞いて内容を正確に聞き取ること。 ・ 英語係等を事前に決めておき、英語で司会進行させる。 ・ 自己紹介のみでなく、適切な評価を行うことも大切であることを伝える。	☆【関】② [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】⑥ [話] ☆【関】③ [聞] ☆【理】② [聞] ☆【知】①②③ [言] (発表、シート・観察)
	<p>★Teacher Talk</p> <p>It's the time to show us what you can do! Please show us your hard work and enjoy the performance. You are also going to make a comment on each speaker. Listening to other people is very important.</p> <p>Please give an eye for speaker, you yourself will be a good speaker too. Are you ready? Let's a get started!</p>		

5 分	5 Consolidation	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。 評価の意義を伝える。 自分の課題が解決できたか、残された課題は何か等についても考えさせる。
	<p>★Teacher Talk</p> <p>You did it! (You were great! I am proud of you!) Thank you very much, everyone.</p> <p>Let's look back what you have studied and see what you can or cannot do with the CAN-DO sheet.</p> <p>Don't you think it is nice to know where you are or what you should do now?</p> <p>✓ Remarks</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて、評価の意義について日本語で説明を加えることが望ましい。 	

(5) 5 時 (発展) : Main Contents

◎本時のねらい：日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いを理解する。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
25 分	4 Main Contents		
	<ul style="list-style-type: none"> ALT、外国籍の地域人材等の自己紹介を聞く。 自己紹介をする。 <p>※複数人 ALT 等が確保できた場合は、グループごとに自己紹介をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いについて考え、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部人材の自己紹介には、当該の言語や文化の特徴的な内容や方法を盛り込んでもらうことにより、日本との違いに気付くことができるようにする。(映像資料等で代用してもよい。) <p>○ 間違いを恐れず、自己紹介を通して、言語や文化の違いを超え積極的にコミュニケーションを図ろうとすること。</p> <p>○ 日本と諸外国の自己紹介の内容や方法の違いを理解すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> 異なる言語や文化をもつ人々とコミュニケーションを図ることは、どのような人でも一定の恐れなどがあることに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【関】③ [聞] ☆【理】② [聞] ☆【関】② [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】⑥ [話] ☆【知】①②③ [言] ☆【関】⑤ [文] ☆【知】④ [文] (言動・観察)
<p>★Teacher Talk (Main Contents の終了後)</p> <p>Did you enjoy talking with today's guests?</p> <p>Where are they from? What are their names? What are they like?</p> <p>I think you can communicate with all the people, right?</p> <p>Is there anything different that you notice? How did you begin with from Korea? Is B from Kenya just same as C is from India?</p> <p>Yes. There are many different things among them. And there are many similar things among them too.</p> <p>What do you think of that?</p>			

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

◆◆ (中) コラム1 ◆◆
指導と評価の一体化、評価と評定

小学校外国語活動では、活動の記録を取り、記入することが評価の主でした。もちろん中学校の評価でも、小学校と基礎になる考え方は同じです。小中一貫教育理論編 p.22, 23、外国語教育理論編 pp.47-51.も併せて参照してください。

さて、中学校の評価で最も違うところは、「評定」を算出しなければならない点でしょう。そのために私たちは、日常的に生徒の学習状況を把握し、記録していかなければなりません。定期考査の得点のみでは、4観点の趣旨を網羅する十分な評価材料を得ることができないからです。

定期考査の作り方については、本コラムの末で触れます。そこでまずは、指導と評価の一体化に立った上で中学校外国語科の評価について説明していきます。

評価は、学習指導要領に目標・内容(事項)を具体化する単元や時の「目標」を立て、それに対する達成度合いをはかるものさしとして「規準」を設定し、生徒の学習状況を見取っていくことが前提になります。評価に慣れていない場合は、指導のし忘れ、評価のし忘れがないよう、適切に指導計画・評価計画に即していくことが大切です。

この基礎については、「CAN-DO リストの形での学習到達目標設定及び、年間指導計画・単元計画への反映」(外国語教育理論編 p.50, 51)を参照してください。その上で以下には、My Project1の目標と評価規準を使って、単元内で生徒の学習状況を見取りまとめるためのシートの例を掲載しました。単元・プロジェクトを通じ、学習過程や最終時の発表をバランスよく見取っていきます。

実のところ、プロジェクト学習を学期末に行うと、生徒にとっては個々の課題を解決するものになることはもちろん、教師にとっては、十分に集めることができなかった評価材料を収集して補完する機会にもなります。

My Project 1 自己紹介をしよう									
番号	コミュニケーションへの関心・意欲・態度					外国語表現の能力			
	①読 音読	②話 身振り等	③聞 反応	④書 恐れず	⑤文 違い超え	①読 強勢等	②読 内容音読	③話 正しく	④書 つながり
S1	A	A	B	C	C	B	B	C	C
S2	B	B	A	C	A	A	A	A	B
S3	A	A	A	A	A	B	C	B	C
S4	C	C	B	C	C	B	B	C	C

A：十分満足できる、B：おおむね満足できる、C：努力を要する

もし、特に重み付けをせず生徒1(S1)の第1観点を総括するなら、AABCCを総括して「B」とする。この場合は、3+3+2+1+1=10を平均して2=Bと算出しています。そして仮に、このような評価を学期の授業を通じて行い、学期末に第1観点=B、第2観点=C、第3観点=B、第4観点=Aと総括したなら、学習状況は2+1+2+3=8を平均して2=Bと評価します。

実際には、定期考査や小テストの得点を考慮したり、各材料や規準に重み付けをしたりと、多様な方法で学習状況を見取り、A の中でも「特に程度の高い」生徒を「5」、C の中でも「一層努力を要する」生徒を「1」とすることを基本とし、「5段階の評定」へと結び付けます。と同時に、私たちはそれを、自らの指導の成果と課題を見取るものと捉え、次の指導に生かす必要があります。こうした評価を継続的に行っていれば、学期末に評定を算出しようとする際、困ることもありません。

なお、4技能・4観点にわたって学習指導要領の実現状況を見取るのが評価の大事な役目でもありますから、冒頭にも述べたように、定期考査などのペーパーテストのみでなく、聞くや話すの理解や表現の能力を総合的に評価する場面や方法も計画しておかなければなりません。付言しておく、スピーチコンテストと称してある文章を暗唱させるのみならば、それは話すこと・外国語表現の能力ではなく、読むこと・外国語表現の能力です。あるいは提出物の提出状況。これを評価材料とするためには、評価の観点の趣旨・具体的な規準に即す必要があります。ただ単に出した出さないでは、例えば第1観点の評価材料にはなりません。十分に各観点の趣旨を理解することが大切です。

加えて、こうした観点別学習状況評価の考え方は、定期考査の作成にも生かす必要があります。文法問題のみから構成される定期考査は、適切ではありません。詳細は、杉並区「特定の課題に対する調査」の設計 (p.238) を参照してください。本来定期考査は、本区調査のような考え方に基づいて作成することが望ましいです。

例えば本区調査では、4技能・4観点をバランスよく、系統的・連続的に出題することはもちろん、各設問のレベルを S、A、B、C の4段階で設定し、5段階の評定を算出できるようにもなっています。この評定の算出方法は、上記した5段階の評定の算出方法を応用しているだけです。

以下は、過去に実施した調査の企画書の一部です。「学習指導要領に準拠した趣旨」を指導事項を具体化した授業目標、「内容」をコミュニケーション活動に即した具体的な評価規準、「出題形式・回答形式」を評価方法・材料と読み替えれば、評価・評定と全く同じ考え方で調査が作成されていることを理解できるはずです。

問題内連番	設問番号		出題		形式	解答形式	設問レベル	学習評価の観点					指導内容の領域				
	大問	小問	学習指導要領に準拠した趣旨	内容				1	2	3	4	5	A	B	C	D	E
								コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語・文化に関する知識・理解の能力	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと		
1	1	1	ア(ア)強勢、イントネーション等を正しく聞き取ること	対話の内容から正しい強勢を判断する	選択	通常	基礎C										
2	1	2	ア(イ)情報を正確に聞き取ること	時間に関する情報を正確に聞き取る	選択	通常	基礎B										
3	1	2	ア(イ)情報を正確に聞き取ること	動作に関する情報を正確に聞き取る	選択	通常	基礎C										
4	1	2	ア(イ)情報を正確に聞き取ること	人に関する情報を正確に聞き取る	選択	通常	基礎B										
5	1	3	ア(ウ)質問・依頼などに適切に応じること	所有者に関する質問に適切に応じる	選択	通常	基礎C										
6	1	3	ア(ウ)質問・依頼などに適切に応じること	評判に関する質問に適切に応じる	選択	通常	基礎B										
7	1	3	ア(ウ)質問・依頼などに適切に応じること	手段に関する質問に適切に応じる	選択	通常	基礎B										
8	1	4	ア(エ)聞き返す・内容を確認すること	話の内容を聞き返す	選択	通常	基礎C										
9	1	4	ア(エ)聞き返す・内容を確認すること	話を続けるためにつなぎ言葉を用いる	選択	通常	基礎C										
10	1	5	エ(ウ)聞いたこと・読んだことについてメモをとること	聞いたことについてメモをとる	記述	特別条件	応用S										
11	1	5	エ(イ)情報を正確に聞き取り、エ(イ)正しく文を書くこと	スピーチの内容を正確に聞き取り、質問に対する答えを書く	自由記述	通常	応用S										
12	1	5	エ(ウ)読書・要旨を聞き取る	スピーチの内容を正確に聞き取る	選択	通常	応用A										
13	2	1	イ(イ)考えや気持ち、事実などを正しく伝えること	読意に対する自分の気持ちを伝える	選択	通常	基礎C										
14	2	1	イ(イ)考えや気持ち、事実などを正しく伝えること	人物の評価に関する自分の考えを正しく伝える	選択	通常	基礎B										
15	2	2	エ(イ)語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと	語と語のつながりに注意して正しく文を並び替える	記述	通常	基礎B										
16	2	2	エ(イ)語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと	語と語のつながりに注意して正しく文を並び替える	記述	通常	基礎B										
17	3	1	ウ(ウ)あらすじ・大切な部分などを正確に読み取ること	金額を正確に読み取る	記述	通常	基礎B										

「先生、なんでこの評定なんですか。どうしても納得できません。説明を聞いても、余計に納得がいかなくなります。」

適正で信頼される評価。それは、生徒の将来を(大きく)左右するものでもあり、教師が自らの指導をよりよいものにしていくために、とても重要な専門的教育技術です。

I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編

事例 2-1-2	中学校第1学年 2学期末~3学期始	Keywords: 相手に伝わる工夫、自己や他者の像の捉え方としてのもの見方・考え方
My Project 1 「自己紹介をしよう」		My Project 3 「質問してプロフィールカードを作ろう」
◆◆ My Project 2 人を紹介しよう ◆◆		

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ 人の紹介について、内容にふさわしく音読したり、正しく且つまとまりよく話したり書いたり、正確に読み取ったり聞き取ったりするとともに、相手に伝わるように工夫して話したり書いたりすることができる。
(コミュニケーション)
- ・ 日本と諸外国の他者紹介の内容や方法の違いを理解し、間違いを恐れず、多様な言語や文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする。
(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力 学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	他者紹介に積極的に取り組んでいる。 間違いを恐れず、他者紹介を通して、言語や文化の違いを超積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。	家族や友達、歌手やタレント、スポーツ選手などについて、内容にふさわしく音読したり、正しく且つまとまりよく話したり書いたりすることができる。	家族や友達、歌手やタレント、スポーツ選手などについて、正確に読み取ったり聞き取ったりすることができる。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	① [読] 積極的に音読している。 ② [話] 身振りや手振りをうまく利用して他者を紹介している。 ③ [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ④ [書] 間違えることを恐れず積極的に書こうとしている。 ⑤ [書] <u>読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。</u> ⑥ [話] <u>聞き手が理解しやすくなるように工夫して話している。</u> ⑦ [文] 間違いを恐れず、他者紹介を通して、言語や文化の違いを超積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。	① [読] 正しい強勢、イントネーション、区切り、発音を用いて他者紹介の文章を音読することができる。 ② [読] 他者紹介の内容にふさわしく音読することができる。 ③ [話] 他者のことを聞き手に正しく伝えることができる。 ④ [話] 他者の紹介としてまとまりよく話すことができる。 ⑤ [書] 語と語のつながりに注意して他者を紹介する文を正しく書くことができる。 ⑥ [書] 他者の紹介としてまとまりのある文章を書くことができる。	① [読] 他者紹介の内容を正確に読み取ることができる。 ② [聞] 他者紹介の内容を正確に聞き取ることができる。	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] 他者紹介に必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [文] 異なる言語や文化の他者紹介を聞いて、日本の他者紹介の内容や方法との違いを理解している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

- (1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要
- ア [目標・内容(事項)] 本単元のプロジェクトは「人の紹介をしよう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は Project 1 「内容に相応しく音読したり、正しく且つまとまりよく話したり書いたりする」「正確に読み取ったり聞き取ったりする」から「相手に伝わるように工夫して表現する」が系統的に加わる。また、コミュニケーションの場面としては、1の「自己紹介」から本単元を介して3の「質問する」へと連続していく。内容の系統性としては、2で「他者に対する自分の気持ち」「人柄」等が加わる。
- イ [言語材料(文法事項)] 主な言語材料(文法事項)の配列は、下表を前提する。Project 2 では三人称が加わり、3では質問し合う場面への転換に伴い Wh Question が加わる。ただし、必要な語や連語、慣用表現を含めた表現が、以後の学期・学年に配当されていても、目標・内容の系統性の理解に基づき、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図ったうえで柔軟に取り扱う必要がある。

第 1 学年 1 学期 (以前)	第 1 学年 2 学期 (本単元)	第 1 学年 3 学期 (以後)
主語 (一人称)・be 動詞・一般動詞 (肯定文・否定文・疑問文) 助動詞 (do, does) Wh Question (What, How many ~?) 複数形	代名詞 (一・二・三人称) 三人称単数の現在形の文 (肯定・否定・疑問) 助動詞 (can) Wh Question (Who, When, Where, How)	現在進行形、規則動詞の過去形 不規則動詞の過去形 助動詞 (did) Wh Question (Why / Because)

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習（1 学期）の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標（CAN-DO）を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまづきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて（授業外も含めた）個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力（4 技能とその統合）】言語材料・文法指導に終始することのないよう、聞く・話すの中で音声として文やその構造に触れさせ、音声と記号を対応させながら読む・書くに接続していく必要がある。My Project 1 では、①音声として自己紹介のモデルを聞き、②聞いたものを読み、③それらを基に簡単な自己紹介を話して行い、④その上で書くことにつなげている。本単元ではさらに、この過程を踏襲しつつ、読み手が理解しやすくなるよう文や文章を書き直したり、聞き手が理解しやすくなるよう工夫して話したりしていく。これが素地となって、次単元の質問する・聞き返すなどの活動が展開していく。

カ【言語や文化に対する理解（理解と承認）】1 時において他者紹介のモデルを聞く際、また、発表の準備をする際の ALT や学生ボランティアの助言の内容に、人物を肯定的に捉えるものが多く含まれることに気付きを促していくことが望ましい。これが、日本と諸外国の他者紹介の内容や方法の違い、ひいては、自己を含めたもの見方や考え方を理解させることにつながる。そのものの見方や考え方とは、つまり自己肯定感や自己効力感を支えるものであり、いずれ相互承認の素地ともなるものである。自己を肯定できないところでの他者の承認ないし肯定は困難だからである。ただし、小学校外国語活動と同じく、これらのことについては、コミュニケーション活動・教材の題材を通じて理解させていくものであり、知識理解を重視した形式的な指導に終始しないよう配慮する。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア【自校内】以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ【異校種間】小学校教員をゲストティーチャーに迎え、評価コメントをもらう機会を設定することで、異校種の協働を促進していくことができる。その際の具体的な役割としては、小学校からの学習の積み重ねを評価する等、生徒が自らの成長を実感できるものにすることが望ましい。

ウ【学校外】ALT や地域に外国籍の人材がいる場合、単元の終末等において、他者紹介をしてもらう機会を設定することが望ましい。その理由は、My Project 1 に記し、また上述したとおりである。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

4 単元の学習・指導と評価の計画（4時） ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	<p>◎他者紹介の内容を正確に聞き取ったり読み取ったりするとともに、内容にふさわしい音読をすることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm up 3 Introduction & Review (10分) ・プロジェクトの目的を理解する。 ・2学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。</p> <p>4 Main Contents (20分) ・他者紹介モデル(A・B)を聞く。 ・聞いた内容を文章で読み、音読する。 ・他者紹介の基本的な構成を確認し、モデル文を当てはめる。</p> <p>5 Language Use (13分) ・複数の他者紹介モデルから一つを選んで暗唱し、ペアで伝え合う。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 既習事項を確認すること。</p> <p>○ 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。</p> <p>○ 異なる言語や文化の他者紹介を聞いて、日本の他者紹介の内容や方法との違いを理解すること。</p> <p>・気付いたことを話し合うなどして、欧米の文化(等)では、他者を肯定的に捉える内容が多く含まれることに気付かせていく。</p> <p>○ 積極的に音読しようとする事。</p> <p>○ 正しい強勢、イントネーション、区切り、発音を用いて音読すること。</p> <p>○ 意味内容にふさわしく音読すること。</p>	<p>☆【理】① [読]</p> <p>☆【知】④ [文]</p> <p>☆【関】① [読]</p> <p>☆【表】① [読]</p> <p>☆【表】② [読]</p> <p>☆【知】② [言]</p>
2	<p>◎他者紹介に使うことができる表現を整理し、正しく且つまとまりよく簡単な他者紹介をすることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm up 3 Review (8分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・前時のペアワークを繰り返す。</p> <p>4 Main Contents (15分) ・既習の表現の中から他者紹介に使うことができるものを、新出の表現とともに確認、ワークシート②に整理する。</p> <p>5 Language Use (20分) ・整理した表現を使い、簡単な他者紹介をする。</p> <p>・発表の準備として、ワークシート③を用い、他者を紹介する文章の素案を書く。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。</p> <p>○ 自分の考えや気持ち、事実などを正しく話すこと。</p> <p>○ 与えられたテーマについて、まとまりよく話すこと。</p> <p>○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること</p> <p>○ 間違ふことを恐れず積極的に書こうとすること。</p> <p>○ 語と語のつながりに注意して正しく書くこと。</p> <p>○ 内容的にまとまりのある文章を書くこと。</p>	<p>☆【関】① [読]</p> <p>☆【表】① [読]</p> <p>☆【表】② [読]</p> <p>☆【知】② [言]</p> <p>☆【関】② [話]</p> <p>☆【表】③ [話]</p> <p>☆【表】④ [話]</p> <p>☆【関】③ [聞]</p> <p>☆【関】④ [書]</p> <p>☆【表】⑤ [書]</p> <p>☆【表】⑥ [書]</p> <p>☆【知】①②③ [言]</p>

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編



<p>3</p>	<p>◎他者を紹介する文章を読み手が理解しやすくなるように工夫しながら、且つ正しく書くとともに、聞き手が理解しやすくなるよう工夫して他者紹介をすることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・前時で確認・整理した他者紹介に使う表現を確認する。 ★4 Main Contents (40分) ・他者紹介の発表の準備・練習をする</p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりすること。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超え積極的にコミュニケーションを図ろうとすること。</p>	<p>☆【関】⑤ [書] ☆【関】⑥ [話] ☆【関】⑦ [文] ☆【関】② [話] ☆【表】③④ [話] ☆【関】③ [聞] ☆【理】② [聞] ☆【関】④ [書] ☆【表】⑤⑥ [書] ☆【理】① [読] ☆【知】①②③ [言]</p>
<p>4</p>	<p>◎聞き手が理解しやすくなるよう工夫して他者紹介をするとともに、その内容を正確に聞き取ることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Review and Practice (8分) ・プロジェクトの目的と課題を確認する。 ・前時で書いた他者紹介文を確認する。 ・他者紹介の練習をする。(個人) 4 Performance and Evaluation (30分) ・全員の前で、他者紹介をする。 ・発表者以外は、評価シートを用いて他者紹介を評価する。</p> <p>5 Consolidation (5分) ・プロジェクトを振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 自分の考えや気持ち、事実などを正しく話すこと。 ○ 与えられたテーマについて、まとまりよく話すこと。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 自然な口調で話されたりする英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超え積極的にコミュニケーションを図ろうとすること。</p>	<p>☆【関】② [話] ☆【関】⑥ [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】④ [話] ☆【関】③ [聞] ☆【理】② [聞] ☆【関】⑦ [文] ☆【知】①②③ [言]</p>

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 3/4時：Main Contents

◎本時のねらい：他者を紹介する文章を読み手が理解しやすくなるように工夫しながら、且つ正しく書くとともに、聞き手が理解しやすくなるよう工夫して他者紹介をすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
40分	<p>3 Main Contents</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者紹介の発表の準備・練習をする。 (自己、協同 (ペア・グループ)) <p>〈一般的な過程〉</p> <p>①前時で書いた紹介文を基に、他者紹介をする。</p> <p>②助言し合う。</p> <p>③必要に応じて紹介文を書き直す。</p> <p>④紹介文をある程度書き終えたら、他者紹介の練習をする。</p> <p>⑤互いに他者紹介をし、助言し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりすること。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超越積極的にコミュニケーションを図ろうとすること。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 可能な限り生徒の主体性を尊重し、自己学習や協同学習を通して準備・練習をさせ、必要に応じて個別の支援をする。 ・ その際、ALT、学生ボランティア、Student Teacher 等を活用する。 	<p>☆【関】⑤ [書]</p> <p>☆【関】⑥ [話]</p> <p>☆【関】⑦ [文]</p> <p>☆【関】② [話]</p> <p>☆【表】③④ [話]</p> <p>☆【関】③ [聞]</p> <p>☆【理】② [聞]</p> <p>☆【関】④ [書]</p> <p>☆【表】⑤⑥ [書]</p> <p>☆【理】① [読]</p> <p>☆【知】①②③ [言]</p> <p>(言動・観察)</p>
	<p>★Teacher Talk</p> <p>Today you are going to finish writing the “Introduction of Your Favorite Person.” After that you will make pairs and practice making a speech. The important thing is to listen to your partner and give some good advice on how to speak, where to make gestures and so on.</p>		

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編



他者紹介

Hello, everyone.
Do you know this guy?
This is Harry.
Harry is one of the members of ~~.
He looks super smart in a black suit.
He is from England.
His musical heroes are ~~ and ~~.
~~ is really popular around the world.
I love Harry best.
Thank you.



I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (中) コラム2 ◆◆
個に応じた指導・習熟度別指導

生徒1： 先生、難し過ぎてできないよ！

生徒2： 先生、簡単過ぎてつまらない！

生徒3： 先生、説明聞いてるだけじゃ分からない。もっと私に合わせて教えてよ！

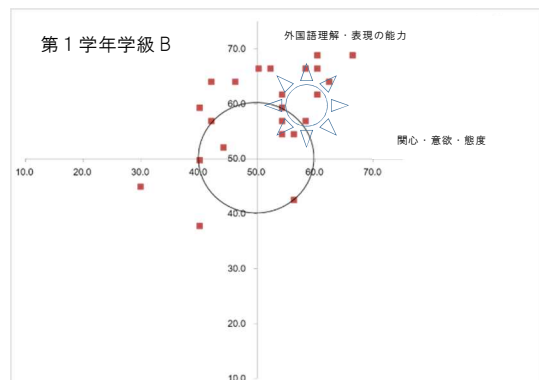
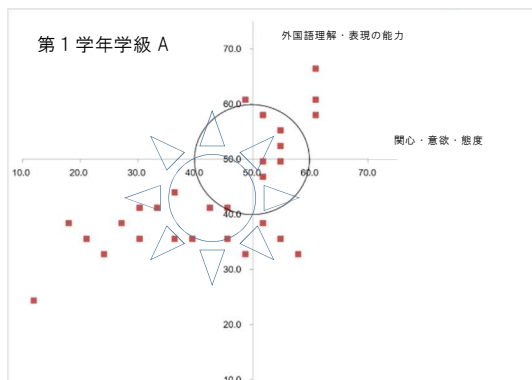
外国語科における「個に応じた指導」は、学年目標を生徒や地域の実情に応じて適切に設定する（例えば外国語教育理論編 p.58, 59、指導計画の作成（1））ことから、より教師の専門性が問われるところです。学年目標を適切に設定し、その上で、個々の生徒の学習状況を適切に評価、その先にあるのが個に応じた指導だからです。

個に応じた指導は、知識理解としての文法事項に関する指導のみならず、さほど難しくはないかもしれませんが、外国語科の目標（の一つ）は、4技能を統合したコミュニケーション能力の基礎を育成することです。授業内で各技能を個別にのみ扱ったり、ひいては、文法事項を知識理解として学ばせ、問題を解いたりするだけの授業の中で個に応じた指導に終始しては、目標に迫ることはできません。個に応じた指導のねらいは、あくまで、教科等の目標に迫ることであり、それが、よりよい人生を切り拓く基盤を培うことにつながるからです。

では、具体的な手だてとはというと、基本的には他の教科指導と同じです。理想を言えば切りがありませんが、生徒個々のカルテを作る。授業内では、生徒たちが実際にコミュニケーション活動を行う時間を十分に確保し、自力解決、ペアやグループなどの協同活動の中で個に応じ指導・支援していく。

仮に一斉指導を前提とするなら、そのための第一歩は、学年目標や単元目標に適切に準拠し、集団全体に与える課題を「集団の学力分布」を捉えて設定することにあると言えます。下図は、横軸に「関心・意欲・態度」、縦軸に「外国語理解・表現の能力」を取っており、一つ一つの点が個々の生徒を表しています。右上に行くほど、いずれも満足できる状態にあると考えてください。このように、杉並区「特定の課題に対する調査」（資料編 p.238～、特に p.241）の結果なども参考にしながら生徒の状況をプロットしてみると、学習集団の状況が把握しやすくなります。

さて、この二つの集団（学級 A と B）。仮に同じ学校の同じ学年であっても、全体に与える課題の量や質が、図中のマークで示すように、全く異なるはずで



Aの集団では、Bと比較するなら、全体に与える課題のレベルを少し易しく、且つ、広範囲な分布＝生徒個々に対応できるよう、例えば3ステップくらいから構成されるワークシートなどを用意する必要があるかもしれません。もしB学級と同じ課題を与えたなら、冒頭の生徒1のような発言が多く聞こえてくるかもしれません。一方Bでは、Aと同じ課題を与えたなら、生徒2のような発言が起きるかもしれません。

また、AでもBでも、先生が一方向的に説明を繰り返しているだけでは、個に応じることは難しくなります。つまるところ、生徒一人一人によって学習状況が異なるからです。先に、コミュニケーション活動を十分に確保し、その中で指導・支援をしていくと述べたのは、そのためです。

つまり、課題は、分布のやや中上位くらいを中心に設定し、分布の広がりや程度に応じてどの程度の段階を設けるかを考える。そして、全体での説明は最小限にとどめ、なるべく活動の時間を多くとり、課題の自力解決が難しいより下方に位置する生徒にはより丁寧に、より上方に位置する生徒には、用意しておいたより発展的で（解決するのにより時間を要する）課題に進ませるなどしていく。少なくとも、自分が与えた課題が、どの程度の生徒をカバーできるのかについては、強く自覚的である必要があります。仮に左図のマークが与える課題のカバーの範囲を示しているとするなら、そこから漏れてしまう生徒には、上方下方ともに、より厚い個に応じた指導や支援が必要になります。

ただし、例えば個により応じるための習熟度別クラスを編成したとしても、学習指導案等に記載する目標、それに準拠したBの評価規準は、全クラスで統一する必要があります。そうでなければ、各クラスによって評価の規準が異なることになってしまいます。

こうした工夫によって、1単位時間の中での個に応じた指導が可能になります。少人数クラスを編成する場合は、学び合いや協同学習による効果を考慮しつつ、習熟「別」と「均等」をバランスよく計画して実施していく必要があります。個・集団の状況によっては、均等クラスで複数課題・段階のワークシートなどを用いて個に応じつつ、学び合いや協同学習を推進した方が学級全体の学習効果が高くなることもあるからです。

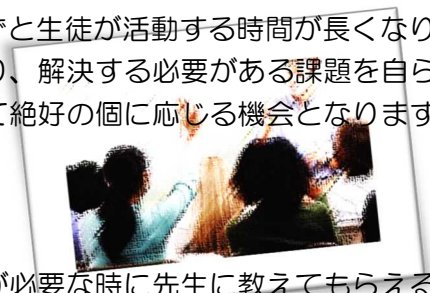
有効・妥当な手だては、当該の目標、何より生徒の実態に応じて変化します。

もちろん、より個に応じていくためには、更にいろいろな手だてを考えていかなければなりません。ALT等との協力的指導もその一つです。また、なかなか難しいですが、休み時間や放課後なども適宜活用していく必要があります。

加えて、プロジェクト学習（外国語教育理論編 p.61）は、自ずと生徒が活動する時間が長くなります。各レッスンプランに記すように、ある期間の学習を振り返り、解決する必要がある課題を自ら定め、プロジェクトを遂行していく。遂行の過程は、教師にとって絶好の個に応じる機会となります。

「先生、ここ教えて？」

冒頭の生徒3の発言は、こうした工夫の積み重ねにより、自分が必要な時に先生に教えてもらえるという「信頼感」や「安心感」に根ざしたものに変わるかもしれません。そして、第1学年においては、例えば正しい発音を身に付けさせることなどから、確実に一人一人の力を付けていく。つまずきや学び残しを取り戻すのは、後になれば後になるほど困難になっていきます。



事例2-1-3	中2第1学年3学期末-第2学年1学期始	Keywords: 聞いたことを英語でメモ、メモを共にしたまとまりのあるスピーチ、3技能の統合
My Project 1 「自己紹介をしよう」		My Project 4 「対話をつなげて相互理解を深めよう」
◆◆ My Project 3 質問してプロフィールカードを作ろう ◆◆		

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ プロフィールカードを作るために、必要なことを質問してメモをとったり紹介文を読んだりして他者のことを正確に理解するとともに、理解したことを正しく文に書いてカードを作成し、それを基に他者を紹介するまとまりのあるスピーチができる。(コミュニケーション)
- ・ 日本と外国の自己や他者の紹介の内容や方法の背景にあるもの見方や考え方を理解するとともに、言語や文化の違いを超えて積極的にコミュニケーションを図ろうとする。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	プロフィールカードの作成や他者の紹介に積極的に取り組んでいる。 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。	他者について質問し、聞いたことを正しく文に書いてカードを作成するとともに、それを基に他者を紹介するまとまりのあるスピーチをすることができる。	プロフィールカードを作るために、必要なことを質問してメモをとったり紹介文を読んだりして、他者のことを正確に理解することができる。
コミュニケーション 活動に即した 具体的な 評価規準	① [関] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ② [関] 聞き返すなどして内容を確認しながら紹介の内容を聞いている。 ③ [話] 身振りや手振りをうまく利用して他者を紹介している。 ④ [話] 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話している。 ⑤ [文] 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。	① [話] <u>他者のことについての質問を正しく伝えることができる。</u> ② [書] 語と語のつながりに注意して他者を紹介する文を正しく書くこと。 ③ [話] <u>他者の紹介について、まとまりのあるスピーチをすることができる。</u>	① [聞] 自己や他者の紹介を聞いて情報を正確に聞き取ることができる。 ② [書] <u>自己や他者の紹介を聞いてメモをとることができる。</u> ③ [読] 紹介の文章を読んで大切な部分などを正確に読み取ることができる。	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] 質問に必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [文] <u>日本と外国の自己や他者の紹介の内容や方法の背景にあるもの見方や考え方を理解して活動に取り組んでいる。</u>

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

- ア [目標・内容(事項)]** 本単元のプロジェクトは「質問してプロフィールカードを作ろう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は My Project 1 「正確且つまとまりのある表現・理解」から2「相手に伝わる表現の工夫」を受け、「質問を正しく伝えて必要なことを聞きメモをとる・聞き返す」と「まとまりのあるスピーチをする」が系統的に加わる。また、コミュニケーションの場面としては、Project 1 と2の「自己と他者の紹介」から本単元「質問する」を介し、「対話をつなげる」へと連続していく。Project 3 では相互理解を図るために、継続的なコミュニケーションを図る。コミュニケーションの内容は、系統上特に大きな追加はない。ただし本単元では、聞く・話す、そして読むことの本格的な統合が図られていく。
- イ [言語材料(文法事項)]** 主な言語材料(文法事項)の配列は、下表を前提する。Project 3 では質問し合う場面への転換に伴い Wh Question が加わる。ただし、必要な語や連語、慣用表現を含めた表現が、以後の学期・学年に配当されていても、目標・内容の系統性の理解に基づき、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図ったうえで柔軟に取り扱う必要がある。

第 1 学年 2 学期 (以前)	第 1 学年 3 学期 (本単元)	第 2 学年 1 学期 (以後)
代名詞 (一・二・三人称) 三人称単数の現在形の文 (肯定・否定・疑問)、 Wh Question (Who, When, How) 助動詞 (can)	現在進行形、規則動詞の過去形 不規則動詞の過去形 助動詞 (did) Wh Question (Why / Because)	be 動詞の過去形、過去進行形 未来形 (be going to ~, will ~) 助動詞 (must, have to ~, will) 複文 (I think that ~)

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習 (1 学期) の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標 (CAN-DO) を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまづきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて (授業外も含めた) 個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力 (4 技能とその統合)】本単元では、より一層 4 技能の統合に向けた活動を重視していく。My Project 1 から 2 では、①音声としてモデルを聞き、②聞いたものを読み、③それらを基に簡単に話し、④その上で書くこと、さらに、読み手が理解しやすくなるよう文や文章を書き直したり、聞き手が理解しやすくなるよう工夫して話したりしてきた。これが素地となり、本単元では、聞いたことに対して質問する・聞き返す (聞くこと) などの活動が展開していく。その際には、英語でメモをさせ (書くこと)、それを基に (音読・暗唱ではなく) まとまりのあるスピーチを工夫してする (話すこと) など、少なくとも 3 技能の統合がより現実的なコミュニケーションの場面の中で図られるようにしていくことが重要である。

カ【言語や文化に対する理解 (理解と承認)】Project 2 と同様、知識理解を重視した形式的な指導によらず、自己や他者の紹介のモデルを聞く際、人物を肯定的に捉えるものが多く含まれることに気付きを促していくことが望ましい。自己肯定感や自己効力感を支えるものの方や考え方である。なお、質問をさせる際には、このことへの気付きと合わせ、個人の情報として配慮し、質問を避けることが望ましい事項も必要に応じて確認するようにする。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア【自校内】以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ【異校種間】小学校教員をゲストティーチャーに迎え、活動を共有することもできる。その例としては、質問をし、プロフィールカードを作成する対象として授業を協働して行うことである。

ウ【学校外】ALT や地域に外国籍の人材がいる場合も異校種間協働と同様、活動を共有することができる。特に ALT については、コミュニケーションの場面が現実的に近付けば近づくほど、活動を通じて個々の生徒に対する個別の支援が有効に働く。また、指導事項には (十分に) 表現されていない、英語を母語ないし日常的に使う環境で身に付く文化などを伝えてもらう機会ともなる。

4 単元の学習・指導と評価の計画（4時） ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	<p>◎スピーチを聞いてメモをとったり質問したりするとともに、メモしたことをスピーチ原稿を読んで確認できる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Introduction & Review (15分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的を理解する。 1学年の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 プロジェクトに必要な言語材料（文法事項）を復習する。 <p>★3 Main Contents (30分)</p> <p>A 自己紹介（教師・ALT 等による）</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己紹介を聞き、必要なことを英語でメモする。 聞き逃したことや聞き取れなかったことを質問する。 スピーチ原稿を読んで、自分のメモしたことを確認する。 <p>B 他者紹介（教師・ALT 等による）</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者紹介を聞き、必要なことを英語でメモする。 聞き逃したことや聞き取れなかったことを質問する。 スピーチ原稿を読んで、自分のメモしたことを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> AとBの活動をともに、自己や他者の紹介の内容や方法の配慮点を確認する。 <p>4 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を確認すること。 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 質問を正しく伝えること。 聞いたり読んだりしたことについて（英語で）メモをとること。 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。 日本と外国の自己や他者の紹介の内容や方法の背景にあるもの見方や考え方を理解すること。 個人の情報として配慮する必要がある事項とともに、教師やALT等の紹介の内容や方法から、肯定的な人の捉え方についても気付きを促していく。 	<p>☆【関】① [聞]</p> <p>☆【関】② [聞]</p> <p>☆【理】① [聞]</p> <p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【理】② [書]</p> <p>☆【理】③ [読]</p> <p>☆【知】①②③ [言]</p> <p>☆【知】④ [文]</p>
2	<p>◎プロフィールカードを作るために質問したりメモをとったりしながら、材料を集めることができる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Review & Warm Up (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的と課題を再確認する。 Quick Q & A を使って既習事項を復習する。 <p>★3 Main Contents (35分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロフィールカードを作成する。 ①プロフィールカードの大まかな内容＝質問の観点を決める。 ②①を基に質問をし、カードの材料を集める。 <p>※ <u>カードを作る人数等は、生徒の実態に応じて適切に判断する。</u></p> <p>4 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 質問を正しく伝えること。 聞いたり読んだりしたことについて（英語で）メモをとること。 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超えて積極的にコミュニケーションを図ること。 	<p>☆【関】① [聞]</p> <p>☆【関】② [聞]</p> <p>☆【理】① [聞]</p> <p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【理】② [書]</p> <p>☆【知】①②③ [知]</p> <p>☆【関】⑤ [文]</p>



3	<p>◎質問したことを基にプロフィールカードを作成することができる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Review & Warm Up (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> Quick Q & A を使って既習事項を復習する。 <p>3 Main Contents (35分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロフィールカードを作成する。 ③前時(まで)に集めた材料を文に起こし、整理する。 ④③を基にプロフィールカードを作成する。 <ul style="list-style-type: none"> プロフィールカードを基に他者を紹介するスピーチの内容を考え、練習をする。 <p>4 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。 ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 与えられたテーマについて、まとまりのあるスピーチをすること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【表】②【書】 ☆【知】①【言】 ☆【関】③【話】 ☆【関】④【話】 ☆【表】③【話】 ☆【知】①②【言】
4	<p>◎プロフィールカードを基に他者を紹介するスピーチをすることができる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Review & Warm Up (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> Quick Q & A を使って既習事項を復習する。 <p>3 Performance and Evaluation (30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員の前で、他者を紹介するスピーチをする。 発表者以外は、評価シートを用いて他者紹介を評価しながら、スピーチの内容のメモを(英語で)とる。 紹介されている人物が誰かを当てる。必要があれば質問をする。 <p>※ <u>生徒の実態によっては、この後の時に、スピーチの内容を基に紹介文章を書かせる活動を設定してもよい。</u></p> <p>4 Consolidation (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを振り返り、学習到達目標(CAN-DO リスト)に照らして自己評価を行う。 <p>5 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 質問を正しく伝えること。 ○ 与えられたテーマについて、簡単なスピーチをすること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて(英語で)メモをとること。 ○ 日本と外国の自己や他者の紹介の内容や方法の背景にあるものの見方や考え方を理解すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【関】③【話】 ☆【関】④【話】 ☆【表】①【話】 ☆【表】③【話】 ☆【関】①【聞】 ☆【関】②【聞】 ☆【理】①【聞】 ☆【理】②【書】 ☆【知】①②③【言】 ☆【知】④【文】

I
小中一貫教育
理論編II
外国語教育
理論編III
外国語教育
実践編
全体・系統III
外国語教育
実践編
小学校III
外国語教育
実践編
接続・導入III
外国語教育
実践編
中学校IV
資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 1/4時：Main Contents

◎本時のねらい：スピーチを聞いてメモをとったり質問したりするとともに、メモしたことをスピーチ原稿を読んで確認できる。

担当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
30分	3 Main Contents A 自己紹介 ・自己紹介を聞き、必要なことを英語でメモする。 ・聞き逃したことや聞き取れなかったことを質問する。 ・スピーチ原稿を読んで、自分のメモしたことを確認する。 B 他者紹介 ・他者紹介を聞き、必要なことを英語でメモする。 ・聞き逃したことや聞き取れなかったことを質問する。 ・スピーチ原稿を読んで、自分のメモしたことを確認する。	○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 質問を正しく伝えること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて（英語で）メモをとること。 ○ 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。 ・ 英語でメモをとることに慣れていない場合は、メモのとり方（自分に分かればよい）を教示するとともに、スピードを落とすなどの配慮をする。 ・ メモの際には、英語の文や文章の構造を意識させるようにする。 ○ 日本と外国の自己や他者の紹介の内容や方法の背景にあるものの見方や考え方を理解すること。 ・ 個人の情報として配慮する必要がある事項とともに、教師やALT等の紹介の内容や方法から、肯定的な人の捉え方についても気づきを促していく。	☆【関】① [聞] ☆【関】② [聞] ☆【理】① [聞] ☆【表】① [話] ☆【理】② [書] ☆【理】③ [読] ☆【知】①②③ [言] ☆【知】④ [文] (メモ・観察)

Is Yuko Japanese?

Can she speak Japanese?

What is her favorite food?

What is it?

It is a kind of paste. They eat bread with it for breakfast.

Yes, she is. But she studied in Australia.

Yes, she can speak Japanese well.

She likes vegemite.

It is like MISO.

質問



I 小中一貫教育 理論編
 II 外国語教育 理論編
 III 外国語教育 実践編 全体・系統
 III 外国語教育 実践編 小学校
 III 外国語教育 実践編 接続・導入
 III 外国語教育 実践編 中学校
 IV 資料編

(2) 2/4時 : Main Contents

◎本時のねらい : プロフィールカードを作るために質問したりメモをとったりしながら、材料を集めることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
35 分	3 Main Contents ・プロフィールカードを作成する。 ①プロフィールカードの大まかな内容＝質問の観点を決める。 ②①を基に質問をし、カードの材料を集める。 ※ <u>カードを作る人数等は、生徒の実態に応じて適切に判断する。</u>	○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 質問を正しく伝えること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて(英語で)メモをとること。 ○ 間違いを恐れず、言語や文化の違いを超えて積極的にコミュニケーションを図ろうとすること。 ・ 質問をして材料を集める際には、正確さよりも流暢さを重視し、現実の場面での対話を意識させるようにする。	☆【関】① [聞] ☆【関】② [聞] ☆【理】① [聞] ☆【表】① [話] ☆【理】② [書] ☆【知】①② [知] ☆【関】⑤ [文] (カード・観察)
	★Teacher Talk Today you are going to finish your profile card. First, you draw the outline map of your questions. Please choose some good points for the person. Second, you take notes about what you heard in English. Third, don't be afraid of making mistakes when you speak English. ✓ Remarks ・「間違いを恐れず」という点について具体的な例を示すなどし、できるだけ生徒の不安を少なくするよう努める。		



Hello, everyone.
Please look at this picture.
This is my friend Yuko.
She lives in Sydney, Australia.
She works at the Youth Center in Willoughby.
She can dance hip-hop very well.
Her hobby is singing ENKA.
She is very kind to everyone.
I really like her.
Thank you.

他者紹介

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

◆◆ (中) コラム3 ◆◆
4 技能の統合的指導1 (中学校第1学年)

「英語の授業は楽しいし、英語を使って聞いたり話したり、読んだり書いたりすることができるようになってきていると思うんだけど…、私やっぱり不安です。」

さて、外国語科の目標は、

「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」
(外国語教育理論編 p.44, 45)

ことです。ここでは、現実のコミュニケーションの場面で外国語を使うことができるよう、聞く・話す・読む・書くの4技能の育成と統合が求められています。また、それを通じて、異なる言語や文化、その背景にあるものの見方や考え方を理解し、承認することができる態度も育成していく必要があることを示しています。ですから、冒頭の発言は、少なくとも生徒の自己評価において、外国語科の目標の実現が徐々に図られていっているということが言えるでしょう。

ここで、第1学年に掲載したプロジェクトを、第2学年を見据えつつ、方法の【連続性】確保の最も基礎となる「コミュニケーション活動」(同 p.46, 47) から振り返ってみましょう。

	コミュニケーション活動	
	場面	働き
第1学年	1 自己紹介	自己理解と他者理解 (相互理解の基礎)
	2 他者紹介	
	3 質問してプロフィールカードを作成	相互理解への接続
第2学年	4 対話の継続	相互理解 (相互承認の基礎)
	5 将来の目標を通じたコミュニケーション	
	6 ディベート	相互理解から相互承認への接続

各プロジェクトでも説明をしているとおりでありますが、上表のように改めてまとめてみると、コミュニケーション能力の高まりとともに、異なる言語や文化の理解から承認へと徐々にステップを踏んでいっていることが理解できると思います。

なお、第3学年では、より現実的なコミュニケーションの場面へ連続していきます。

I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編

しかしながら、です。時に生徒、ひいては教師も、こうしたプロジェクト・活動を、時数を割いて重ねていくことに不安になることがあるようです。

実は冒頭の発言、生徒と教師の「両者」から（よく）もちかけられる相談の内容です。

まず、生徒。どこかで生徒たちは、「(紙面で)問題を解く」ことのみが学習だと思ってしまうところがあるようです。生徒たちは、現実的に、高等学校等への進学を見据え、一体今活動していることが何の役に立つのか、ということに不安を覚えることがあるようです。

しかし、例えば入学試験一つをとっても、その型態は大きく変化してきているし、これからも更に変化していくことが見込まれます。従来はペーパーテストによる「選抜型」が多かったですが、現在は、面接をはじめとする多様な形態はもちろんのこと、ペーパーテスト自体も「資格型」に変化してきています。プロジェクト型の学習は、こうした入学試験の変化にも対応し得るものですし、そもそも、ペーパーテストで得点するための力もまた、4技能を活用したプロジェクトの進め方次第で、「結果的」に「紙面で問題を解くこと」に比較して、確実に身に付けることができます。

そういった意味では、教師もまた、生徒たちに確実に力が身に付いているかを把握するためのみでなく、生徒自身が「あ、確かにペーパーテストでも得点できるようになっている!」といった実感ももてるよう、適宜小テストなどを実施するとよいかもしれません。それは結果として、教師自身の安心や、プロジェクト型の学習を自信をもって進めていくことにもつながるはずです。事実、杉並区「特定の課題に対する調査」(ペーパーテスト)の設問の多くは、実際に4技能を活用していないと通過できないものが多く含まれています。(資料編の p.238~)

なお、以降の各学年の終わりのコラムで随時紹介していきますが、こんなエピソードがあります。

「先生、あの時はほんとうにありがとう。高校に行ってみて、ほんとによく分かった。やっぱり英語は、単語や発音の練習、辞書を使う、そういった地道な基礎の積み重ねが大事。そして、読んだり書いたりできるだけではダメだし、もちろん、聞いたり話したりできるだけでもダメ。」

英語が得意、だから、英語を活用する職業に就きたい。そういった願いをもつ多くの生徒は、例えば高等学校に進学する際、英語や国際理解教育の充実度合いを規準にすることがあります。しかし、です。読むことや書くこと、また、いわゆる文法問題を中心としたペーパーテストがよくできる、ということをもって英語が得意と自負しているならば、それは、高等学校での外国語科の学習を困難にしてしまうことがあるかもしれません。また、そのことで、せっかく英語を活用する職業に就きたい、と思っていた気持ちが挫折してしまうことも考えられます。

さて、第2学年は、徐々にプロジェクトの内容も高度になっていきます。当該学期間の各 Lesson の際には、学期末から次学期始に行うプロジェクトを見据えつつ、学習指導を展開してください。

事例 2-2-1	中学校第2学年 1学期末~2学期始	Keywords: 相互理解・継続的なコミュニケーション、問答・意見を述べ合う、3技能の統合
My Project 3 「質問してプロフィールカードを作ろう」	本単元	My Project 5 「将来の目標から相互理解を深めよう」
◆◆ My Project 4 対話をつなげて相互理解を深めよう ◆◆		

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ 相互理解を深めるために、話の内容を正確に聞き取ったり、感想を述べることができるよう文章の内容や書き手の考え方を読み取ったりするとともに、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。
(コミュニケーション)
- ・ 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを理解し、コミュニケーションに生かそうとする。
(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての知識・理解
	コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)			
単元の評価規準	相互理解を図るために積極的に対話を続けている。 日本と外国の他者に対する関心のもち方やその表現の仕方の違いをコミュニケーションの継続に生かしている。	相互理解を図るために、正確且つ適切に話すとともに、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。	相互理解を図るために、正確且つ適切に聞いたり読んだりするとともに、感想を述べることができるよう文章の内容や書き手の考え方を読み取ることができる。	既習の語句や文、文法などに関する知識や、対話をつなげるために必要な表現と理解の知識を身に付けている。 対話を通じ、日本と外国の他者に対する関心のもち方やその表現の仕方の違いを理解している。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	① [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ② [聞] 相互理解を深めるために、聞き返すなどして内容を確認しながら話を聞いている。 ③ [話] 身振りや手振りをうまく利用して話している。 ④ [話] 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話している。 ⑤ [話] つなぎ言葉などのいろいろな工夫をして話しを続けている。 ⑥ [文] 日本と外国の他者に対する関心のもち方やその表現の仕方の違いをコミュニケーションの継続に生かしている。	① [書] 既習事項を活用して正確且つ適切に書くことができる。 ② [話] 既習事項を活用して正確且つ適切に話すことができる。 ③ [話] 相互理解を深めるために、自分の考えや気持ち、事実などを正しく話し相手に伝えることができる。 ④ [話] <u>相互理解を深めるために、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。</u>	① [聞] 既習事項を活用して話の内容を正確に聞き取ることができる。 ② [読] 既習事項を活用して文章の内容を正確に読み取ることができる。 ③ [聞] 相互理解を深めるために、話を聞いて情報を正確に聞き取ることができる。 ④ [読] <u>相互理解を深めるために、意見や感想を述べたりできるようなプロフィール文を読んで書かれた内容や書き手の考え方を読み取ることができる。</u>	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] 対話をつなげるために必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [文] <u>対話を通じ、日本と外国の他者に対する関心のもち方やその表現の仕方の違いを理解して活動している。</u>

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 本単元のプロジェクトは「対話をつなげて相互理解を深めよう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は My Project 2 「相手に伝わる表現の工夫」、3 「質問を正しく伝えるに必要なことを聞きメモをとる・聞き返す」「まとまりのあるスピーチをする」を受け、継続的なコミュニケーションを通じて相互理解を図るために「感想を述べるができるよう文章内容や書き手の考え方を捉える」「聞いたり読んだりしたことについて問答する」が系統的に加わる。本単元では聞く・話す・読むの統合が図られており、Project 5 では更に書くことが系統上統合されていく。

イ【言語材料（文法事項）】主な言語材料（文法事項）の配列は、下表を前提する。Project 3 では質問し合う場面への転換に伴い Wh Question が加わり、本単元からは、多様な内容を表現する言語材料が拡充されているという配列の捉え方ができる。前単元と本単元で言えば特に「時制」に関する材料が拡充されている。これ以降に配列されている言語材料についても、これまでと同様、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図ったうえで柔軟に取り扱う必要がある。また、特に、小学校で慣れ親しんだ音声や基本的な表現を確認しておくことも、第2学年に至って特に重要になってくる。

第1学年3学期（以前）	第2学年1学期（本単元）	第2学年2学期（以後）
現在進行形、規則動詞の過去形 不規則動詞の過去形 助動詞（did） Wh Question（Why/ Because）	be 動詞の過去形、過去進行形 未来形（be going to ~, will ~） 助動詞（must, have to ~, will） 複文（I think that ~）	There is / are ~、接続詞（When ~, If ~） 不定詞（名詞的・副詞的・形容詞的用法） 動名詞、助動詞（may） You look ~. give + O + O.

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習（1学期）の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標（CAN-DO）を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまずきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて（授業外も含めた）個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力（4技能とその統合）】本単元でも、前単元と同様、より一層4技能の統合に向けた活動を重視していく。聞くことから話すこと、読むこと、さらに書くことへの順列を踏まえた上で、前単元では、英語でメモをさせ（書くこと）、それを基にまとまりのあるスピーチを工夫して話すことなど、3技能の統合が導入されている。本単元では、現実的なコミュニケーションの場面を想定した活動（ゲーム）を通じて聞く・話す、さらに、文章を読んでそれを基に聞いたり話したりする活動によって読むことを統合していき、次単元の書くことを含めた4技能の統合的活動へと連続させていく。多様な内容を表現する言語材料が拡充されてくるこの時期においては、文法指導や単一技能の指導に終始せず、特に、「コミュニケーション能力の基礎を養う」という教科目標を改めて意識しておくことが必要である。

カ【言語や文化に対する理解（理解と承認）】本単元では、前単元までの人物を肯定的に捉え、自己肯定感や自己効力感を支えるものの見方や考え方を受け、さらに、日本と外国の他者への関心のもち方や表現の仕方を理解させていくことが望ましい。それはすなわち、言語や文化の違いを超えて思いを伝え合うコミュニケーションから、多様な言語や文化を承認していく素地への系統的な発展である。このことについても、形式的な知識理解の指導にならないよう、前単元と同様、モデルとなる対話の中で理解を促していき、且つ、それを実際に対話の中で意識させ、活用することで指導の連続性を確保していく。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア【自校内】以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [異校種間] 3技能を統合し対話をつなげるようになるこの時期には、小学校教員を対話役としてゲストティーチャーに迎えることができるようになってくる。特に学習意欲の停滞も予想されるこの時期においては、かつての担任・外国語活動担当教員がゲームを通じた対話役とすることで、積極的に小学校段階からの成長を称賛し、活動に対する意欲付けとすることもできる。

ウ [学校外] ALTやJTEをはじめとする学校外人材についても、上記小学校教員と同様の役割が期待できる。また、特にALTや学生ボランティアなどは、先の言語・文化理解の内容である他者への関心のもち方や表現の仕方を十分に反映した対話などをモデルとして実演してもらうことで、よりそれらの理解が深まることが期待できる。時には誇張したモデル対話を示してもらうことなども有効である。

4 単元の学習・指導と評価の計画（3時） ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	<p>◎相互理解を深めるために、聞き返すなどして内容を確認したり、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>★2 Warm Up (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> Quick Response を使って既習事項を復習する。 <p>※ <u>学習者の実態によってはペアなどを組み生徒同士で行わせる。</u></p> <p>3 Introduction & Review (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的を理解する。 1学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 <p>4 Main Contents (35分)</p> <p>対話をつなげようゲーム1 (20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ゲームのやり方を知る。 ①対話が何往復できたかを競う。できるだけ長く対話が続くようにする。 ②話題は何でもよい。ただし、つなぎ言葉の分類のうち「相づち」は繰り返し使用できない。 <p>[つなぎ言葉の分類]</p> <ol style="list-style-type: none"> 相づち（慣用表現） Oh, really? Is that true? Are you sure? Is that right?, etc. 内容確認のための繰り返し 内容確認のための聞き返し 内容についての質問 自分の感想 <p>③対話の往復数を記録する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ゲームをする。（回数を確認する。） ペアでゲームを振り返り、使用したつなぎ言葉を分類・整理する。（ペアを変えてもう一度繰り返す。） <p>対話文の分析と練習（15分）</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書教材の対話文を分析し、実際に使われているつなぎ言葉を確認する。 モデル対話を聞いて、つなぎ言葉を分析する。 <p>5 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 4技能を統合しながら既習事項を活用すること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 身振りや手振りを利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。 ○ 自分の気持ち、事実などを正しく伝えること。 ○ 聞いたことを問答すること。 ○ 日本と外国の他者に対する関心のもち方やその表現の仕方の違いを理解すること。 ・ ALT等を活用し対話モデルを誇張して実演してもらうなどの工夫をし、日本と外国語の他者への関心のもち方やその表現の仕方に気付かせていく。 	<p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【表】② [書]</p> <p>☆【理】① [聞]</p> <p>☆【理】② [読]</p> <p>☆【関】① [聞]</p> <p>☆【関】② [聞]</p> <p>☆【理】③ [聞]</p> <p>☆【関】③ [話]</p> <p>☆【関】④ [話]</p> <p>☆【関】⑤ [話]</p> <p>☆【表】③ [話]</p> <p>☆【表】④ [話]</p> <p>☆【知】①②③ [知]</p> <p>☆【知】④ [文]</p>



2	<p>◎相互理解を深めるために、聞き返すなどして内容を確認したり、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Review & Warm Up (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的と課題を再確認する。 Quick Response を使って既習事項を復習する。 ※ <u>学習者の実態によってはペアなどを組み生徒同士でやらせる。</u> <p>3 Main Contents (25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> つなぎ言葉の分類にしたがって対話を続ける練習をする。(ペア) ※ 生徒の状況に応じてペアを変えさせるなど、練習が単調にならないよう工夫する。 <p>4 Consolidation (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> つなぎ言葉、自分の意見や感想を言う際に使える表現を、ここまでに扱っていないものも含めて確認する。 対話ゲームする。前時の往復数との比較をする。 <p>5 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 4 技能を統合しながら既習事項を活用すること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 身振りや手振りを利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。 ○ 自分の気持ち、事実などを正しく伝えること。 ○ 聞いたことを問答すること。 ○ 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いをコミュニケーションの継続に生かすこと。 ・ 自己や他者を肯定的に捉えるもの見方や考え方、また、日本と外国語の他者への関心のもち方や表現の仕方を実際の対話にも意識して取り入れていくよう促していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【表】① [話] ☆【表】② [書] ☆【理】① [聞] ☆【理】② [読] ☆【関】① [聞] ☆【関】② [聞] ☆【理】③ [聞] ☆【関】③ [話] ☆【関】④ [話] ☆【関】⑤ [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】④ [話] ☆【知】①②③ [知] ☆【関】⑥ [文]
---	--	--	--

I	小中一貫教育 理論編
II	外国語教育 理論編
III	外国語教育 実践編 全体・系統
III	外国語教育 実践編 小学校
III	外国語教育 実践編 接続・導入
III	外国語教育 実践編 中学校
IV	資料編

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
3	<p>◎相互理解を深めるために、聞き返すなどして内容を確認したり、感想を述べるができるよう文章の内容や書き手の考え方を読み取ったりするとともに、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Review & Warm Up (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的と課題を再確認する。 Quick Response を使って既習事項を復習する。 ※ <u>学習者の実態によってはペアなどを組み生徒同士でやらせる。</u> <p>3 Main Contents (30分)</p> <p>○対話をつなげようゲーム2</p> <ul style="list-style-type: none"> ゲームのやり方を知る。 <ol style="list-style-type: none"> ①基本のルールは、ゲーム1と同じ。 ②生徒4人程度をまとまりとし、対話役1人（英語科教師やALT、異校種や学校外人材）とグループを組む。 ③対話役はプロフィール文を用意する。 ④プロフィール文を基に生徒と対話役で対話をつなげ、回数を記録する。 ※生徒の実態に応じて、対話する順番を決めパスは1回までとする、プロフィール文を読んで質問を考える時間を事前に与える等の条件により、難易度を調節する。 <p>4 Consolidation (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトを振り返り、学習到達目標（CAN-DO リスト）に照らして自己評価を行う。 <p>5 Greetings</p>	<p>○ 4技能を統合しながら既習事項を活用すること。</p> <p>○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。</p> <p>○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。</p> <p>○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。</p> <p>○ 文章を読んで意見や感想などを述べるができるよう書かれた内容や書き手の考え方を捉えること。</p> <p>○ 身振りや手振りを利用して話すこと。</p> <p>○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。</p> <p>○ つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。</p> <p>○ 自分の気持ち、事実などを正しく伝えること。</p> <p>○ 聞いたり読んだりしたことについて問答したり意見を述べ合ったりすること。</p> <p>○ 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いをコミュニケーションの継続に生かすこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己や他者を肯定的に捉えるもの見方や考え方、また、日本と外国語の他者への関心のもち方や表現の仕方を実際の対話にも意識して取り入れていくよう促していく。 	<p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【表】② [書]</p> <p>☆【理】① [聞]</p> <p>☆【理】② [読]</p> <p>☆【関】① [聞]</p> <p>☆【関】② [聞]</p> <p>☆【理】③ [聞]</p> <p>☆【理】④ [読]</p> <p>☆【関】③ [話]</p> <p>☆【関】④ [話]</p> <p>☆【関】⑤ [話]</p> <p>☆【表】③ [話]</p> <p>☆【表】④ [話]</p> <p>☆【知】①②③ [知]</p> <p>☆【関】⑥ [文]</p>


5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 1/3時：Warm Up

◎本時のねらい：相互理解を深めるために、聞き返すなどして内容を確認したり、聞いたり読んだりしたことについて問答することができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
10分	<p>2 Warm Up</p> <ul style="list-style-type: none"> Quick Response を使って既習事項を復習する。 ※ <u>学習者の実態によってはペアなどを組み生徒同士でやらせる。</u> 	<p>○ 4 技能を統合しながら既習事項を活用すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> Quick Response の際には、4 技能を統合していく素地を養うために、語、連語及び慣用表現、言語材料を用い、以下の組み合わせをバランスよく、且つ生徒の実態に応じて提示できるよう、音声教材やフラッシュカードなど多様な材料や教具を用意しておくようにする。 <p>① [聞く→話す] (聞いて話す) ② [聞く→書く] (聞いて書く) ③ [読む→話す] (読んで話す) ④ [読む→書く] (読んで書く)</p>	<p>☆【表】① [話] ☆【表】② [書] ☆【理】① [聞] ☆【理】② [読] (ワークシート ・観察)</p>

対話をつなげようゲーム



Are you a fan of ~ ~ ?

Yes, I am, I love Niall.

Niall?

Yes, I know everything about Niall.

Are you sure?
When is his birthday?

He was born on **September 13, 1993.**

Good job.
What was his favorite subject?

His favorite subject?
Geography.

That' s right,
I' m a fan of Niall too.

Oh, are you?

- I 小中一貫教育 理論編
- II 外国語教育 理論編
- III 外国語教育 実践編 全体・系統
- III 外国語教育 実践編 小学校
- III 外国語教育 実践編 接続・導入
- III 外国語教育 実践編 中学校
- IV 資料編

◆◆ (中) コラム4 ◆◆ 学習意欲の喚起

学習意欲の喚起。これは、第2学年の学習指導に当たり、特に重要なテーマになるかもしれません。中学校生活にも慣れてきて、部活動等でも中心的に存在になりつつ、後輩もできる。

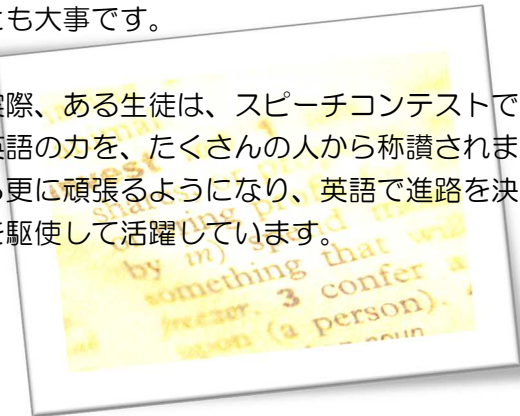
そんな時期に、どうすれば生徒の学習意欲を高めていくことができるのでしょうか。ここでは、二つの事例を紹介しつつ、話をはじめたいと思います。

■力は付いているんだけど…、そんな生徒はみんなの前に

確実に力が付いてきているのだけれど、なかなかそれを発揮できない、また、十分に発揮できないから人からも承認されず、学習意欲も徐々に減退していってしまう。こんなパターンで学習意欲が減退傾向にある生徒は、人前で実力を発揮する機会を設定することが有効かもしれません。

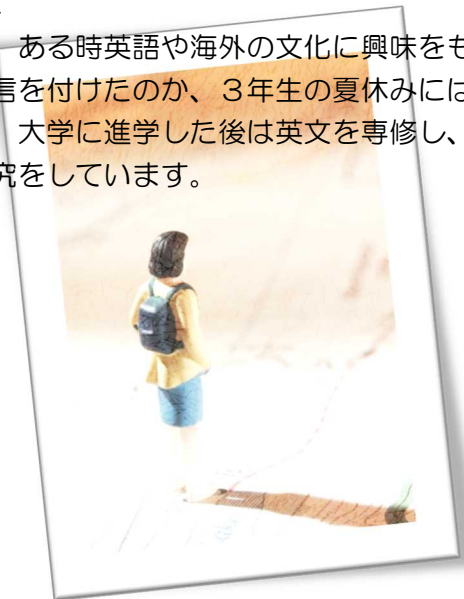
例えば、英語エンターテイメント（英語学芸会）、スピーチやスキットの大会。そういった機会をそっと紹介してみて、もし「やってみる」と言ってくれたなら、休み時間や放課後などの時間を使って、個人指導をしてみる。「そっと」紹介するのは、みんなの前に大々的に出されたり褒められたりするのが苦手な生徒への配慮です。もちろん全員に伝える、つまり、「公平性」に配慮することも大事です。

実際、ある生徒は、スピーチコンテストで人前に出る機会を通じ、実力をいかに発揮。自分の英語の力を、たくさんの人から称讃されました。その後はめきめきやる気を出し、2年生の途中から更に頑張るようになり、英語で進路を決めました。現在は、外資系の企業・銀行に就職し、英語を駆使して活躍しています。



■興味・関心はあるんだけど…、そんな生徒は大きな世界に

これも似た例です。1年生のとき、評定は「3」でした。ある時英語や海外の文化に興味をもったみたい。2年生で評定は「4」になりました。これで自信を付けたのか、3年生の夏休みには、教師の紹介で、個人的にイギリスで海外体験に行くまでに。大学に進学した後は英文を専修し、国際結婚。今も、とある海外の国で、英文学に関わる学問研究をしています。



もちろん、こんな例はまれなことかもしれません。第一の事例では、「他者からの承認」がキーワードでした。第二の事例は、「興味・関心の対象を更に広げる」がキーワードです。しかし、そもそも実力が付いてきていなければ第一の事例のようなことは難しいですし、英語や国際理解に興味や関心をあまりもっていなければ、第二の事例のようなこともうまく働かないかもしれません。

とすれば、考えられる方法は、以下のようなものです。

■活動自体を楽しくする

実は My Project4 の主たる活動を「対話をつなげようゲーム」にしたのはこのためです。学習もだんだんとパターン化してしまうこの時期、変化を付けつつ活動自体を楽しいものにし、生徒が自然と活動に興味をもてるよう配慮しています。Warm Up も Quick Response を使い、4技能の統合に向けてそれぞれを組み合わせ活用させつつ、テンポのよいものになるよう工夫しています。

■自己決定させる

生徒は、ともすると与えられることに慣れてしまいます。課題は、ある一定の条件の下、自ら決めさせる。学習や指導の方法は、当該の目標を達成するための手段なので、状況に応じて柔軟にいろいろなものを組み合わせていけばよい。2年生になると、徐々に、自分で課題を決め、その解決のための方法を自分で選べるようになってきます。プロジェクト学習はそうした考え方を基に設定しているものですが、学期途中の各 Lesson においても、実態に応じ、生徒自身の自己決定を軸にした学習や指導を構想してみてください。

■分かる／できるが楽しい

分かるようになるため、できるようになるために学習している、ということもありますが、分かってきた、できてきた、という実感は、次の活動への意欲となります。

最後に。教師の説明を静かに聞く。課題を与えると、静かに取り組む。
そんな姿を想像してみてください。

教師 「よし、はじめるぞ。」

生徒 「…………… (書く音)」

それは多くの場合よいことではありますが、それが毎時間の英語の授業風景だとしたら、自らの指導を振り返る必要があるかもしれません。実はここまで書いてきたことは、学習意欲は学習意欲でも、「内発的」なものです。与えられる、つまり「外発的」な動機づけがなければ、学習しない。もしかしたら、静かに聞く・取り組むという授業風景は、そうしたことを象徴しているかもしれないからです。必要な時に、必要なことを、自ら学ぶことができる。そもそも外国語科(英語)は、4技能を育成しそれを統合してコミュニケーションするための基礎を養うことが目標です。

目指すのは、「よりよい人生を切り拓く基盤」となるよう、外国語能力とともに「学び方」を身に付けさせ、生涯にわたる「自律的学習者」(外国語教育理論編 p.61)を育成することです。

事例 2-2-2	中学校第2学年 2学期末~3学期始	Keywords: 4技能の統合、英語のままの理解・認識、他者への関心のもち方・表現の仕方
My Project 4 「対話をつなげて相互理解を深めよう」	本単元	My Project 6 「賛成や反対を超えて承認し合おう」
◆◆ My Project 5 将来の目標から相互理解を深めよう ◆◆		

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ 将来の目標から相互理解を深めるために、まとまりのあるスピーチをして問答するとともに、自分の考えや気持ちが伝わるよう工夫してまとまりのある文章を書いたり、文章を読んで書き手の考えや気持ちを読み取り適切に応じたりすることができる。 (コミュニケーション)
- ・ 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いの理解を、コミュニケーションに生かそうとする。 (言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての知識・理解
	コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)			
単元の 評価規準	将来の目標から相互理解を図るために積極的に活動に取り組んでいる。 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを活動に生かしている。	将来の目標から相互理解を深めるために、自分の考えや気持ちが的確に伝わるようまとまりのあるスピーチをして問答したり、文章を書いたりすることができる。	将来の目標から相互理解を深めるために、スピーチを聞いて内容を正確に聞き取ったり、文章を読んで書き手の考えや気持ちを読み取り、適切に応じたりすることができる。	既習の語句や文、文法などに関する知識や、書き手の考えや気持ちに適切に応じるために必要な表現と理解の知識を身に付けている。 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを理解している。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	① [話] 身振りや手振りをうまく利用してスピーチをしている。 ② [話] 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話している。 ③ [話] つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話し続けている。 ④ [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ⑤ [聞] <u>相互理解を深めるために、聞き返すなどして確認しながら話を聞いている。</u> ⑥ [書] 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。 ⑦ [読] <u>書き手の考えや気持ちを理解するために、繰り返して読んだり読み返したりしている。</u> ⑧ [文] 日本と外国の他者に対する関心のもち方やその表現の仕方の違いをコミュニケーションの継続に生かしている。	① [話] 将来の目標についてまとまりのあるスピーチをすることができる。 ② [話] 将来の目標についてのスピーチを聞き問答することができる。 ③ [書] <u>将来の目標が読み手に的確に伝わるようまとまりのある文章を書くことができる。</u>	① [聞] 相互理解を深めるために、スピーチを聞いて情報を正確に聞き取ることができる。 ② [書] 相互理解を深めるために、スピーチを聞いてメモをとることができる。 ③ [読] スピーチ原稿を読んで大切な部分などを正確に読み取ることができる。 ④ [読] <u>相互理解を深めるために、文章を読んで書き手の将来の目標について理解し、適切に応じることができる。</u>	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] 書き手の考えや気持ちに適切に応じるために必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [文] 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを理解して活動している。

I 小中一貫教育 理論編
 II 外国語教育 理論編
 III 外国語教育 実践編 全体・系統
 III 外国語教育 実践編 小学校
 III 外国語教育 実践編 接続・導入
 III 外国語教育 実践編 中学校
 IV 資料編

3 義務教育 9 年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 本単元のプロジェクトは「将来の目標から相互理解を深めよう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は、Project 4「感想を述べるができるよう文章内容や書き手の考え方を捉える」「聞いたり読んだりしたことについて問答する」を更に深めるものものとして位置付けられる。前単元では、「内容確認のための繰り返し」「聞き返し」「質問」「感想」の「つなぎ言葉」の表現を具体的な学習内容とし、主として聞く・話す活動で用い、読むことを関連付け 3 技能を統合していった。本単元では、前単元からの系統上「読んだ文章に対し、自分の考えや感想を伝えるために書く」ことにつなぎ言葉の表現を用い、書くを含めた 4 技能の統合を図っていく。

イ [言語材料(文法事項)] 主な言語材料(文法事項)の配列は、下表を前提する。Project 4 以降は、漸次多様な内容を表現する言語材料が拡充されていく配列である。前単元までに「時制」に関する材料の拡充が一区切りとなり、本単元では状況をより詳細に理解したり表現したりするための材料が拡充されている。これ以降に配列されている言語材料についても、これまでと同様、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図ったうえで柔軟に取り扱う。また、特に本単元以降は、小学校では慣れ親しんでいない表現や、「不定詞」に例を見るように、「英語のままの理解」をより要する言語材料が多用されるようになる。

第 2 学年 1 学期 (以前)	第 2 学年 2 学期 (本単元)	第 2 学年 3 学期 (以後)
be 動詞の過去形、過去進行形 未来形 (be going to~, will~) 助動詞 (must, have to~, will) 複文 (I think that ~)	There is / are~, 接続詞 (When~, If~) 不定詞 (名詞的・副詞的・形容詞的用法) 動名詞、助動詞 (may) You look~, give + O + O.	同等比較・比較級 最上級 受動態

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア [プロジェクト型] My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ [到達目標の明示] 各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ [既習事項の確実な定着] プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習(1 学期)の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標(CAN-DO)を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ [評価] 学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまずきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて(授業外も含めた)個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとするのが大切である。

オ [コミュニケーション能力(4 技能とその統合)] 本単元は、4 技能の統合に向けた活動を展開していく。前単元は、聞く・話す、読むの 3 技能の統合を継続的な対話(対話ゲーム)によって図った。本単元はこれに連続して書くを統合していくために、まず、与えられたテーマについて簡単な構成メモを作って話し、問答し、それを基にして文章を書く。この後、前単元までは「文章を基にスピーチ」という展開を採用してきたが、本単元は「文章を読み、自分の考えや感想を伝えるために書く」活動へ転換する。これによって、聞く・話すを基盤として「書く→読む→書く」の統合が図られ、以降の単元では、現実のコミュニケーション場面に即して4 技能の多様な組み合わせを用いながら活動を展開してくようになる。なお、特にスピーチの際には、あくまでメモを補助的に用いて半即興的にする必要があり、文章を書いて暗唱(音読)することのないよう留意する。より現実的なコミュニケーション活動を展開するためである。

カ [言語や文化に対する理解 (理解と承認)] 不定詞は、日本語訳に的確な当てはまりがない、「不定詞」という文法上の分類名からその内実を理解することが困難といった理由から、つまずきや学び残しが発生しやすい。後の「現在完了」「関係代名詞」なども含め、英語に特有の言語材料については、「状況」(context)が明確な実際のコミュニケーションの場面において **Authentic** な音声を聞き、表現を倣い覚え、話したり読んだり、書いたりする活動を展開していくようにする。「英語のままの理解」(認識)を重視するということであり、中学校外国語科の導入時から、日本語と英語の文構造の違いなどを着実に理解させておくことが望まれる。観点を変えれば、小学校で慣れ親しんだ音声や基本的表現が素地ということでもあり、中学校においても、必要に応じ、教科書外に **Authentic** な教材を活用していくことが望ましい (Basic Expressions & Aphorisms もその一つである。p.226)。「日本語を基にした英語の理解」は、英語に特有な不定詞などの言語材料において、一定の限界が生まれる。

また、本単元では、前単元において理解した日本と外国の他者への関心のもち方や表現の仕方の違いを引き続き活用させていくようにする。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [異校種間] 小学校教員から、例えば第6学年「将来の夢から卒業スピーチをしよう」の際の映像資料などを提供してもらい、モデルスピーチと合わせて視聴することもできる。生徒にとって過去の自分の姿に触れる機会ともなり、教師ともども、成長を実感する機会ともなることが期待できる。

ウ [学校外] 世界の様々な国の中学生の夢や目標に対する考え方について話してもらったり、可能であればスピーチ映像などを提供してもらったりすることが望ましい。また、2学年の末ともなると、プロジェクト学習において、生徒が自己学習や協同学習を通じて発表等の準備や練習をする時間も多く確保されてくるようになる。ALT や JTE をはじめとした学校外人材については、こうした時間に個別の指導・支援をしてもらうようにする。ただし、こうした協力的指導は、当該の学習到達目標はもちろん、生徒の学習の経過や現在の状況を共有した上で、適切に役割分担をしてから行う必要がある。

4 単元の学習・指導と評価の計画 (4時) ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動 (配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点 (文化理解のみ)	☆評価
1	◎将来の目標を伝えるスピーチを聞きメモを取って内容を正確に聞き取ったり、その原稿を読んで内容を正確に読み取ったりすることができる。 1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (15分) ・プロジェクトの目的を理解する。 ・2学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 ★4 Main Contents (25分) ・将来の目標 (夢などを含む) モデルスピーチを聞き、内容のメモをとる。 ・スピーチを聞いた後にスピーチ原稿を読み、メモと照らし合わせながらスピーチの基本的な構成を確認する。 ・将来の目標を伝える内容の大まかな構成を考えてスピーチメモを作る。 5 Greetings	○ 既習事項を確認すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて (英語で) メモをとること。 ○ 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。	☆【理】① [聞] ☆【理】② [書] ☆【理】③ [読] ☆【知】①② [言]



<p>2</p>	<p>◎メモを基に将来の目標について、身振りや手振りを使ったりつなぎ言葉を用いるなどの工夫をしたりして簡単なスピーチをすることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・前時に作成したメモを確認する。</p> <p>4 Main Contents (40分) ・メモを基に将来の目標について話し、問答する。 (ペア・グループ) ※ <u>話す人数は、生徒の実態に応じて適切に判断する。</u></p> <p>・ペアやグループで、スピーチの構成と内容に対して(日本語で)助言する。 ※ <u>助言は日本語でよい。スピーチの「仕方」ではなく「構成」と「内容」について助言し合う。</u></p> <p>・スピーチメモと問答、助言を基に、将来の目標を伝える文章の構成を考えメモする。</p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。 ○ 与えられたテーマについてまとまりのあるスピーチをすること。 ○ 聞いたことについて問答すること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて(英語で)メモをとること。 ○ 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを活動に生かすこと。 ・前単元で理解した日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを活動に生かすよう促す。</p>	<p>☆【関】① [話] ☆【関】② [話] ☆【関】③ [話] ☆【表】① [話] ☆【表】② [話] ☆【関】④ [聞] ☆【関】⑤ [聞] ☆【理】① [聞] ☆【理】② [書] ☆【知】①② [言] ☆【関】⑧ [文] ☆【知】④ [文]</p>
<p>3</p>	<p>◎将来の目標が読み手に的確に伝わるよう、文と文のつながりに注意して書いたり書き直したりしながら文章を書くことができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・スピーチの構成メモ、前時の問答や助言された内容を確認する。</p> <p>4 Main Contents (40分) ・将来の目標を伝える文章を書く。</p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりすること。 ○ 自分の考えや気持ちを読み手に的確に伝わるようまとまりのある文章を書くこと。</p>	<p>☆【関】⑥ [書] ☆【表】③ [書] ☆【知】①② [言]</p>

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

I 小中一貫教育
理論編

II 外国語教育
理論編

III 外国語教育
実践編
全体・系統

III 外国語教育
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
接続・導入

III 外国語教育
実践編
中学校

IV 資料編

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
4	<p>◎文章から書き手の将来の目標の内容やそれに関わる考え方を繰り返して読んだり読み返したりして読み取るとともに、読み取った書き手の考えや気持ちに対して適切に応じることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Performance and Evaluation (35分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の目標について書かれた文章を読み合う。 ・評価シートを用いて文章を評価し、自分の意見や感想を（英語で）書く。 <p>※ <u>ここでの意見や感想は、特に前単元で学習したつなぎ言葉活用する。</u></p> <p>4 Consolidation (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトを振り返り、学習到達目標（CAN-DO リスト）に照らして自己評価を行う。 <p>5 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の考えや気持ちが読み手に的確に伝わるようまとまりのある文章を書くこと。 ○ 書き手の考えや気持ちを理解するために、繰り返して読んだり読み返したりすること。 ○ 文章から書き手の考えや気持ちを理解し、適切に応じること。 ○ 日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを活動に生かすこと。 ・ 前単元で理解した日本と外国の他者に対する関心のもち方や表現の仕方の違いを活動に生かすよう促す。 	<p>☆【表】③【書】</p> <p>☆【関】⑦【読】</p> <p>☆【理】④【読】</p> <p>☆【知】①②③【言】</p> <p>☆【関】⑦【文】</p> <p>☆【知】④【文】</p>



5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 1/4時：Main Contents

◎本時のねらい：将来の目標を伝えるスピーチを聞きメモを取って内容を正確に聞き取ったり、その原稿を読んで内容を正確に読み取ったりすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
25分	<p>3 Main Contents</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の目標（夢などを含む）モデルスピーチを聞き、内容のメモをとる。 ・スピーチを聞いた後にスピーチ原稿を読み、メモと照らし合わせながらスピーチの基本的な構成を確認する。 ・将来の目標を伝える内容の大まかな構成を考えてスピーチメモを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然な口調で話された英語を聞いて情報を正確に聞き取ること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて（英語で）メモをとること。 ○ 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。 ・ 構成メモは、文章ではなく、あくまで「メモ」にとどめるようにさせる。次時においも、文章を暗唱（音読）するのではなく、メモを補助として半即興的にスピーチをさせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【理】① [聞] ☆【理】② [書] ☆【理】③ [読] ☆【知】①②③ [言] <p>(メモ・観察)</p>
<p>★Teacher Talk</p> <p>Today I want you to remember very important thing. When you make a speech, you usually write all the sentences first and you try to remember everything perfectly, right? Today I want you to do it a little differently. The very important point is not to remember all but to speak naturally according your note. Don't be afraid of making mistakes. Be brave.</p> <p>✓ Remarks</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「間違いを恐れず」という点について具体的な例を示すなどし、できるだけ生徒の不安を少なくするよう努める。 			

将来の目標のスピーチ
(メモを見ながら半即興的に)

Hi! My goal is to be a professional guitarist. I like music. I'm in the music club and practice every day. I'm good at playing the piano and the guitar. My parents have a lot of music CDs and I always listen to them with my family.

My brother lives in Barcelona, Spain. He studies Spanish. When I visited him last summer, he took me to the flamenco concert. The sounds of the guitar, the dance and the voice shaking with deep emotion gave me a great impression. So I wanted to be a flamenco guitarist in the future. Thank you.

- I 小中一貫教育 理論編
- II 外国語教育 理論編
- III 外国語教育 実践編 全体・系統
- III 外国語教育 実践編 小学校
- III 外国語教育 実践編 接続・導入
- III 外国語教育 実践編 中学校
- IV 資料編

◆◆ (中) コラム5 ◆◆
 外国語の指導を通じた言語や文化に対する理解と承認

外国語科の指導は、コミュニケーション能力の育成とともに、言語や文化に対する理解と承認を養うものとして実施していく必要があります。外国語によるコミュニケーション能力は、言語や文化に対する理解と承認の感度、つまり、共に生きる力を基盤とするからです。

しかしながら、中学校外国語科の指導は、ともすると、このことを意識しないで進めてしまうことがあるかもしれません。私たちは、今一度外国語教育の目標（外国語教育理論編 pp.41-45.）に立ち返り、このことに十分自覚的である必要があります。といっても、もちろんそれは形式的な知識理解を重視したものではありませんから、活動や教材の題材の設定（同 p.55, 59、指導計画の作成（3））にこそ教師の専門性が問われることとなります。

ここでも、（中）コラム3と同じく、中学校の各プロジェクトで扱っている題材を、下表に整理しました。特に文化の理解と承認については、個人のことから個と個の関係性、文化背景にあるものの見方や考え方から、グローバル社会の中での日本人としての自覚、さらに、ユニバーサリゼーション（普遍的な福祉）というように、題材にも系統性に応じた連続性が確保されています。

	コミュニケーション活動		言語や文化に対する理解と承認 活動・教材の題材
	場面	働き	
第1 学年	1 自己紹介	自己理解 と他者理解 (相互理解の基礎)	自己紹介の 内容や方法の違い
	2 他者紹介		自己・他者を含めた人の (肯定的な) 捉え方 (プライバシーへの配慮)
	3 質問してプロフィールカードを作成	相互理解 への接続	
第2 学年	4 対話の継続	相互理解 (相互承認の基礎)	他者への 関心のもち方・表現の仕方
	5 将来の目標を通じたコミュニケーション		
	6 ディベート	相互理解から 相互承認への接続	相互理解を図るための 議論の積み重ね
第3 学年	7 外国文化のインタビュー記事を作成	相互承認	外国文化の背景に あるものの見方・考え方
	8 日本の伝統文化をプレゼンテーション		文化背景にある日本と外国の ものの見方・考え方の差異、 グローバル化、その中で の日本人としての自覚
	9 学びの成果を還元するプロジェクト追究		
	Last 2020年東京オリンピック・パラリンピック を見据えた卒業スピーチ	相互承認 (事そのもの)	ユニバーサリゼーション（普遍的 な福祉）と国際協調

かつて、こんな生徒がいました。ALT に関わることです。ALT の出身国や生活したことのある国は様々です。ある時生徒はそのことに気付いたようで、例えばそれは、

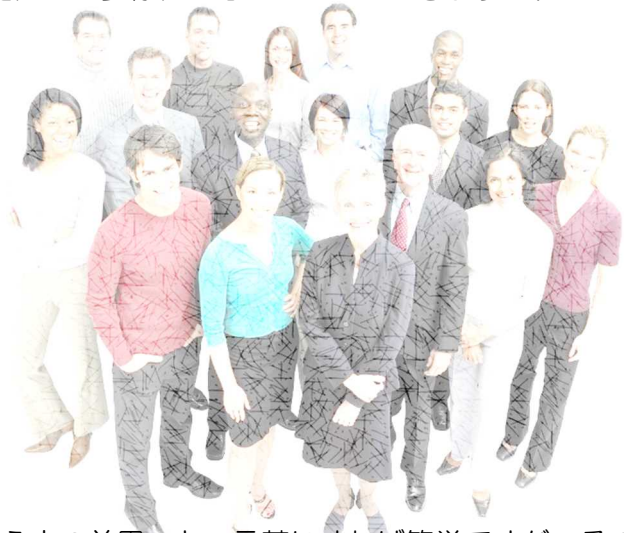
「ねえ先生、色の spelling は “colour” なの “color” なの？」
「先生、“doll” の発音が ALT によって違うような…なんで？」

といった発言に象徴されます。いわゆる「アメリカ英語」と「イギリス英語」の違いです。同じ英語を扱っていても、言語の差異はこんなところにも現れてきます。なお、英語が母語でない ALT の場合、例えば日本人の発音が難しいとされる “th” などには十分配慮する必要があります。

また、ALT 個々によって国民性が違うところも、学校生活を共に送る時間が長くなればなるほど、際立って見えてくるところがあります。もちろん ALT もいろいろ驚きがあるようで、日本の（特に学校文化で）驚いたことを教えて？ と質問してみると、とても興味深い回答が返って来たりします。

こうしたことから、ALT の配置も、外国語能力の育成のみでなく、多様な国籍・背景をもつ人を意図的に配置して、多様な文化に触れさせていくことが大切です。ALT が変わると困るとの意見も聞くことがありますが、多様な文化を学ぶ、ということを考えれば、むしろ ALT が定期的に変わることは、とてもよい機会としても捉えることができます。

また、生徒によっては、ALT に積極的に進路を相談しに行ったこともありました。その生徒は、国際高等学校を受験して見事に合格、現在は国際的な仕事に就くために大学生活を送っています。日本人の教師も多様な属性や背景がある方が、生徒個々の多様性に応じることができますが、ALT もそれと同じことが言えます。



ところで、「文化の背景にあるものの見方・考え方の差異」と、言葉にすれば簡単ですが、その具体的な例を、エピソードを交え、幾つ挙げることができるでしょうか。また、それを生徒たちに理解させるために、具体的な教材をどれだけもち合わせているでしょうか。冒頭で述べたように、教師の専門性（の高さ）は、こういったエピソードや具体的な教材を幾つ挙げることができるかという点にも支えられています。

事例 2-2-3 中2第2学年3学期末-第3学年1学期始 Keywords: 4技能の統合、質的發展のない方法の繰り返し、主張の違いを超えた承認、
 My Project 5「将来の目標から相互理解を深めよう」 **本単元** My Project 7「外国文化のインタビュー記事を作ろう」
◆◆ My Project 6 賛成や反対を超えて承認し合おう ◆◆

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- 与えられたテーマについて、賛成や反対の主張が的確に伝わるよう文と文のつながりに注意して文章を書き、それを基に明確に主張を伝えるスピーチをするとともに、それぞれの主張やその根拠を理解するために文章を読んで書かれた内容や考え方を捉えたり、スピーチを聞いて概要や要点を聞き取り、議論を総括するコメントしたりすることができる。(コミュニケーション)
- 相互理解を深めるために議論を積み重ねる外国の文化について理解し、互いの主張やその根拠を承認しようとする。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	テーマについて賛成と反対を主張したり、それぞれの主張を理解して適切に応じたりするために積極的に活動に取り組んでいる。 賛成や反対を超え、互いの主張やその根拠を承認しようとしている。	与えられたテーマについて、賛成や反対の主張が的確に伝わるよう文と文のつながりに注意して文章を書き、それを基に明確に主張を伝えるスピーチをしたり、両主張・根拠を聞いて議論を総括するコメントをしたりすることができる。	与えられたテーマについての主張やその根拠を理解するために文章を読んで書かれた内容や考え方を捉えたり、スピーチを聞いて概要や要点を聞き取ったりすることができる。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	① [読] 書き手の主張を理解するために繰り返し読んで読み返したりしている。 ② [書] 相手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。 ③ [話] 身振りや手振りをうまく利用してスピーチをしている。 ④ [話] 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話している。 ⑤ [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ⑥ [文] 賛成や反対を超え、互いの主張やその根拠を承認しようとしている。	① [書] テーマに対する主張が相手に的確に伝わるようにまとまりのある文章を書くことができる。 ② [話] <u>与えられたテーマについて、主張を明確に伝えるスピーチをすることができる。</u> ③ [話] <u>与えられたテーマについての両主張やその根拠を聞いて議論を総括するコメントをすることができる。</u>	① [読] 文章の大切な部分を正確に読み取ることができる。 ② [読] 話し手や書き手の意見などに対して賛否やその理由を示すことができるよう、書かれた内容や考え方を捉えることができる。 ③ [聞] 主張を理解するために、スピーチ聞いてメモをとることができる。 ④ [聞] <u>まとまりのあるスピーチを聞いて概要や用言を適切に聞き取ることができる。</u>	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] テーマについて主張するために必要な表現の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [言] 各主張に適切に応じるために必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ⑤ [文] <u>相互理解を深めるために議論を積み重ねる外国の文化を理解して活動している。</u>

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア【目標・内容(事項)】本単元のプロジェクトは「賛成や反対を超えて承認し合おう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は、My Project 4 から 5 の「感想を述べるができるよう文章内容や書き手の考え方を捉える」「聞いたり読んだりしたことについて問答する」「読んだ文章に対し、自分の考えや感想を伝えるために書く」を受け、「ある程度の長さをもった話の概要や要点を聞き取る」「話し手(二者)の主張やその根拠を理解し議論を総括するコメントをする」が系統的に加わる。また本単元では、ここまでに積み重ねてきた「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びへの気付き」を素地とし、「異なる言語や文化の理解と承認」へとつながる「相互理解を深めるために、議論を積み重ねる」ことへの理解を深めることが、コミュニケーション活動を通じた文化理解の内容に位置付けられている。

イ【言語材料（文法事項）】主な言語材料（文法事項）の配列は、下表を前提する。特に「受動態」は小学校で（全く）慣れ親しんでいないだけでなく、これまで「目的語」に置くしかなかった「行為の対象となるものごと」を「主語」に置き換えることで、状況をより詳細に理解したり表現したりする材料として用いられる。

第 2 学年 2 学期（以前）	第 2 学年 3 学期（本単元）	第 3 学年 1 学期（以後）
There is / are ~、接続詞（When ~, If ~） 不定詞（名詞的・副詞的・形容詞的用法） 動名詞、助動詞（may） You look ~, give + O + O.	同等比較・比較級 最上級 受動態	現在完了、It (for) too 構文 how to ~.（疑問詞+不定詞） ask (tell, want) 人 to ~. （動詞+目的格+不定詞）

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型・協働学習】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」「協働学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習（1 学期）の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標（CAN-DO）を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまずきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて（授業外も含めた）個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力（4 技能とその統合）】本単元も、4 技能の統合に向けた活動を重視していく。前単元では、書くを読むに関連付けて統合していくために、簡単な構成メモを作って話したり問答したりし、それを基に文章を書いた上で、「文章を読み、自分の考えや感想を伝えるために書く」活動を展開した。また、構成メモを基に話すことは、「話す」という活動を「暗唱」「音読」としないよう配慮したものであった。本単元はこれらからの連続性として、聞く・話す活動をもう一度の単元末に位置付ける。ただしここで重要なのは、（スピーチをする等の話すではなく）聞くであり、具体的には「テーマについての賛成と反対の主張を聞き、どちらがより説得的であるかをジャッジ・コメントする」活動を展開する。ジャッジには、「A is better than B.」や「A is as good as B.」などの定型表現を、ここまでに積み重ねた「話の内容を聞き取りメモする（書く）」「書いたメモを基に話す」といった 3 技能を統合した活動を通じて活用することになる。第 2 学年までの活動・学習の集大成として、本単元に位置付けられている 4 技能を統合した活動を十分に展開できるよう、各学年・学期の指導を積み重ねておく必要がある。

カ【言語や文化に対する理解（理解と承認）】本単元は、小学校段階での「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びに気付く」から「言語や文化の差異を超えた理解と承認」に向けての転換となる。ディベートをコミュニケーションの場面として扱い、その進め方のみでなく、活動を通じて「相互理解を深めるために議論を積み重ねる」文化に理解を促していく。その際、言語や文化の差異を超えた承認を表現する定型表現として「I agree with group A partly. Because ~. But ~.」「I agree with both A and B. The first part of group A is ~.」などを学習させておくことが望ましい。これは、ディベートとしては一定のジャッジをするものの、その後議論を総括するコメント（「In conclusion, ~.」や「I come to the conclusion that ~.」「Summing up, ~.」）において活用させるようにする。ディベートは、「勝敗」を決することをその基本に置く。しかし、現実のコミュニケーションにおいては、勝敗がつくことや、そもそも勝敗をつけること自体が不要な場面が多く、求められるのは、議論を通じて、誰もが納得することのできる「合意」地点を導くことである。コメントに活用させる定型表現は、こうした考え方を背景として学習させることを意識していく。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア【自校内】 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ【異校種間】 小学校教員との協働により、「質的發展のない方法の繰り返し」を回避するよう配慮する。小学校においては、特に国語科や特別活動（学級活動）において、同型の話し合い活動を経験してきている。したがって、言語が英語であるとしても、英語を活用するためのだけのディベートにならないよう、議論の質や量についても小学校からの系統性と連続性を踏まえて目標値を定めるようにすることが望ましい。

ウ【学校外】 自らの主張を明確に表明する文化については、日本との差異を踏まえつつ、どちらにもよさがあることなどについて、ALT や JTE をはじめとする学校外人材にスピーチをしてもらうことが望ましい。日常生活に即したコミュニケーション場面を設定して、あるテーマについて実際に主張し合う場面を再現してもらったり、ディベートのモデルとして提示したりするなどの協力的指導もその可能性を考えることができる。パフォーマンステストの一貫として、議論の相手役にALT等を活用することも考えられる。

4 単元の学習・指導と評価の計画（4時） ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動（配当時間）	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点（文化理解のみ）	☆評価
1	<p>◎テーマについて主張した文章を読み、大切な部分を正確に読み取ることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (10分) ・プロジェクトの目的を理解する。 ・3学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。</p> <p>4 Main Contents (35分) A ディベートの基本理解 (20分) ・ディベートの基本的な構成や進め方を理解するために、モデルとなる教材文を読む。 ①テーマを設定する。 ②テーマについて、賛成的立場と反対の立場に（ランダムに）割り振られる。 ③各主張を裏付ける根拠資料等を収集し、主張を確かなものにする。 ④各主張に基づいて討論し、勝敗を決める。 B 論や根拠をメモにまとめる (15分) ・テーマを決めて賛成と反対に分かれ、各時、割り振れた立場の主張を確かなものにするための論や根拠の立て方を考えて（英語の）メモにまとめる。 ※ <u>ここでは、賛成（Y）と反対（N）につき2グループずつを構成する。例として、Y-1とN-1が主張する際は、残った1グループがジャッジ、もう1グループがオーディエンスとする。</u></p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 既習事項を確認すること。</p> <p>○ 書き手の主張を理解するために文章繰り返し読んで読み返したりすること。 ○ 文章の大切な部分などを正確に読み取ること。 ○ 話し手や書き手の意見などに対して賛否やその理由を示すことができるよう、書かれた内容や考え方などを捉えること。 ○ 相互理解を深めるために議論を積み重ねる外国の文化について理解すること。</p>	<p>☆【関】① [読]</p> <p>☆【理】① [読]</p> <p>☆【理】② [読]</p> <p>☆【知】① [言]</p> <p>☆【知】⑤ [文]</p>

<p>2</p>	<p>◎テーマについての主張を確かなものにするために、論や根拠の立て方を整理し、その資料を収集する。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・前時でまとめたメモを確認する。</p> <p>4 Main Contents (40分) ・協同して自分たちの主張、論や根拠の立て方を整理する。 ・根拠になる資料を収集する。 ※ <u>生徒の実態に応じて、ペアやグループなどを適宜組み合わせる。</u> ※ <u>図書館やパソコン室を活用する。</u></p> <p>5 Greetings</p>		
<p>3</p>	<p>◎テーマについての主張が的確に伝わるよう文と文のつながりに注意して文章を書くことができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。</p> <p>4 Main Contents (40分) ・収集した資料を基に、自分たちの主張を確かなものにする論や根拠を書きまとめる。 ・書きまとめたものを基に、立場を主張する練習をする。</p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 自分の主張が相手に的確に伝わるように書いたり書き直したりすること。 ○ 自分の主張が相手に的確に伝わるようまとまりのある文章を書くこと。</p>	<p>☆【関】②【書】 ☆【表】①【書】 ☆【知】①②③ [言]</p>
<p>4</p>	<p>◎テーマについての主張が明確に伝わるようスピーチをするとともに、スピーチの概要や要点を聞き取り主張やその根拠を理解して適切に応じることができる。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・主張や資料を確認する。</p> <p>★4 Performance & Judge (35分) ・ディベートをする。(以下は例) ①賛成 (Y) Y-1 グループ主張 ②反対 (N) N-1 グループ主張 ③審判 (J) Y-2 グループ審判 ※N-2 グループはオーディエンス ※役割を変えて繰り返す。</p> <p>5 Consolidation (5分) ・プロジェクトを振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。</p> <p>6 Greetings</p>	<p>○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 与えられたテーマについて、主張を明確に伝えるスピーチをすること。 ○ 複数の話者から聞いたことについて意見を述べること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ スピーチを聞いてメモをとること。 ○ まとまりのあるスピーチを聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。 ○ 賛成や反対を超えて、互いの主張やその根拠を承認しようとする事。 ○ 相互理解を深めるために議論を積み重ねる外国の文化について理解すること。</p>	<p>☆【関】③【話】 ☆【関】④【話】 ☆【表】②【話】 ☆【表】③【話】 ☆【関】⑤【聞】 ☆【理】③【書】 ☆【理】④【聞】 ☆【知】①②③④ [言] ☆【関】⑥【文】 ☆【知】⑤【文】</p>

I	小中一貫教育 理論編
II	外国語教育 理論編
III	外国語教育 実践編 全体・系統
III	外国語教育 実践編 小学校
III	外国語教育 実践編 接続・導入
III	外国語教育 実践編 中学校
IV	資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 4/4時：Performance & Judge

◎本時のねらい：相互理解を深めるために、聞き返すなどして内容を確認したり、聞いたり読んだりしたことについて問答したり意見を述べ合ったりすることができる。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
35分	<p>4 Performance & Judge</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディベートをする。(以下は例) ①賛成 (Y) Y-1 グループ主張 ②反対 (N) N-1 グループ主張 ③審判 (J) Y-2 グループ審判 ※N-2 グループはオーディエンス ※役割を変えて繰り返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手が理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ 与えられたテーマについて、主張を明確に伝えるスピーチをすること。 ○ 複数の話者から聞いたことについて意見を述べること。 ○ 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ スピーチを聞いてメモをとること。 ○ まとまりのあるスピーチを聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。 ○ 賛成や反対を超えて、互いの主張やその根拠を承認しようとする事。 ○ 相互理解を深めるために議論を積み重ねる外国の文化について理解すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【関】③ [話] ☆【関】④ [話] ☆【表】② [話] ☆【表】③ [話] ☆【関】⑤ [聞] ☆【理】③ [書] ☆【理】④ [聞] ☆【知】①②③④ [言] ☆【関】⑥ [文] ☆【知】⑤ [文] (言動・観察)
	<p>★Teacher Talk</p> <p>Today we are going to do a challenge called a “Mini Debate.” For speakers, please give your opinions clearly according to the material. For the judges, please listen to both speakers and find their opinions. And at the end of the performance you will express your own opinion on the topic. The important thing to say is which side you agreed with and why. Please share your own opinion and ideas. However, please find a reasonable conclusion and make comments on the debate that everyone can agree with.</p> <p>✓Remarks</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が賛同できるコメントの示し方を例示するなどし、コメントの具体的なイメージをもたせるようにする。 		

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編



ディベート

Topic: We should study English at school.

Supporting opinion:
I agree. I have three reasons.
First, there are more than 5,000 languages in the world. We need a common language to communicate with each other.
...

Opposing opinion:
I disagree. I have three reasons.
First, there are about 7,000,000,000 people in the world. China has 13,000,000,000 people and it is the largest population in the world.
...



Judgment:

I agree more with the supporting opinion because their idea makes more sense to me. I agree that it is important to be able to communicate with as many people as possible.

Summing up / Conclusion:

I agree with both A and B. The first part of group A is ~.

In conclusion, I would like to study not only English but Chinese and Korean.

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (中) コラム 6 ◆◆
4 技能の統合的指導 2 (中学校第 2 学年)

「先生、英語の新聞読んでる私って、ちょっとかっこよくない？」

「この間、電車の中で英語の本を開いちゃった。実は、そこまで読んでないんだけど。でも、辞書をあえて使わないようにして、読めるフリをしてみたよ。」

「なんか英語って、日本語に訳すより、そのまま受け止めた方がいいような…。I'm は、私は～です。じゃなくて、そのまま“I'm”とか。いちいち英語に訳してると、追いつかない。」

いよいよ第2学年の学習も終わり、義務教育も残すところ1年になります。8年という月日は、子どもたちを大きく成長させます。生徒たちが扱う英語は日常生活で使う自然なものに近付いていき、この時期になると、例えばALTも、生徒との会話がより一層楽しくなるという話を聞きます。

それだけに、教師もまた、生徒の可能性に corresponder ことができるよう、適切な活動やプロジェクト設定していかなければなりません。ここでは、4技能の統合を図るに当たり、より日常生活でのコミュニケーションに即した事例を紹介します。

■英字新聞の活用

Last Project でもオリンピック・パラリンピックを扱っていますが、この開催期間は、毎日英字新聞に競技結果が掲載されます。これを教材として扱うと、現実に起きている出来事(現象)と言語(音声と記号)を結び付け、より日常生活に即したコミュニケーション活動を行うことができます。Warm Up の Quick Response の教材としてもいいでしょう。

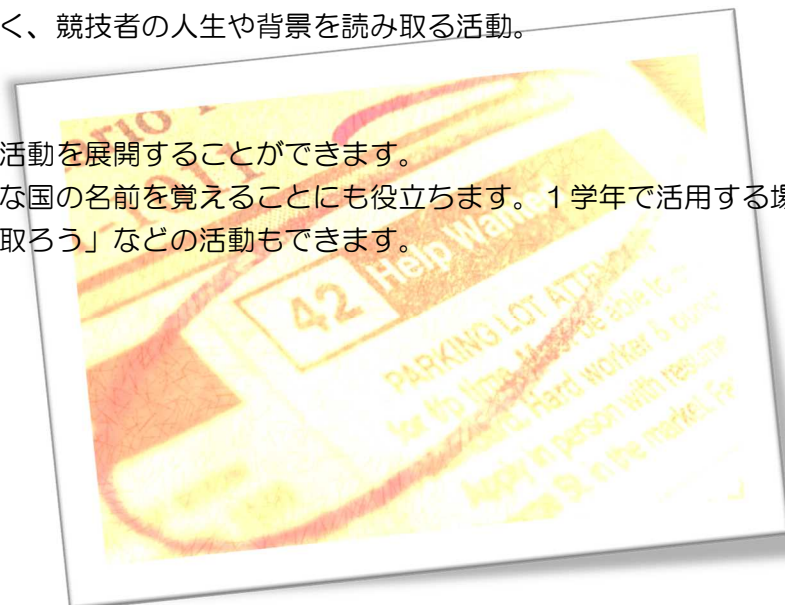
例えば、教師が英字新聞を音読、英語でメモを取らせる活動。

例えば、英字新聞を読んで、質問に話したり書いたりして答える活動。

例えば、競技の結果のみでなく、競技者の人生や背景を読み取る活動。

教師の工夫しだいで、多様な活動を展開することができます。

なお、英字新聞は、いろいろな国の名前を覚えることにも役立ちます。1学年で活用する場合は、「知っている国の名前だけ読み取ろう」などの活動もできます。



I 小中一貫教育 理論編
II 外国語教育 理論編
III 外国語教育 実践編 全体・系統
III 外国語教育 実践編 小学校
III 外国語教育 実践編 接続・導入
III 外国語教育 実践編 中学校
IV 資料編

■ 漫画やアニメーション

Project 8 では、日本の伝統文化をプレゼンテーションする活動を設定してあります。漫画やアニメーションは「クールジャパン」の代名詞の一つとも言えますから、多様な言語に翻訳されているものがあります。簡単なものでは、例えば4コマ漫画。吹き出しを空にしたものを使い、台詞を英語で書かせる。もちろん創作でよいです。

また、同じ漫画を使って、日本語と英語を併記し、双方の表現のニュアンスや語感を比較してみること、日本語と英語両者のより深い理解につながります。

この時期ともなると、日本語を英訳したものが、なかなか日本語のニュアンスを捉え切れていないことにも気付けるようになってくるはず。逆も然りです。

ここで、教師は、(中) コラム3と同じく、再び不安になることがあるかもしれません。言語材料(文法事項)も随分と多くのものを学習してきているからです。

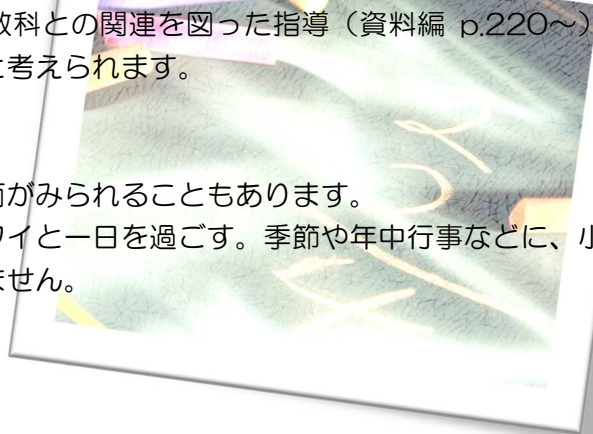
しかし、特に第2学年2学期以降は、「不定詞」をはじめ、「英語のままの理解」を要する文法事項が配列されています。むしろ、海外のティーンエイジャー向け雑誌や英字新聞などの Authentic な教材を使って4技能を統合的に活動させる方が、中・長期的に見れば、生徒の学力を伸ばすことにつながります。そのために教師もまた、英字の新聞や雑誌をはじめ、様々な媒体を通じ、「聞く」「話す」「読む」「書く」によるコミュニケーション能力を日々高めるとともに、常に世界の風を感じ、国際感覚を磨いていく必要があります。

さて、とはいえ、この時期に突然こうした活動をはじめようとしても、それは難しいというものです。多くの生徒は入学試験を思い浮かべ、なおのこと不安になるかもしれません。だからこそ、ここまでに、日常的な Quick Response、また、時には生徒の学習意欲に配慮し、授業のパターンに変化をもたせるものとして、こうした活動を組み込んでみるとよいかもしれません。

4技能の統合は、第2学年や第3学年の、日常生活に即した自然な場面での活動でこそ図られていくものです。「英語集会」や「一日英語デー」などのイベントを学校で開催し、他の教師にも、その日だけは英語で生徒に correspond してもらうといったことを計画してみるのも一つの手です。もちろん授業も、小学校における外国語活動と同じく、他教科との関連を図った指導(資料編 p.220~)は、例えば数学や理科なら展開できる可能性が高いと考えられます。

こうした活動を通じて、様々な教師の多様な面がみられることもあります。

楽しく、間違えることを恐れず、みんなでワイワイと一日を過ごす。季節や年中行事などに、小学校との交流を交えてやってみるのもよいかもしれません。



事例 2-3-1	中学3学年 1学期～2学期	Keywords: 4技能の統合、英語のままの理解、生き方を学ぶ教育活動、文化の差異と承認
My Project 6 「賛成や反対を超えて承認し合おう」		本単元
My Project 8 「日本の伝統文化をプレゼンテーションしよう」		

◆◆ My Project 7 外国文化のインタビュー記事を作ろう ◆◆

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ 外国の文化やその背景にあるものの見方・考え方について、理解を深めるために適切に質問し話の概要や要点を聞き取ったり、自分の考えや気持ちが的確に伝わるようまとまりのある文章を書いたりするとともに、記事の内容から書き手の考え・気持ちを読み取り、感想、賛否やその理由を書くことができる。
(コミュニケーション)
- ・ 異なる文化やその背景にあるものの見方・考え方を捉えようとし、それを理解する。
(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての知識・理解
	コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)			
単元の評価規準	外国文化のインタビュー記事を作る活動に積極的に取り組んでいる。 異なる文化の背景にあるものの見方や考え方を捉えようとしている。	外国の文化やその背景にあるものの見方・考え方について、理解を深めるために適切に質問したり、考えや気持ちが的確に伝わるようまとまりのある文章を書いたりするとともに、記事を読んだ感想、賛否やその理由を書くことができる。	外国の文化やその背景にあるものの見方・考え方について、まとまりのある話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、考えや気持ちを示したりすることができるよう記事の内容や書き手の考え・気持ちを読み取ったりすることができる。	既習の語句や文、文法などに関する知識や、インタビューに必要な表現と理解の知識を身に付けている。 異なる文化やその背景にあるものの見方やその考え方を理解している。
コミュニケーション活動に即した具体的な評価規準	① [話] 身振りや手振りをうまく利用して質問している。 ② [話] 聞き手が理解しやすくなるよう質問している。 ③ [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ④ [聞] 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら聞いている。 ⑤ [書] 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。 ⑥ [読] 書き手の考えや気持ちを理解するために、繰り返し読んだり読み返したりしている。 ⑦ [文] 異なる文化の背景にあるものの見方や考え方を捉えようとしている。	① [話] 質問を聞き手に適切に伝えることができる。 ② [書] 自分の考えや気持ちが的確に伝わるようまとまりのある文章を書くことができる。 ③ [書] 読んだことについて感想、賛否やその理由を書くことができる。	① [書] 聞いたことについてメモをとることができる。 ② [聞] 質問や依頼に適切に応じることができる。 ③ [聞] まとまりのある話を聞いて、概要や要点を聞き取ることができる。 ④ [読] 考えや気持ちを示したりすることができるよう、記事の内容や書き手の考え・気持ちを読み取るることができる。	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] インタビューに必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [文] <u>異なる文化やその背景にあるものの見方や考え方を理解して活動している。</u>

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア [目標・内容(事項)] 本単元のプロジェクトは「外国文化のインタビュー記事を作ろう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は、第2学年までを素地とし、各技能の育成とその統合をより一層図ろうとするものである。コミュニケーションの場面は、学校・授業内に限定されていたこれまでと一定の連続性を保ちながらも、その範囲を超え「インタビューをしに行く」点でより日常生活に即す。また、「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びへの気付き」「相互理解を深める議論の役割の理解」を受け、「異なる文化やその背景にあるものの見方・考え方の理解と承認」に迫っていく。コミュニケーション能力の育成、言語や文化に対する理解のいずれも、義務教育9年間の集大成を目指すものである。

イ【言語材料（文法事項）】主な言語材料（文法事項）の配列は、下表を前提する。特に「現在完了」については、不定詞と同じく、「英語のままの理解」を要する材料である。コミュニケーションの場面がより日常生活に即す本プロジェクトでは、適切な質問・依頼の仕方を含め、その遂行のために必要な言語材料が状況に応じて多様に変化する。語、連語及び慣用表現、文法事項については、これまで以上に、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図ったうえで柔軟に取り扱うよう配慮する必要がある。

第2学年3学期（以前）	第3学年1学期（本単元）	第3学年2学期（以後）
同等比較・比較級 最上級 受動態	現在完了、It (for) too 構文 how to～（疑問詞＋不定詞） ask (tell, want) 人 to～ （動詞＋目的格＋不定詞）	主語＋動詞＋目的＋補語 現在分詞・過去分詞の後置修飾

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習（1学期）の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標（CAN-DO）を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまづきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて（授業外も含めた）個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力（4技能とその統合）】第2学年の各プロジェクトにおいては、4技能の統合を図るために、4 [話↔聞、読、読→話↔聞]、5 [聞→書→読、話↔聞→書→読→書]、6 [読、書→話→聞→話] の活動を展開してきた。また、構成メモを基に、暗唱・音読にならないよう＝できるだけ即時的なスピーチとなるようにして問答することや、4技能を多様に組み合わせた Quick Response なども、4技能の統合を支えるものであった。第3学年でも、この連続性上でプロジェクトを展開していく。

本単元は、Project 5 に近似した [聞、話↔聞→書→読→書] の順列で活動を展開する。ただし、活動をより現実の場面で行わせるために、インタビューをして記事を書きまとめる活動を設定してある。単元中盤のインタビューをして材料を収集する「調べ学習」は、「生き方を学ぶ教育活動」(p.234～) を踏まえて「総合的な学習の時間」に位置付け、外国語科4時と合わせた全7時でプロジェクトを展開する。

カ【言語や文化に対する理解（理解と承認）】何を対象としインタビュー・記事にまとめるかについては、主体性に配慮し、生徒に決めさせるようにする。このため、文化背景にあるものの見方や考え方の理解については、プロジェクトの対象によって内容が異なる。ただし、次単元「日本の伝統文化をプレゼンテーションしよう」への連続性を踏まえ、後に日本と外国の文化、その背景にあるものの見方や考え方の「差異」が際立つ対象を決めるよう、適宜支援する必要がある。また、現実の場面でコミュニケーションをするため、言語や文化の差異を踏まえた適切な質問や依頼の仕方は十分配慮して指導する必要がある。

なお、「現在完了」については、不定詞ほどではないものの、「英語のままの理解」を要する言語材料である。基本的な知識としては、その分類である「完了」「継続」「経験」を軸に理解を深めることができるものの、突き詰めればこの3つに全てが明確に分類されるわけではないことに配慮する必要がある。現在完了についてもこのことを踏まえ Authentic で多様な表現に触れる経験を積み重ねることが重要である。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通
ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [異校種間] インタビューや記事の対象を何にするかについては、小学校教員と協働し、具体的なものを複数用意しておくことが有効である。文化は、触れる機会が量・質ともに増すほどそれに慣れ親しんでしまい、初めてそれに接触した際の感動や驚きが薄れてしまうことがある。しかし小学校教員は、はじめて外国の言語や文化に触れた際の児童の姿をよく理解しているはずである。こういった児童の姿が、中学校教員にとっては、インタビューや記事の対象を複数用意しおく際の参考になる。また、小学校では、「学校生活」など、文化差異に触れる複数の活動を行っている。このことを十分考慮することも必要である。

ウ [学校外] 学校外人材も、インタビュー・記事の対象案を複数用意する際に助言を求めることが有効である。特に ALT や外国での生活経験がある人材は、次単元の日本の伝統文化との差異が際立つ外国の文化や、深く探究した際に初めて差異やその全容が明らかになるような文化を理解していることが予想できる。上記「学校生活」一つをとってみても、例えば、生活指導におけるペナルティやトラランス (tolerance、寛容度) の段階、基準・規準が日本と比較し明確に決まっている国があったり、その背景には、子どもの教育に対する責任を公教育 (学校) と家庭がどの程度ずつ担うかについての考え方の差異があったりする。その差異への気付きや理解が、文化を超えて異なるものの見方や考え方を承認する素地となる。

4 単元の学習・指導と評価の計画 (4時 (外国語科) + 3時 (総合的な学習の時間))

時	◎目標 ・主な学習活動 (配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点 (文化理解のみ)	☆評価
1	◎インタビューの基本的な構成を理解する。 1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (10分) ・プロジェクトの目的を理解する。 ・1学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 4 Main Contents (35分) ・モデル映像を (英語で) メモをとりながら視聴し、インタビューの基本的な構成を知る。 ※半構造化インタビュー (面接) インタビュアーが決めておいた質問とインタビューイの自発的な話から成るインタビュー ・インタビューに必要な定型表現を確認する。 ・ペアやグループで、インタビューして記事にまとめる具体的な内容を話し合い、決める。 5 Greetings	・具体的に外国文化の何をインタビューし記事にまとめるかは、生徒に委ねる。ただし、日本文化との差異が際立つ内容が望ましいことを伝える。 ○ 既習事項を確認すること。 ○ 聞いたことについて (英語で) メモをとること。	☆【理】①【書】 ☆【知】①②【言】

I 小中一貫教育 理論編
 II 外国語教育 理論編
 III 外国語教育 実践編 全体・系統
 III 外国語教育 実践編 小学校
 III 外国語教育 実践編 接続・導入
 III 外国語教育 実践編 中学校
 IV 資料編



外国語科	2	<p>◎インタビューや記事の内容に基づき、質問項目や役割分担をする。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (5分) ・プロジェクトの目的と課題を再確認する。 ・インタビューの定型表現を確認する。</p> <p>4 Main Contents (35分) ・話し合って決めたインタビュー・記事の内容に基づいて質問項目や役割分担を話し合う。 ※ 全員が必ず質問をするように役割分担をする。</p> <p>・インタビューの練習をする。</p> <p>5 Greetings</p>	<p>○ 身振りや手振りをうまく利用して質問すること。</p> <p>○ 聞き手や理解しやすくなるように工夫して質問すること。</p> <p>○ 質問を聞き手に正しく伝えること。</p> <p>○ 聞いたことについて、簡単な言葉や動作で反応すること。</p> <p>○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。</p> <p>○ 聞いたことについて (英語で) メモをとること。</p> <p>○ まとまりのある英語を聞いて概要や要点を適切に聞き取ること。</p>	<p>☆【関】① [話]</p> <p>☆【関】② [話]</p> <p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【関】③ [聞]</p> <p>☆【関】④ [聞]</p> <p>☆【理】① [書]</p> <p>☆【理】② [聞]</p> <p>☆【知】①②③ [言]</p>
	総合的な学習の時間	<p>◎インタビューを通じて、質問を正しくインタビュー者に伝え、話の概要や要点を聞き取ることができるとともに、異なる文化、その背景にあるものの見方や考え方を捉えようとする。</p> <p>・インタビューを (英語で) メモをとりながらする。</p> <p>・インタビューの録音を文字起こしする。</p> <p>◎テーマに対する自分の考えや気持ちちが的確に伝わるようまとまりのある記事を書くことができる。</p>	<p>※外国語科の (関連) 指導事項</p> <p>○ 身振りや手振りをうまく利用して質問すること。</p> <p>○ 聞き手や理解しやすくなるように工夫して質問すること。</p> <p>○ 質問を聞き手に正しく伝えること。</p> <p>○ 聞いたことについて、簡単な言葉や動作で反応すること。</p> <p>○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。</p> <p>○ 聞いたことについて (英語で) メモをとること。</p> <p>○ 質問や依頼に適切に応じること。</p> <p>○ まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を理解すること。</p> <p>○ 読み手が理解しやすくなるよう書いたり書き直したりすること。</p> <p>○ 自分の考えや気持ちちが的確に伝わるようまとまりのある文章を書くこと。</p> <p>○ 異なる文化やその背景にあるものの見方や考え方を捉えようとする。</p> <p>・インタビューや文字起こし、記事にまとめる際には、日本の文化やものの見方・考え方との差異に着目させるようにする。</p>	<p>☆【関】① [話]</p> <p>☆【関】② [話]</p> <p>☆【表】① [話]</p> <p>☆【関】③ [聞]</p> <p>☆【関】④ [聞]</p> <p>☆【理】① [書]</p> <p>☆【理】② [聞]</p> <p>☆【理】③ [聞]</p> <p>☆【関】⑤ [書]</p> <p>☆【表】② [書]</p> <p>☆【知】①②③ [言]</p> <p>☆【関】⑦ [文]</p>
外国語科	3	<p>・記事にまとめる。</p>		

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

時	◎目標 ・主な学習活動 (配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点 (文化理解のみ)	☆評価
外国語科 4	<p>◎記事の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方を捉えるとともに、異なる文化やその背景にあるものの見方や考え方を理解する。</p> <p>1 Greetings 2 Performance & Evaluation (40分) ・掲示された各記事を読み、コメントを書く。</p> <p>3 Consolidation (5分) ・プロジェクトを振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。</p> <p>4 Greetings</p>	<p>○ 書き手の考えや気持ちを理解するために、繰り返し読んだり読み返したりすること。</p> <p>○ 記事の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方を捉えること。</p> <p>○ 読んだことについて、感想や賛否、その理由を書くこと。</p> <p>○ 異なる文化やその背景にあるものの見方や考え方を理解すること。</p>	<p>☆【関】⑥ [読]</p> <p>☆【理】④ [読]</p> <p>☆【表】③ [書] ☆【知】①②③ [言]</p> <p>☆【知】④ [文] (記事・観察)</p>

5 本単元 (プロジェクト) における学習・指導と評価のポイント ※省略





S1: We're junior high school students from Tokyo.

S1: Excuse me, but may I speak to you for a moment?

F1: Sorry, but I am busy now.

S1: Could you please answer some questions?

F2: Sure.

F2: All right.

S2: Where are you from?

F2: I'm from Ireland.

S2: Could you please tell us about a traditional annual event in Ireland?

S1: We're interested in the cultural differences. In Japan did you find something very different from your country?

- I 小中一貫教育 理論編
- II 外国語教育 理論編
- III 外国語教育 実践編 全体・系統
- III 外国語教育 実践編 小学校
- III 外国語教育 実践編 接続・導入
- III 外国語教育 実践編 中学校
- IV 資料編

外国文化に関するインタビュー

◆◆ (中) コラム7 ◆◆
義務教育9年間の学習の集大成に向けて

生徒の「天井」にならないこと。

義務教育9年間の学習の集大成に向けて、教師が、強く自覚しておかなければならないことです。

社会政策としての教育（公教育）は、「全ての子ども」を目指す営みです。それはすなわち、義務教育期間で最低限身に付けなければならない力を「全ての生徒」に保障すると同時に、「より発展的な学習の機会を求める生徒」に対しても、可能な限りそれに応えていく必要があるということです。

■先生、私たち、一緒にイギリスに行く。

その言葉を聞いた時、最初はとてもびっくりしました。

それも4人です。結局根負けて、保護者の了解を取り、行政をはじめ必要な手続きを行い、十分に安全に配慮した上で約2週間を現地で過ごしました。

ホームステイをしながら、午前中はランゲージスクール、午後はイベントへの参加など。つたない英語だったけど、そんなことはおかまいなし。間違ふことなんて、恐れはしない。よくよく考えてみると、日本人同士が話す日本語だって間違っていることは（たくさん）ある。そう考えれば、あんまり怖くはなかった。行ってみれば、実はそんなに英語の授業や ALT と話しているときと変わらなかった。

別のある生徒は、高校生になったら、僕たちを連れて行ってと言いました。

実際にイギリスで2週間を過ごし、自力でロンドンを歩いてミュージカルを観たり、友達を作ってきたり、翌年には日本にその友達を招待したりしました。

こんなことはなかなか自分だけではできないけれど、例えば ALT やその派遣先に交渉してみると、案外そのための機会を得る方法が見付かったりします。

■夏休みの自由研究

まるまる一冊。これも驚きでした。きっかけを与えたのは自分であっても、まだ日本語訳のない有名小説を、夏休みの自由研究と称してまるまる翻訳。どっさりレポートを提出してきたその生徒は、なんとも誇らしげです。

他の生徒は、映画の台詞をスクリプトに起こしてきました。

こういったことは、ふとした瞬間に教師が発言したことをきっかけにしています。やってみよう、と挑戦する心を、静かに奮い立たせていたのかもしれませんが。「きっかけ」さえ教師が与えてあげれば、生徒は、こんなにもやる気になることがある。

一部の生徒に、しかも、まれに起こること。そんな印象があるかもしれませんし、それは確かにそうかもしれませんが。しかし、生徒はここまで伸びる可能性をもっている、ということでもあります。

■世界に友達を作ろう～英語ルネッサンス

もし、生徒や地域の実情に応じ、課題解決に資するものとして「特色ある学校づくり（教育活動）」（小中一貫教育理論編 p.29）に外国語教育を据えるなら、こんなことをテーマにしてみてもよいかもしれません。

日本人は、とても丁寧。礼儀正しい。これは案外よく聞くことです。実は現地の学校、文化にもよりますが、実際に現地に行って、ホームステイをして、といった（大がかりな）ことでなくても、案外簡単に国際交流の機会をもってくれることもあります。

今は、ソーシャルネットワーキングサービスも発展しています。テレビ電話やメールといった手段でも、十分に国際交流ができます。もちろん、授業中であっても、明確な目標と生徒の実情にさえ応じれば、十分に可能です。ただし、注意も必要です。外国の学校は、国際交流校をたくさんもっている場合があります。ですから、簡単にはいかないこともあり、継続した交流をするとなればなおさらです。

義務教育・多様で一貫性のある教育の目的は、全ての子どもに、よりよい人生を切り拓く基盤を確実に築くことです。学校がそのために行う活動は、外国語教育に限定されるわけではありません。よって、外国語教育に関連して本コラムに紹介したような取組を行う際には、校長をはじめ他の教師との十分な共通理解が必要になるでしょう。

教師の協働は、教育の潜在的な可能性を、最大限に引き出すために必要不可欠です。

（同 p.29）

しかし、もし、共通理解が得られ、上記したような取組ができたなら、それは、学校の教育課程内を超えて、生徒たちのよりよい人生を切り拓く基盤を築く契機となるはずです。

教師は、生徒の「底板」になっても、「天井」にはならない。

冒頭の言葉の本質を言い当てるなら、この表現の方がより適切かもしれません。

ここからは、義務教育9年間の集大成の一年のはじまりです。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

事例 2-3-2	中学3学年 2学期～3学期	Keywords: 4技能の統合、英語のままの理解、生き方を学ぶ教育活動、文化の差異と承認
My Project 7 「外国文化のインタビュー記事を作ろう」		本単元
My Project 9 「学びの成果を還元するプロジェクトを追究しよう」		

◆◆ My Project 8 日本の伝統文化をプレゼンテーションしよう ◆◆

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ 日本の伝統文化やその背景にあるものの見方・考え方、外国のそれらとの差異について、感想、賛否やその理由を示すことができるよう書かれた内容や考え方を読み取るとともに、自分の考えや気持ちの的確・明確に伝わるようまとまりのある文章を書いてプレゼンテーションをしたり、その概要や要点を聞き取って問答したり意見を述べ合ったりすることができる。(コミュニケーション)
- ・ 日本と外国の文化の背景にあるものの見方や考え方の差異を捉え、グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高める。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	外国文化との差異を踏まえて日本の伝統文化をプレゼンテーションする活動に積極的に取り組んでいる。 日本と外国の文化の背景にあるものの見方や考え方の差異を捉えようとしている。	日本の伝統文化やその背景にあるものの見方・考え方、外国のそれらとの差異について、自分の考えや気持ちの的確に伝わるようまとまりのある文章を書きプレゼンテーションをするとともに、それに対して問答したり意見を述べ合ったりすることができる。	日本の伝統文化やその背景にあるものの見方・考え方、外国のそれらとの差異について、書き手の意見などに対して感想、賛否やその理由を示したりすることができるよう書かれた内容や考え方を読み取ったり、プレゼンテーションの概要や要点を聞き取ったりすることができる。
コミュニケーション 活動 に即した 具体的な 評価規準	① [読] 書き手の考えや気持ちを理解するために、繰り返し読んだり読み返したりしている。 ② [書] 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。 ③ [話] 身振りや手振りをうまく利用してプレゼンテーションしている。 ④ [話] 聞き手や理解しやすくなるよう工夫してプレゼンテーションしている。 ⑤ [話] つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話し続けている。 ⑥ [聞] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ⑦ [聞] 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら聞いている。 ⑧ [文] <u>日本と外国の文化の背景にあるものの見方や考え方の差異を捉えようとしている。</u>	① [書] 聞いたことについて、感想、賛否やその理由を書くことができる。 ② [書] 自分の考えや気持ちの的確に伝わるようまとまりのある文章を書くことができる。 ③ [話] 調べた内容やそれに対する考え・感想などが明確に伝わるプレゼンテーションをすることができる。 ④ [話] プレゼンテーションの内容について問答したり意見を述べ合ったりすることができる。	① [書] 聞いたことについてメモをとることができる。 ② [読] 感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方を読み取ることができる。 ③ [聞] まとまりのあるプレゼンテーションを聞いて、概要や要点を聞き取ることができる。	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [言] プレゼンテーションに必要な表現と理解の知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ④ [文] <u>グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高めながら活動している。</u> ⑤ [文] <u>日本と外国の文化の背景にあるものの見方や考え方の差異を理解して活動している。</u>

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア【目標・内容(事項)】本単元のプロジェクトは「日本の伝統文化をプレゼンテーションしよう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は、前単位と同様、各技能の育成とその統合をより一層図ろうとするものである。コミュニケーションの場面も前単位と同じく、学校・授業内の範囲を超えてインタビューなどをしながら調べ学習を行い、より日常生活に即す点において連続している。なお、「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びへの気付き」「相互理解を深める議論の役割の理解」を受け、「異なる文化やその背景にあるものの見方・考え方の理解と承認」に迫る前段階として、本単元では、「グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高める」ことも系統上主たる内容となる。

イ【言語材料(文法事項)】主な言語材料(文法事項)の配列は、下表を前提する。特に「後置修飾」は、後の「関係代名詞」へつながるものであり、不定詞を含め、英語の文構造や基本文型に十分習熟し、「英語のままに理解する」ことを特に要する文法事項である。また、前単位と同じくコミュニケーション場面が日常生活に即す本プロジェクトでは、質問・依頼の仕方を含め、その遂行のために必要な言語材料が状況に応じて多様に変化する。語、連語及び慣用表現、文法事項については、これまで以上に、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図り柔軟に取り扱うようにする。

第3学年1学期(以前)	第3学年2学期(本単元)	第3学年3学期(以後)
現在完了、It (for) too 構文 how to～.(疑問詞+不定詞) ask (tell, want) 人 to～. (動詞+目的格+不定詞)	主語+動詞+目的+補語 現在分詞・過去分詞の後置修飾	英語の仕組み (S+V+O+C, 分詞後置修飾) 関係代名詞: 主格 who, which, that 目的格 which, that 関係代名詞(目的格の省略)

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

ア【プロジェクト型】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習(1学期)の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標(CAN-DO)を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまずきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて(授業外も含めた)個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、次学期の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力(4技能とその統合)】4技能の統合を図る展開としては、Project 4 [話↔聞、読、読→話↔聞]、5 [聞→書→読、話↔聞→書→読→書]、6 [読、書→話→聞→話]を経験してきている。本単元は、前単位が Project 5 に近似した展開を採用した連続性を考慮し、6 に近似する [聞→読、書→話↔聞] の順列で活動を展開する。また、前単位と同様、単元中盤の「調べ学習」は、「生き方を学ぶ教育活動」(p.234～)を踏まえて「総合的な学習の時間」に位置付け、外国語科4時と合わせた全6時でプロジェクトを展開するよう計画してある。

カ【言語や文化に対する理解(理解と承認)】何を対象としプレゼンテーションするかについては、前単位と同様、生徒の主体性に配慮し、自分たちで決めさせるようにする。また、特に「グローバル社会に生きる日本人としての自覚」は、「要請」ではなく、プロジェクトの遂行や活動を通じ「内発」的に高めていくものであることに留意する。加えてそれは、指導内容(事項)(5)に規定されるように、「広い視野からの国際理解を深める」(p.45)を前提しており、「国際協調」、すなわち、加速する「グローバル化」が「ユニバーサリゼーション」(p.42)の実現に資するものであることに配慮する必要がある。

なお、特に「後置修飾」は、「関係代名詞」へのつながりを見据え、「主語+動詞」の基本文型と関連付け [修飾→被修飾] の関係を捉えさせるようにする。反復学習が基本となるが、後置修飾のように、[主語+動詞] を基本として状況を更に詳しくする言語材料を扱う際には、センテンスの読解＝理解のみでなく、状況を示す視覚情報を基にそれを説明＝表現させる活動をバランスよく取り入れていくようにする。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [異校種間] 日本の伝統文化は、小学校の各教科等の学習や活動でも扱っている。小学校教員との協働により、生徒がこれまでにどのような伝統文化に触れてきているかを踏まえ、指導計画を立てる必要がある。かつて学習した内容をそのまま英語に置き換えるのではなく、中学校外国語科やその他教科等の目標や内容(事項)を踏まえ、量・質ともに第3学年として適切なプレゼンテーションをさせるようにする。

ウ [学校外] 例えば日本は、「クールジャパン」をキーワードとし、クリエイティブ産業の領域において日本文化を世界に発信しようとしている。日本のクリエイティブ産業がなぜ「クール」と見なし得るのかについては、文化差異の中でこそその理由が明確になる。ALTをはじめとする学校外人材を活用し、具体的な経験談などを交えながらクールジャパンについて説明してもらう機会を設定することにより、生徒は、プレゼンテーションの対象を決めるための有効な情報を得ることができる。

4 単元の学習・指導と評価の計画 (4時(外国語科) + 2時(総合的な学習の時間))

時	◎目標 ・主な学習活動(配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点(文化理解のみ)	☆評価
1	<p>◎プレゼンテーションの基本的な構成を理解する。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的を理解する。 2学期の学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 <p>4 Main Contents (35分)</p> <ul style="list-style-type: none"> モデル映像を(英語で)メモをとりながら視聴し、プレゼンテーションの基本的な構成を知る。 プレゼンテーションの読み原稿を黙読し、プレゼンテーションに必要な定型表現を確認して整理する。 ペアやグループで、プレゼンテーションする具体的な内容を話し合っ <p>5 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> 具体的に日本の伝統文化の何をプレゼンテーションするかは生徒に委ねる。ただし、外国文化との差異が際立つ内容が望ましいことを伝える。 ○ 既習事項を確認すること。 ○ 聞いたことについて(英語で)メモをとること。 ○ 書き手の考えや気持ちを理解するために、繰り返し読んだり読み返したりすること。 ○ プレゼンテーションの内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方を捉えること。 	<p>☆【理】①【書】</p> <p>☆【関】①【読】</p> <p>☆【理】②【読】</p> <p>☆【知】①②③【言】</p>



<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">外国語科</p>	<p style="text-align: center;">2</p>	<p>◎プレゼンテーションに必要な資料を収集する。</p> <p>1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的と課題を再確認する。 インタビューの定型表現を確認する。 <p>4 Main Contents (35分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 話し合って決めたプレゼンテーションに必要な資料を収集する。 		
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">総合的な学習の時間</p>	<p style="text-align: center;">1</p>	<p>◎自分の考えや気持ちが的確に伝わるようまとまりのある文章を書きプレゼンテーションをすることができるとともに、日本と外国の文化やその背景にあるものの見方や考え方の差異を捉えようとする。</p>	<p>※外国語科の(関連)指導事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 読み手が理解しやすくなるよう書いたり書き直したりすること。 ○ 聞いたり読んだりしたことについて感想、賛否やその理由を書くこと。 ○ 自分の考えや気持ちが正しく伝わるようまとまりのある文章を書くこと。 	<p>☆【関】② [書]</p> <p>☆【表】① [書]</p> <p>☆【表】② [書]</p>
	<p style="text-align: center;">2</p>	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションに必要な資料を収集する。 <p>・プレゼンテーションを作成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手や理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話し続けること。 ○ 調べた内容やそれに対する考え・感想が明確に伝わるプレゼンテーションをすること。 ○ 聞いたことについて、簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を理解すること。 	<p>☆【関】③ [話]</p> <p>☆【関】④ [話]</p> <p>☆【関】⑤ [話]</p> <p>☆【表】③ [話]</p> <p>☆【関】⑥ [聞]</p> <p>☆【関】⑦ [聞]</p> <p>☆【理】③ [聞]</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">外国語科</p>	<p style="text-align: center;">3</p>	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションの練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本と外国の文化やその背景にあるものの見方や考え方の差異を捉えようとする。 ○ グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高めること。 ・ インタビューや文字起こし、記事にまとめる際には、日本の文化やものの見方・考え方との差異に着目させるようにする。 	<p>☆【知】①②③ [言]</p> <p>☆【関】⑧ [文]</p> <p>☆【知】④ [文]</p>

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

時	◎目標 ・主な学習活動 (配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点 (文化理解のみ)	☆評価
4	<p>◎自分の考えや気持ちがあたかも正確に伝わるようまとまりのある文章を書きプレゼンテーションし問答したり意見を述べ合ったりをすることができるとともに、日本と外国の文化やその背景にあるものの見方や考え方の差異を理解し、グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高める。</p> <p>1 Greetings</p> <p>2 Performance & Evaluation (40分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションをする。 ・相互評価の一貫として、プレゼンテーションの内容について問答したり意見を述べ合ったりする。 <p>3 Consolidation (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトを振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。 <p>4 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身振りや手振りをうまく利用して話すこと。 ○ 聞き手や理解しやすくなるように工夫して話すこと。 ○ つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話し続けること。 ○ 与えられたテーマについて調べた内容やそれに対する考え・感想が明確に伝わるプレゼンテーションをすること ○ 聞いたことについて問答したり意見を述べ合ったりすること。 ○ 聞いたことについて、簡単な言葉や動作で反応すること。 ○ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 ○ まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を理解すること。 ○ グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高めること。 ○ 日本と外国の文化やその背景にあるものの見方や考え方の差異を理解すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆【関】③ [話] ☆【関】④ [話] ☆【関】⑤ [話] ☆【表】③ [話] ☆【表】④ [話] ☆【関】⑥ [聞] ☆【関】⑦ [聞] ☆【理】③ [聞] ☆【知】①②③ [言] ☆【知】④ [文] ☆【知】⑤ [文]

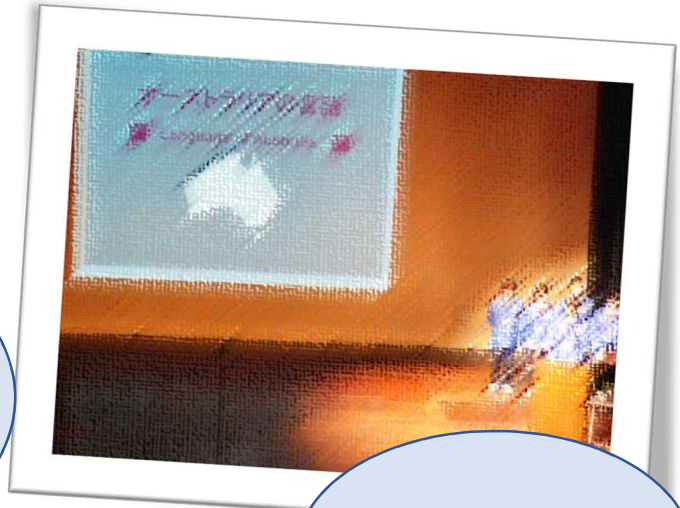
5 本単元 (プロジェクト) における学習・指導と評価のポイント ※省略

Hello, everyone.
My topic is "Japanese Food."
Have you heard that WASHOKU or Japanese food was certified as a World Intangible Heritage some months ago?
I'm very proud of that.
I want to be a chef of Japanese food in France.
My presentation is like a quiz show.
If you understand what I am talking about, please tell me what it is in Japanese.

Let's get started.



日本の伝統文化
プレゼンテーション



No.1, This is made by placing thin slice of various seafood on top of rice with sugared vinegar.

Yes, That' s right.

Now No.2.

It' s SUSHI!



This is a type of pancake made by cooking a batter of flour, water, and egg with various vegetables, seafood, and meat on a hot plate built into the table. Some people put mayonnaise, sweet source and flakes of dried bonito.

Close!

You' re right.

Is it MONJAYAKI?

**I got it.
It' s OKONOMIYAKI!**

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (中) コラム8 ◆◆ 他教科との関連を図った指導

「先生、ここは日本です……」

それは、先のコラム6でも紹介した、数学や理科を英語で行うという授業、また、一日英語デーを実施した日の生徒のつぶやきです。確かに、突然そんなことを実施したら、生徒は困惑してしまうかもしれません。場合によっては、いわゆる「英語嫌い」になってしまう可能性すら考えられます。

しかし、それは突然だから困惑するということに他なりません。そもそも外国語教育は、【連続性】のある具体的なコミュニケーションの場面を設定し、その働きを取り上げる、つまり、コミュニケーション活動を基軸として学習や指導を進めていくものです（外国語教育理論編 p.46, 47）。中学校第3学年では、そうした活動の連続性上において授業を展開していく必要があります。

つまり、より現実のコミュニケーションに生徒を浸すこと（immersion）が大切です。

そしてさらに、それを、「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てる」、また、「広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の必要性を養う」ことにつなげていきます（同 p.44, 45, 53）。

このため、第3学年のプロジェクトは、いずれも、生徒の主体性をより重視し、且つ、現実の場面に即した文化に関わるプロジェクトを設定しています。しかしながら、そのような大きなプロジェクトを設定すると、当然時間（時数）はこれまで以上のものを必要とします。他教科との関連を図った指導、特に総合的な学習の時間との関連は、このとき、更に必要性を増してきます。

■ 生き方を学ぶ教育活動（資料編 p.234～）

生活科・総合的な学習の時間を中核として実施する「生き方を学ぶ教育活動」は、ねらいとして、

「地域を基盤とし、繰り返し地域とかわり、つながる活動を通して、児童・生徒が、地域に親しみ、地域への愛着を深め、地域の実態や課題を探究的に学び、創造的、協同的に地域の課題解決に向けて取り組む態度を育む。」

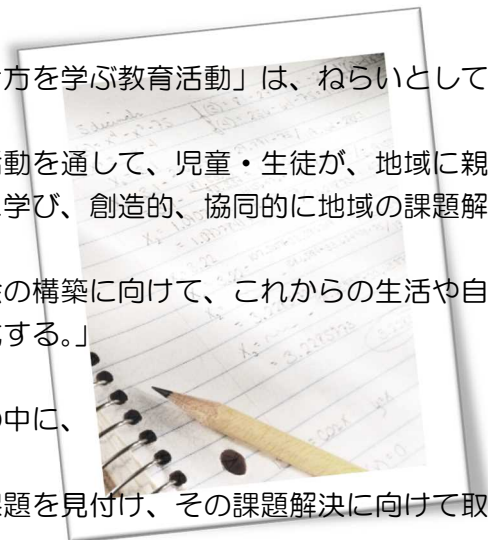
「地域の中に生きる自分自身を振り返り、持続可能な社会の構築に向けて、これからの生活や自らの生き方について考えることのできる児童・生徒を育成する。」

ことを設定しています。また、指導計画作成上の留意点の中に、

「小学校第6学年、中学校第3学年においては、地域の課題を見付け、その課題解決に向けて取り組む社会貢献活動を実施する。」

「小学校での学習と中学校での学習が「系統性」「連続性」をもって結び付くよう、総合的な学習の時間において育む資質や能力、評価の観点等について、連携校内の小・中学校の教員が「協働」し、十分に協議して設定する。」

としています。



これらのことから、生き方を学ぶ教育活動を質高く実施していくためには、例えば道徳の内容項目「郷土愛」から「国際理解」へと至る系統（外国語教育理論編 p.52, 53）も十分に踏まえる必要があります。そうすることで、総合的な学習の時間の中学校第3学年の標準時数 70 時のうち、外国語教育との関連を主として実施するプロジェクトは、十分に生き方を学ぶ教育活動・社会貢献活動に資するものとして位置付けることができます。

Project 7～9は、各プロジェクトを探究する過程を総合的な学習の時間に位置付け、それぞれ3時数、2時数、3時数の計8時数を充てています。なお、各プロジェクトの単元計画には、外国語教育の関連指導事項・評価規準を記載しています。よって、まずは、各学校で設定した「自立して行動する態度」「問題解決能力」「協同する力」などの総合的な学習の時間のねらいと評価の観点に基づき、指導計画を適宜修正していく必要があります。

また、他教科等との関連としては、例えば社会科において、

〔公民的分野〕(1) 私たちと現代社会

ア 私たちが生きる現代社会と文化

現代社会の特色として少子高齢化、情報科、グローバル化などがみられることを理解させるとともに、それらが政治、経済、国際関係に影響を与えていることに気付かせる。また、現代社会における文化の意義や影響を理解させるとともに、我が国の伝統と文化に関心をもたせ、文化の継承と創造の意義に気付かせる。

をはじめとする関連指導事項を踏まえ、プロジェクトを展開していく必要があります。その際には、例えば単元の導入部分において、ALT からみた日本の文化についてスピーチをし、英語でメモをとらせる、あるいは文章を用意してもらいそれを読ませる等の活動を設定することもできるでしょう。また、少なくとも、各教科等が、どの時期にどのような内容を扱っているかについては、年間指導計画などを共有して相互に確認しておくことが望ましいです。

高等学校の入学試験を間近に控えるこの時期、プロジェクトの遂行は、より個に応じた指導を可能にする時間にもなります。また、プロジェクトを遂行すること自体が、自己PRの材料にもなるでしょう。そして何より、外国語科の通常授業やその活動・教材の題材を通じてのみでは育成が困難な言語や文化に対する理解と承認、グローバル社会に生きる日本人としての自覚、言語や文化の差異を超えた公正な判断力、そして、ユニバーサリゼーション（普遍的な福祉）の感度を養う機会とすることができるはずで

「先生、ここは日本です。だから、もっと世界のことを知る機会がほしいです。」

こうした生徒の学びへの意欲に添えていくためには、個々の教師の専門性や経験はもちろん、ALT を含め、他教師との協働が必要不可欠です。生徒の学びを、全方向的につなげ（小中一貫理論編 p.28, 31）、よりよい人生を切り拓く基盤を確実に築くために、教師もまた、卒業に向け、これまで以上に互いを生かし合っていく必要があるということです。

事例 2-3-3	中2第3学年 3学期	Keywords: 4技能の統合、英語のままの理解、生き方を学ぶ教育活動、還元、日本人としての自覚
My Project 8 「日本の伝統文化をプレゼンテーションしよう」	本単元	Last Project 「2020年東京オリンピック・パラリンピックを見据え、卒業スピーチをしよう」

◆◆ My Project 9 学びの成果を還元するプロジェクトを追究しよう ◆◆

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- プロジェクトを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう文章を的確に書いたり明確に話したりするとともに、話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、感想、賛否やその理由などを示すことができるよう書かれた内容や考え方などを読み取ったりし、問答したり意見を述べ合ったりすることができる。(コミュニケーション)
- グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高め、学びの成果を還元しようとする。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	プロジェクトに関わるコミュニケーション活動に積極的に取り組んでいる。 グローバル社会に生きる日本人としての学びの成果を還元しようとしている。	プロジェクトを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう文章を的確に書いたり明確に話したりするとともに、聞いたことを読み取ったり、感想や賛否、その理由などを書いたりすることができる。	プロジェクトを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、感想、賛否やその理由などを示すことができるよう書かれた内容や考え方などを読み取ったりすることができる。
コミュニケーション 活動に即した 具体的な 評価規準	①【聞】 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ②【聞】 聞き返すなどして内容を確認しながら聞いている。 ③【話】 言葉によらないコミュニケーションの手段を利用して話している。 ④【話】 聞き手や理解しやすくなるよう話している。 ⑤【話】 つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話し続けている。 ⑥【読】 書き手の考えや気持ちなどを理解するために、繰り返し読み返したりしている。 ⑦【書】 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。 ⑧【文】 <u>グローバル社会に生きる日本人としての学びの成果を還元しようとしている。</u>	①【話】 自分の考えや気持ちなどが明確に伝わるようまとめよく話すことができる。 ②【話】 聞いたことを読み取ったり、感想や賛否、その理由などを示すことができる。 ③【書】 自分の考えや気持ちなどが的確に伝わるようまとめのある文章を書くことができる。 ④【書】 聞いたことについて感想、賛否やその理由などを書くことができる。	①【聞】 まとまりのある話を聞いて、概要や要点を聞き取ることができる。 ②【読】 感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方などを読み取ることができる。	①【言】 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ②【言】 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③【文】 <u>グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高めながら活動している。</u>

I 小中一貫教育 理論編
 II 外国語教育 理論編
 III 外国語教育 実践編 全体・系統
 III 外国語教育 実践編 小学校
 III 外国語教育 実践編 接続・導入
 III 外国語教育 実践編 中学校
 IV 資料編

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

(1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要

ア【目標・内容(事項)】本単元のプロジェクトは「学びの成果を還元するプロジェクトを追究しよう」であり、コミュニケーション活動に即した学習到達目標は、前単元と同様、各技能の育成とその統合をより一層図ろうとするものである。コミュニケーションの場面は生徒個々が定めたプロジェクトの内容により多岐にわたることになる。なお、「言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びへの気付き」「相互理解を深める議論の役割の理解」を受け、本単元では、「グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高める」「グローバル社会に生きる日本人としての学びの成果を還元する」ことが系統上主たる内容となる。そして、次単元 Last Project の主たる内容「異なる文化やその背景にあるものの見方・考え方の理解と承認」は、本系統の到達点である。

イ【言語材料(文法事項)】主な言語材料(文法事項)の配列は、下表を前提する。特に「関係代名詞」は、「後置修飾」からの配列上にあり、英語の文構造や基本文型に習熟し、英語のままに英語を理解する「言語の認識枠組み」が一定程度できあがっていなければ、それを理解したり表現したりすることに活用することは困難である。また、前単元と同じくコミュニケーション場面が日常生活に即す本プロジェクトでは、質問・依頼の仕方を含め、その遂行のために必要な言語材料が状況に応じて多様に変化する。語、連語及び慣用表現、文法事項については、これまで以上に、生徒の実態を踏まえ、学級・学年間の共通理解を図り柔軟に取り扱うようにする。

第3学年2学期(以前)	第3学年3学期(本単元)	高等教育(以後)
主語+動詞+目的+補語 現在分詞・過去分詞の後置修飾	英語の仕組み(S+V+O+C, 分詞後置修飾) 関係代名詞: 主格 who, which, that 目的格 which, that 関係代名詞(目的格の省略)	不定詞の用法、関係代名詞の用法、関係副詞の用法、助動詞の用法、代名詞のうちitが名詞用法の句及び節を指すもの、動詞の時制、仮定法、分詞構文

(2) 具体的な学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全Project共通

ア【プロジェクト型】My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。

イ【到達目標の明示】各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。

ウ【既習事項の確実な定着】プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習(1学期)の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標(CAN-DO)を示す際には、このことについても周知するようにする。

エ【評価】学期の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまずきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて(授業外も含めた)個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、以降の学習の円滑な導入に資するものとすることが大切である。

オ【コミュニケーション能力(4技能とその統合)】4技能の統合を図る展開としては、Project4 [話↔聞、読、読→話↔聞]、5 [聞→書→読、話↔聞→書→読→書]、6 [読、書→話→聞→話]、7 [聞、話↔聞→書→読→書]、8 [聞→読、書→話↔聞]を経験してきている。本単元は、生徒個々が設定したプロジェクトの内容により、このいずれか、あるいはそれと近似した順列が用いられることになる。逆説には、ここまで多様な組み合わせを用い、4技能の育成と統合を図ってこなければプロジェクトを十分に展開できない。前々・前単元と同様、単元中盤は、「生き方を学ぶ教育活動」(p.234～)を踏まえて「総合的な学習の時間」に位置付け、外国語科3時と合わせた全6時でプロジェクトを展開するよう計画してある。

なお、プロジェクトは、小学校からの連続性を踏まえつつ、例えば、スキットづくり、演劇やロールプレイ、Story Making & Telling、英語に関連したアート作り、プレゼンテーションなどを設定し、社会貢献活動として他校種の児童生徒や地域の人々に(英語で)発表するといったことが考えられる。

カ [言語や文化に対する理解 (理解と承認)] どのようなプロジェクトするかについては、前単元と同様、生徒の主体性に配慮し、自分たちで決めさせるようにする。また、特に「グローバル社会に生きる日本人としての自覚」は、「要請」ではなく、プロジェクトの遂行や活動を通じ「内発」的に高めていくものであることに留意する。加えてそれは、指導内容 (事項) (5) に規定されるように、「広い視野からの国際理解を深める」(p.45)を前提しており、「国際協調」、すなわち、加速する「グローバリゼーション」が「ユニバーサリゼーション」(p.42)の実現に資するものであることに配慮する必要がある。

なお、特に「関係代名詞」は、「主語+動詞」の基本文型と関連付けて [修飾→被修飾] の関係を捉えさせる。また、修飾するのが「人」なのか「ものこと」なのかを意識させながら、関係代名詞の種類を理解させるようにする。最終的に関係代名詞は that に統合、あるいは目的格の場合は省略に行き着く。しかし、一文に含まれる語が多くなるほど、who や which が関係代名詞として用いられている方が [修飾→被修飾] の関係を理解しやすくなる。ただし、関係代名詞を用いた文や文章を「理解する能力」は、「英語を日本語訳する」ではなく、「英語のままに英語を理解する」能力であることに留意する必要がある。反復学習が基本となるが、後置修飾と同じくセンテンスの読解=理解のみでなく、状況を示す視覚情報を基にそれを説明=表現させる活動をバランスよく取り入れていくようにする。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア [自校内] 以後の学期・学年に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [異校種間] 学びの成果を小学校や児童に還元する場合、小学校教員と、プロジェクトの過程やプレ発表において協働することにより、生徒の作品が適した量や質になっているかを助言してもらうことができる。

ウ [学校外] 外国の学校の教材や教具は、生徒がプロジェクトを進める際の有効な参考資料になる。英語ルームを設置している学校においては、日常からそういったものを配置しておく、触れさせておくことが、生徒が多様なプロジェクトを発想する素地となる。また、中学校第3学年3学期ともなると、生徒の語彙や表現も豊かになり、より自然で、日常生活に即した言語運用に近づく。ALT や JTE、外国語に堪能な地域人材には、意図的に、自然で日常生活に即した言語運用をもって生徒と関わるようにしてもらう。

4 単元の学習・指導と評価の計画 (3時 (外国語科) + 3時 (総合的な学習の時間))

時	◎目標 ・主な学習活動 (配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点 (文化理解のみ)	☆評価
外国語科 1	◎プロジェクトを構想し、学習計画を立てる。 1 Greetings 2 Warm Up 3 Introduction & Review (10分) ・プロジェクトの目的を理解する。 ・これまでの学習内容を確認して自分の学習状況を理解し、解決する課題を立てる。 4 Main Contents (20分) ・プロジェクトの例を知る。 ・個人、ペアやグループでプロジェクトを構想し、学習計画を立てる。 5 Greetings	・自らの課題を解決するとともに、グローバル社会に生きる日本人としての学びの成果を還元するためのプロジェクトを行うことを伝える。 ○ 既習事項を確認すること。	



<p>総合的な学習の時間</p>	<p>1・2・3</p>	<p>※各々の学習計画に即した学習 自己、ペア、グループなど、 各々の学習状況や必要に応じて 多様な形態を組み合わせる学習を 進める。その際、各々の課題と なる言語材料等について確実な 習得を図るようにさせる。</p>		
<p>外国語科</p>	<p>3</p>	<p>◎グローバル社会における自らの 生き方や共に生きることについ て、自分の考えや気持ちなどが 伝わるよう文章を的確に書いたり 明確に話したりするとともに、 話を聞いて概要や要点を聞き 取ったり、感想、賛否やその理 由などを示すことができるよう 書かれた内容や考え方などを 読み取ったりし、問答したり意 見を述べ合ったりすることがで きる。 グローバル社会に生きる日本人 としての自覚を高め、学びの成 果を還元しようとする。</p> <p>1 Greetings 2 Performance & Evaluation (40分) ・プロジェクトの成果を発表す る。 ・相互評価の一貫として、発表の 内容について問答したり意見を 述べ合ったりする。</p> <p>※ 発表は、指導計画上外国語科 に位置付けているため、英語 (あるいはそれ以外の外国語) で行わせるようにする。</p>	<p>○ 聞いたことについて簡単な言葉や動 作で反応すること。 ○ 聞き返すなどして内容を確認しなが ら聞くこと。 ○ まとまりのある話を聞いて、概要や 要点を聞き取ること。</p> <p>○ 言葉によらないコミュニケーション の手段を利用して話すこと。 ○ 聞き手や理解しやすくなるよう話す こと。 ○ つなぎ言葉を用いるなどのいろい ろな工夫をして話し続けること。 ○ 自分の考えや気持ちなどが明確に伝 わるようまとまりよく話すこと ○ 聞いたり読んだりしたことについて 問答したり意見を述べ合ったりする こと。</p> <p>○ 書き手の考えや気持ちなどを理解す るために、繰り返し読んだり読み返 したりすること ○ 感想を述べたり賛否やその理由を示 したりすることができるよう、書かれ た内容や考え方などを読み取ること。</p>	<p>☆【関】① [聞] ☆【関】② [聞] ☆【理】① [聞] ☆【関】③ [話] ☆【関】④ [話] ☆【関】⑤ [話] ☆【表】① [話] ☆【表】② [話] ☆【関】⑥ [読] ☆【理】② [読]</p>
	<p>4</p>	<p>3 Consolidation (5分) ・プロジェクトを振り返り、学習 到達目標 (CAN-DO リスト) に 照らして自己評価を行う。</p> <p>4 Greetings</p>	<p>○ 読み手が理解しやすくなるように書 いたり書き直したりすること。 ○ 自分の考えや気持ちなどが的確に伝 わるようまとまりのある文章を書く こと ○ 聞いたり読んだりしたことについて 感想、賛否やその理由などを書く こと。</p> <p>○ グローバル社会に生きる日本人とし ての学びの成果を還元しようとする こと。 ○ グローバル社会に生きる日本人とし ての自覚を高めること。</p>	<p>☆【関】⑦ [書] ☆【表】③ [書] ☆【表】④ [書] ☆【知】①② [言] ☆【関】⑧ [文] ☆【知】③ [文]</p>

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント ※省略

プロジェクトの
準備

**What project
can we choose?**



**We'll choose the
project "how to stop
bullying."**



プロジェクトの
発表

Did you hear the sad news about the banner made by the supporters of a sport team, which said, "○○ only?"

**What do you think of that?
When I heard it, I thought it was a discrimination or maybe bullying.**

Bullying can be seen at schools, companies, everywhere in our society. Everybody knows it is not good, but we cannot stop it.

In the case of the banner I think it was done because of lack of global spirit. We should know we cannot live alone.

In the case of bullying at school there are many reasons. However, I think there are some ways to prevent it. When we visited Australia last autumn, we asked several students, host families and teachers some questions about bullying in Australia.

They say there is bullying in Australia. One of the students wrote to me and said, "If you are bullied, you can tell a teacher at your school. The teacher talks to the bully and keeps an eye on them. If the bullying is very bad, the person being bullied can go to a special teacher that will help them, called a counselor. I think bullying is very sad, both for the person bullying and the person being bullied. Most of the time the bully is jealous of the other person so they make them feel bad.



Then I believe that the best way to stop bullying is to foster the sensitivity of mutual recognition and Universalization.

Thank you for listening.

Another said, "It would be so much nicer if instead of spreading meanness, we spread smiles! The lack of global spirit causes bullying at schools too. We cannot live alone.

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (中) コラム9 ◆◆
4 技能の統合的指導3 (中学校第3学年)

「私たち、来年は、3年生みたいに頑張る。」

「来年私たちは、何をやるの？」

「先生、これがやりたい！ この歴史上の出来事を劇にしたい！！」

それは、世界遺産にも登録された、歴史上、とても大きな出来事があった場所。世界中の多くの人
が、例えば社会・歴史の時間にその出来事のことを学ぶ。

「誰もが自由で対等」

この考え方に基づく近・現代社会に生まれ、その中で教育を受けて成長した人々には、なぜその
ような悲惨な出来事が起きたのか、なぜ、多くの人々の命が奪われなければならなかったのか、事実と
しては認識することができても、それ以上の深い理解に至ることは難しい。

それはある意味、日々、代わる代わる、様々なメディアを通じて私たちに届く、世界の出来事と同
じようなところがあるかもしれない。「異世界」の出来事のような感覚が、いつもどこかにある。

夏休みの後半、生徒たちのために、実際に現地を訪れてみた。有刺鉄線、冷たいコンクリート、崩
れかけた壁。その壁一面にあるポर्टレート。ビジター用に整備された、小さな、きっと医療や食事、
衛生環境も整備されていなかったであろう、幾つかの部屋。全ての命を悼む国際慰霊碑。訪れる多く
の人が、もし自分がそこに存在したならと、当時の人々の思いに心を寄せる。

「選別・登録、労働、抑圧」、そして、「自由への解放」

私はそれを、脚本にまとめることにした。生徒たちにとって、この教材を通じて（英語）劇をする
ことが、必ずこれからの生き方を支えるものになると確信したからだ。

その後の生徒たちの行動は、迅速だった。

衣装から照明・舞台装置といった役割分担から始まり、その劇の登場人物を徹底的に調べ上げた。
教師の知識の範囲を遙かに超える。しかし、幾つか、どうしても分からないことある。そこで私は、
現地の日本人ガイドを頼ることにした。生徒たちは、メールでのやり取りを始めた。随分と作業が進
んだ。

ある時生徒たちは、その歴史上の出来事を象徴する音楽があることを知った。劇で使いたい。その
音源を入手するための方法を考え、大使館に電話をしてみたが、日本ではどうしても無理なよう。

結果を先取りすれば、その音源は入手することができた。

新聞記者を通じて現地の特派員にコンタクト。カセットテープで送ってもらうことができたのだ。

言うまでもなく、これらのやり取りは、様々な部分で英語でのコミュニケーションが必要になる。

よく、日本人留学生は、現地のホストファミリーなどから次のような評価を受けます。

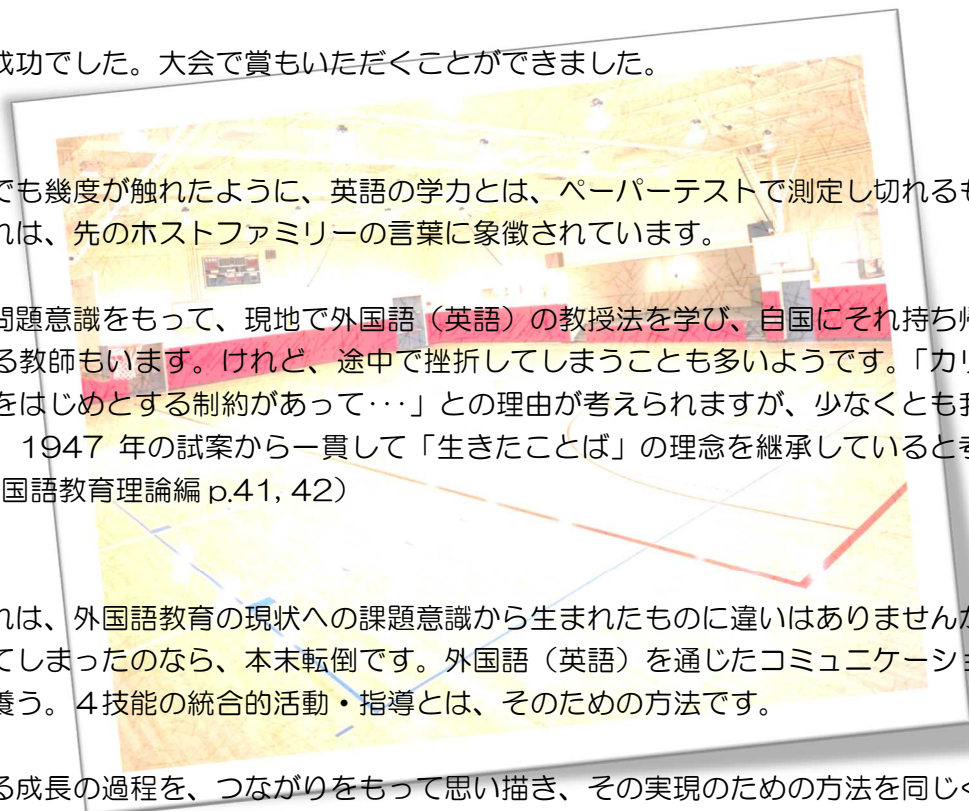
「読むことは、結構できる。むしろとてもよくできる生徒もいる。単語やスペリングもよく知っている。」

「けれど、話すことが難しい。特にある程度のまとまりのある英語。書くことなども同じで、一文や二文はよいのだけれど、それ以上になると難しい。シャイということもあるんだろうけど、これはそういった教育を受けてないことが大きな要因の一つだと思う。」

恐らく、この劇を追究した生徒たちは、そのような評価、あるいは印象からは程遠いものであったに違いありません。生徒たちには、「劇を成功させる」という明確な目的がありました。あえて、聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、あるいは異なる言語や文化の理解、などと言わなくても、プロジェクトの過程で、生徒たちは自然とこれらの力を付けていきました。

よくよく考えてみれば、これらの分類は、いわば「教える側の便宜上の分類」です。学習指導要領は、あくまで教師が活用することを前提としているからです。生徒たちにとっては、「結果」として、そこに規定される力が身に付けばよいのです。

ちなみに劇は、大成功でした。大会で賞もいただくことができました。



ここまでのコラムでも幾度が触れたように、英語の学力とは、ペーパーテストで測定し切れるものではありません。それは、先のホストファミリーの言葉に象徴されています。

もちろん、現状に問題意識をもって、現地で外国語（英語）の教授法を学び、自国にそれを持ち帰って実践しようと試みる教師もいます。けれど、途中で挫折してしまうことも多いようです。「カリキュラム（教育課程）をはじめとする制約があって…」との理由が考えられますが、少なくとも我が国の学習指導要領は、1947年の試案から一貫して「生きたことば」の理念を継承していると考えるのが妥当です。（外国語教育理論編 p.41, 42）

4技能の統合。これは、外国語教育の現状への課題意識から生まれたものに違いはありませんが、それが自己目的化してしまったのなら、本末転倒です。外国語（英語）を通じたコミュニケーション能力の素地、基礎を養う。4技能の統合的活動・指導とは、そのための方法です。

そして、目標に至る成長の過程を、つながりをもって思い描き、その実現のための方法を同じくつながりをもって考え出し、一人一人の限界を乗り越えるために、互いを知り、分かり、生かし合う。

この劇の背景には、「全ての子ども」に、「よりよい人生を切り拓く基盤」を確実に築くために、「つながり」と「生かし合い」によって外国語教育を為し、結果として、異なる言語や文化に対する理解と承認の態度を基盤とし、4技能の統合を図った教師の姿があります。

事例 2-3-4	中学第3学年 3学期	Keywords: 自らの道を拓く・共に生きる、グローバル化・ユニバーサル化、世界大での絆・支え合い
My Project 9「学びの成果を還元するプロジェクトを追究しよう」		本単元
◆◆ Last Project 2020 年東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、卒業スピーチをしよう ◆◆		

1 単元の学習到達目標 (CAN-DO)

- ・ 卒業スピーチを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう文章を的確に書いたり明確に話したりするとともに、話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、感想、賛否やその理由などを示すことができるよう書かれた内容や考え方などを読み取ったりし、問答したり意見を述べ合ったりすることができる。(コミュニケーション)
- ・ グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高め、ユニバーサル化による国際協調の精神を養う。(言語・文化)

2 学習到達目標に準拠した評価規準 (CAN-DO リスト)

	【関】 コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	【表】 外国語表現の能力 コミュニケーション場面に即した学習到達目標 (CAN-DO リスト)	【理】 外国語理解の能力	【知】 言語や文化についての 知識・理解
	単元の 評価規準	卒業スピーチに関わるコミュニケーション活動に積極的に取り組んでいる。 多様な言語や文化の根本にあるものの見方や考え方や、生き方を探り、承認しようとする態度を身に付けている。	卒業スピーチを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう文章を的確に書いたり明確に話したり読んだりしたことを問答したり意見を述べ合ったり、感想や賛否、その理由などを書いたりすることができる。	卒業スピーチを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、感想、賛否やその理由などを示すことができるよう書かれた内容や考え方などを読み取ったりすることができる。
コミュニケーション 活動に即した 具体的な 評価規準	① [関] 聞いたことについて簡単な言葉や動作で反応している。 ② [関] 聞き返すなどして内容を確認しながら聞いている。 ③ [話] 言葉によらないコミュニケーションの手段を利用して話している。 ④ [話] 聞き手や理解しやすくなるよう話している。 ⑤ [話] つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話し続けている。 ⑥ [読] 書き手の考えや気持ちなどを理解するために、繰り返し読んだり読み返したりしている。 ⑦ [書] 読み手が理解しやすくなるように書いたり書き直したりしている。 ⑧ [文] <u>多様な言語や文化の根底にあるものの見方や考え方や、生き方を探り、承認しようとする態度を身に付けている。</u>	① [話] 自分の考えや気持ちなどが明確に伝わるようまとまりよく話すことができる。 ② [話] 聞いたり読んだりしたことについて問答したり意見を述べ合ったりすることができる。 ③ [書] 自分の考えや気持ちなどが的確に伝わるようまとまりのある文章を書くことができる。 ④ [書] 聞いたり読んだりしたことについて感想、賛否やその理由などを書くことができる。	① [聞] まとまりのある話を聞いて、概要や要点を聞き取ることができる。 ② [読] 感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方などを読み取ることができる。	① [言] 既習の語句や文、文法などに関する知識を身に付けて活動に取り組んでいる。 ② [言] 基本的な強勢やイントネーション、区切り、発音を理解して活動に取り組んでいる。 ③ [文] グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、ユニバーサル化による国際協調の必要性を理解して活動している。

3 義務教育9年間を通した一貫性のある学習指導における本単元の位置付け

- (1) 指導目標・内容(事項)の【系統性】の構造的理解とコミュニケーション活動の【連続性】の確保の概要
- ア [目標・内容(事項)] 9年間の外国語教育の最終となるプロジェクトは、「2020年東京オリンピック・パラリンピックを見据えて、卒業スピーチをしよう」である。9年間の全ての指導目標・内容(事項)、コミュニケーション活動(場面・働き)を踏まえ、多様な言語や文化に対する理解を深め、その差異を超えてコミュニケーションを図ることができる能力の基礎を養うとともに、それぞれ言語や文化の根底にあるものの見方や考え方も承認しようとする態度を育むこと。これが、義務教育の系統上の到達点である。
- イ [言語材料(文法事項)] 本プロジェクトにおいては、全ての言語材料(文法事項)が既習となる。ただし、これまでのプロジェクトと同様、未習のものであっても、卒業スピーチ(プロジェクトの目的)に必要な語、連語及び慣用表現、文法事項は、柔軟に取り扱う。

第3学年3学期(以前)	本単元	高等教育(以降)
英語の仕組み(S+V+O+C, 分詞後置修飾) 関係代名詞: 主格 who, which, that 目的格 which, that 関係代名詞(目的格の省略)	—	不定詞の用法、関係代名詞の用法、関係副詞の用法、助動詞の用法、代名詞のうちitが名詞用法の句及び節を指すもの、動詞の時制、仮定法、分詞構文

(2) 学習・指導と評価の方法の【連続性】の確保

■全 Project 共通

- ア [プロジェクト型] My Project は、小学校外国語活動の展開枠を継承し、且つ、全て「プロジェクト型学習」を軸とすることで、学習・指導の方法の連続性を確保する基盤とする。
- イ [到達目標の明示] 各時の Introduction 若しくは Review において、CAN-DO リストの形で Project の学習到達目標を明確に示し、学習・探究意欲を喚起する。
- ウ [既習事項の確実な定着] プロジェクトを遂行していく過程は、生徒個々が既習(9年間)の内容を振り返り、自己学習や協同学習を通して、自らの苦手や課題を克服していく過程でもある。学習到達目標(CAN-DO)を示す際には、このことについても周知するようにする。
- エ [評価] 義務教育9年間の学習を総括するプロジェクトであるため、いずれの時点においても形成的評価としての評価場面を多く設定できる。常に具体的なコミュニケーション場面に即した学習到達目標を意識し、学期間に用いてきた評価規準を活用することで評価の連続性を確保していく。なお、評価の過程でつまずきや学び残しが見付かった場合は、必要に応じて(授業外も含めた)個別の指導機会を設定し、既習事項の確実な定着を図ることで、自律的学習者としての成長に資することが大切である。

オ [コミュニケーション能力(4技能とその統合)] 小学校から中学校の9年間を通じて、全ての単元、プロジェクト、又はその間に位置する Lesson において、All English を原則として学習・指導を展開してきている。さらに、系統的・連続的、且つ協働を通じた学習・指導がここまで十分に展開されていれば、卒業スピーチを教材として、4技能を総合し、自分の考えや気持ち、意見、承認、その理由を理解したり表現したりする自然で日常生活に即したコミュニケーションが十分可能である。逆説には、本プロジェクトでそういった活動が質高く展開できるよう、ここまで学習・指導を積み重ねておく必要がある。

カ [言語や文化に対する理解(理解と承認)] 中学校外国語科の指導内容である国際理解、日本人としての自覚、国際協調の精神を養うものとして、“OLYMPIC CHARTER”の Fundamental Principles of Olympism を教材として扱う。その題材の本質は、「言語や文化の差異を超えた公正な判断力」の本質である「ユニバーサリゼーション」である(外国語教育理論編 p.42)。道徳の内容項目「国際理解」の系統性を十分考慮するとともに、単なる知識理解に終始したり、行為の仕方を一方的に指導したりする「要請」とならないよう配慮する。言語や文化に対する理解、またその承認は、あくまで、コミュニケーション活動で用いる教材やその題材を通し、生徒が内面的に国際理解の価値を自覚し、「実感」を育むものである必要がある。

なお、最終時においては、道徳との関連を図り、教師がユニバーサリゼーションを題材に説話を行うこととしている。また、より発展的には、説話に限らず、UNESCO の“Teaching and learning: achieving quality for all; EFA global monitoring report, 2013-2014 (summary)”“Convention on the Rights of the Child”“Convention on the Rights of Persons with Disabilities”などから必要箇所を抽出し、教材とすることも考えられる。

キ [生き方を学ぶ教育活動との関連] 生活科と総合的な学習の時間を軸に、義務教育9年間を通じて構想・展開する杉並区「生き方を学ぶ教育活動」(p.234～)は、杉並区教育ビジョン 2012 の目指す人間像に迫り、それを支える5つの力のうち特に「5 持続可能な社会を目指し、次代を共に支えていく力」の育成を目指すものである。特に小学校第6学年と中学校第3学年においては、地域の課題を見付け、その課題解決に向けて取り組む社会貢献活動を実施するものとされており、持続可能な発展のための教育(ESD)の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組みとの関連も図られている教育活動である。

本プロジェクトは、その性質上、生き方を学ぶ教育活動との関連を図ることが望ましい。「ユニバーサライゼーション」は、持続可能な社会づくりの構成概念例「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」の全てを抱合するからである。その取組例としては、卒業スピーチの内容を考える際の条件に、地域や生徒の実態、また、ビジョン 2012 の取組の視点である「学び」と「循環」、「かかわり」と「つながり」を踏まえ、「地域社会への教育成果の還元」「地域活性化を通じた世界の福祉への貢献」などを課すことが考えられる。卒業論文などを総合的な学習の時間、生き方を学ぶ教育活動として展開する計画のある学校においては、本プロジェクトをその一部として位置付けることも可能である。

(3) 教育人材の【協働】の推進

■全 Project 共通

ア [自校内] 高等学校に配当目安とされている言語材料を前倒して取り扱う際には、年間指導計画上の学習到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。また、習熟度別のクラスを編成している場合であっても、発表時においては合同で行う、また、他学年担当の教員に評価コメントをもらう機会などを設定することで、自校内の協働を促進していくことができる。

イ [異校種] 土曜授業や学校公開、プレスクールなどの機会において、義務教育9年間の成果を多くの人々に伝えることができるよう、子供園・幼稚園、小学校や高等学校の教員・生徒、国際化を進める国内大学の教員や英文を専攻する大学生などと、コミュニケーションしたり、評価コメントをもらったりする機会を設定することが望ましい。

ウ [学校外] ALTやJTE、外国語に堪能な地域の人々のみでなく、企業や国際機関(OECD、UNESCO等)、非営利団体、また、海外のオリンピック・パラリンピックのアスリートや関係者と連携を図り、世界の教育や社会の状況を伝えてもらったり、卒業スピーチを聞いてもらい評価コメントをもらったりする機会を積極的に設定するよう努める。そうした経験は、言語や文化の違いを超えて思いを伝え合う喜びをより一層喚起するとともに、世界大での絆・支えの大切さの自覚をより深めることにつながる。また、生徒によっては、そうした経験が「よい」グローバル・リーダーへの成長の契機となることも期待される。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

4 単元の学習・指導と評価の計画 (4時) ※活動の★はポイントとして取り上げるもの

時	◎目標 ・主な学習活動 (配当時間)	○主な指導事項 ・主な指導上の留意点 (文化理解のみ)	☆評価
1	<p>◎オリンピックの根本原理を理解し、卒業スピーチの完成イメージをもって学習計画を立てる。</p> <p>1 Greetings</p> <p>★2 Introduction (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの目的を理解する。 既習事項を確認し、自分の学習状況を理解し、課題を立てる。 <p>★3 Main Contents (35分)</p> <ul style="list-style-type: none"> “OLYMPIC CHARTER”の Fundamental Principles of Olympism を読む。 オリンピックの根本原理を踏まえた卒業スピーチのモデルを映像で観る。 学習計画を立てる。 各自計画に即して学習を開始する。 <p>4 Greetings</p>	<p>○ 既習事項を確認すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の実態に応じて、パラフレーズする、あえて英文のみを示す、憲章日本語版や英語版の全文を用意する、発展的に、“EFA Global Monitoring Report, 2013-2014 (summary)” “Convention on the Rights of the Child” “Convention on the Rights of Persons with Disabilities” などを用意するなどの配慮をする。 <p>※<u>反転型の学習</u></p> <p>モデル映像の視聴は、生徒の実態や時数の制約に応じ、<u>反転型学習の一貫として、現在の学習状況の自己評価や学習計画の立案と併せて事前課題に扱ってもよい。</u></p>	
2・3	<p>※<u>各々の学習計画に即した学習</u></p> <p><u>自己、ペア、グループなど、各々の学習状況や必要に応じて多様な形態を組み合わせて学習を進める。その際、各々の課題となる言語材料等について確実な習得を図るようにさせる。</u></p>		
4	<p>◎卒業スピーチを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう文章を的確に書いたり明確に話したりするとともに、話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、感想、賛否やその理由などを示すことができるよう書かれた内容や考え方などを読み取ったりし、問答したり意見を述べ合ったりすることができる。</p> <p>◎グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高め、ユニバーサリゼーションによる国際協調の精神を養う。</p> <p>1 Greetings</p> <p>★2 Performance & Evaluation (40分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員の前で、卒業スピーチをする。 発表者以外は、評価シートを用いて卒業スピーチを評価する。 スピーチを聞いて、感想や意見、承認、その理由を述べ合う。 <p>★3 Consolidation (3分)</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトとともに、9年間の学習を振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。 <p>★4 Conclusion (3分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師の説話 (英語) を聞く。 <p>5 Greetings</p>	<ul style="list-style-type: none"> ユニバーサリゼーションから、道徳の内容項目「国際理解」の系統性を踏まえ、英語で説話をする。 	<p>☆【関】全</p> <p>☆【表】全</p> <p>☆【理】全</p> <p>☆【知】全</p>

I 小中一貫教育 理論編

II 外国語教育 理論編

III 外国語教育 実践編 全体・系統

III 外国語教育 実践編 小学校

III 外国語教育 実践編 接続・導入

III 外国語教育 実践編 中学校

IV 資料編

5 本単元（プロジェクト）における学習・指導と評価のポイント

(1) 1/4時：Introduction ～ Main Contents

◎本時のねらい：オリンピックの根本原理を理解し、卒業スピーチの完成イメージをもって学習計画を立てる。

担当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
10分	2 Introduction ・プロジェクトの目的を理解し、ワークシート①（CAN-DO リスト）に本プロジェクトの学習到達目標を書き込む。 ・これまでの学習内容を振り返り、解決する課題を立てる。	・主体的に学習・探究させるために、学習到達目標（CAN-DO リスト）を明確に示す。 ○ 既習事項を確認すること。 ・教科書とワークシート①を使い、リスにある CAN-DO に対して自己評価させ、解決する自分の課題（つまずき・学び残し）を考えさせる。その際、9年間の学習の集大成であることを意識させるために、これまでの各プロジェクトの自己・他者評価の結果を振り返らせる。	
	★Teacher Talk You're going to graduate from school soon. Are you happy? You have a few English lessons this month. I want you to round up everything you have studied for 9 years, I mean, 'through elementary school and junior high school.' I also want you to make a "SOTSUGYOU Speech" as memory of your graduation. This is the last English project for you.		
35分	3 Main Contents ・“Olympic Charter” の Fundamental Principles of Olympism を読む。 ・オリンピックの根本原理を踏まえた卒業スピーチのモデルを映像で観る。 ・本プロジェクトの学習計画（3時数）を立てる。 ・計画に即して、学習を開始する。	・生徒の実態に応じて、パラフレーズする、あえて英文のみを示す、憲章日本語版や英語版の全文を用意しておくなどの配慮をする。 ・卒業スピーチのイメージを確かなものにするために観ることを強調する。 ・スピーチに使えるような表現などがある場合はメモすることを伝えておく。 ・計画は3授業時数とする。放課後などの時間も計画に入れてよいことにする。 ・学習型態として、自分の目標や課題に応じて、「自己学習」「ペア学習」「グループ学習」などを効果的に組み合わせて計画を立てるようにさせる。 ・各時のねらいを決めるなど、発表までのスケジュールを明確にさせる。 ・生徒個々の状況に応じて、できるだけ独力による課題解決を尊重しながら、必要な支援を行う。	
	★Teacher Talk I would like to ask you a little more! Are you happy? I'll give you the 'Fundamental Principles of Olympism' from the Olympic Charter. You can know the noble Olympic spirits from it. You can know why we have the Olympic Games and the Paralympics every four years. I want you to make your "SOTSUGYOU Speech" with the noble Olympic spirits. ✓ Remarks ・生徒の主体的な課題解決を尊重するために、全体の場で多くを説明したり話したりせず、必要な支援は、個々に行うようにする。		

Ⅰ 小中一貫教育 理論編
Ⅱ 外国語教育 理論編
Ⅲ 外国語教育 実践編 全体・系統
Ⅲ 外国語教育 実践編 小学校
Ⅲ 外国語教育 実践編 接続・導入
Ⅲ 外国語教育 実践編 中学校
Ⅳ 資料編

(2) 4/4時 : Performance & Evaluation ~ Consolidation, Conclusion

◎本時のねらい：卒業スピーチを通じ、グローバル社会における自らの生き方や共に生きることについて、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう文章を的確に書いたり明確に話したりするとともに、話を聞いて概要や要点を聞き取ったり、感想、賛否やその理由などを示すことができるよう書かれた内容や考え方などを読み取ったりし、問答したり意見を述べ合ったりすることができる。
グローバル社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、ユニバーサリゼーションによる国際協調の精神を養う。

配当時間	学習活動	○指導事項 ・指導上の留意点	☆評価 (材料・方法)
40分	2 Performance & Evaluation ・ 全員の前で、卒業スピーチをする。 ・ 発表者以外は、評価シートを用いて卒業スピーチを評価する。 ・ スピーチを聞いて、感想や意見、承認、その理由を述べ合う。	・ 英語係等を事前に決めておき、英語で司会進行させる。 ・ 9年間の学習の集大成として台本等を用意せず、コミュニケーションを図るようさせる。	☆【関】全 ☆【表】全 ☆【理】全 ☆【知】全 (発表・観察)
	★Teacher Talk We have Speech Day today. Isn't it exciting? In fact, I am too excited as your English teacher. You can show us all you have learned in 9 years with your classmates. And I think I will be able to predict your future through your English performance and your real life in the coming days.		
3分	3 Consolidation ・ プロジェクトとともに、9年間の学習を振り返り、学習到達目標 (CAN-DO リスト) に照らして自己評価を行う。	・ 9年間の学習の集大成として、これまでの全ての学習を振り返り、自己評価を通じて成長を実感できるようにする。	
★Teacher Talk Let's check your own performance according to the list. What is the most important thing when you do this? Yes. It is to know yourself rightly. If you know where you stand properly, you can always know where to go or change tracks sometimes. Please be brave enough to know yourself.			
3分	4 Conclusion ・ 教師の説話 (英語) を聞く。	・ <u>ユニバーサリゼーション</u> から、道徳の内容項目「国際理解」の視点を系統性、英語で説話をする。	
★Teacher Talk It is really the most exciting day today. Your speeches were excellent! It was moving that all of you understood the Olympic spirits. Please tell me some words and phrases you used in your speeches. They must be very impressive to you. “Olympism is a philosophy of life”, “the joy of effort”, “a peaceful society”, “The practice of sports is a human right”, “Any form of discrimination with regard to a country or a person on grounds of race, religion, politics, gender or otherwise is incompatible with belonging to the Olympic Movement.” Yes, indeed. I hope you will keep them in your mind and grow up to realize a peaceful society without any discrimination in the future. Thank you very much indeed. ✓ Remarks ・ 上記を例とし、道徳の時間における説話と同じく、教師の実体験などをエピソードとして挿入することが望ましい。			

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

◆◆ (中) ラストコラム ◆◆

世界大での絆・支え合いとユニバーサリゼーション、社会にとっての学ぶことの意味

外国語教育のみならず、これから先の公教育、ひいては、広く教育と名の付く営みの在り方は、これまで以上に大きな転換を迎えることが予想されます。「よりよい人生を切り拓く」ために、必要な力を育む。かつて「学校」は、多くの人にとって、そのためのほとんど唯一の機会でした。しかし今日、ICTの発展に伴って「オープンエデュケーション」の機会が拡大しています。優良なオンライン学習コンテンツも日進月歩の状況にあり、私たちは、学校の外にも、これまで以上に多様な教育機会を得ることができるようになってきています。

こうしたことから、学校は、プロジェクト型や協同型の学びを基軸とし、問題解決能力をはじめとする認知スキル、そして、自己効力感や相互承認の感度といった社会的・感情的スキル（非認知スキル）を、これまで以上にバランスよく育む場になっていくことが予想されます。基礎的・基本的な知識・技能の習得に関する学びは、当該の目標や内容、子どもたちの実態に応じ、そのための機会を個別化・多様化していくことができるからです（外国語教育理論編 p.61）。教師の役割も変化し、より一層「つながり」と「生かし合い」によって教育を為す資質・能力が求められることとなります。

学びの個別化・多様化が進むほど、教師は、「成長・発達の専門的な指導・支援者」として、よりよい人生を切り拓く基盤を確実に築くという義務教育の目的に向かい、個々に応じた成長・発達の過程を「つながり」をもって思い描かなければなりません。その実現のための方法もまた、教師が中心となり「つながり」をもって創り出していく必要があります。さらに、質の高いプロジェクトや協働を形態とした学びを進めるためには、自らを含めた多様な人材の「生かし合い」が不可欠だからです。

そうして「学校施設」は、立地域のみでなく、ICTの技術的基盤を得ながら、多機能化・複合化した生涯にわたる「開かれた教育施設（オープンエデュケーションの基軸）」となることが予想されます。そこでの教師は、子どもを含めた全ての市民に対し、教える役割とともに、様々な教育資源を活用し多様な学びを創り出す・コーディネートする役割が求められるようになっていかもしれません。教育行政の役割も当然変化し、こうした教育施設・教師の役割が十分に果たされるよう、ひいては、全ての市民の学びが「よりよい人生」に資するものとなるよう、個別具体の「支援」が求められることとなります。そのため教育行政は、教育資源を多様に開発し、既存資源とともに一端集約してネットワーク化、これを実情に応じて個や集団に適正＝普遍的な福祉に適うよう（傾斜）配分するとともに、多様な人材へと開かれ、協働するという意味での「開かれた（教育）行政（オープンガバメントの基軸）」の機能をより高めていくことになると考えられます。

まさしく、「共に学び 共に支え 共に創る教育」の近未来の姿です。あらゆる境界を超え、異世代のみでなく、異文化が共に為す教育（前同 p.64）は、もうすぐそこまでやっています。

そして、杉並区の（小中）一貫教育の考え方は、近未来の教育においても、教育活動・施策を基礎付け、その質をより高める方法原理として機能します。上記した個の多様な学びに応じるオープンエデュケーション、プロジェクト型・協同型の学習、それを支えるオープンガバメントは、「成長・発達の多様性」を前提し、人材の「生かし合い」＝「組織化」によって為す「多様な教育活動・施策」の表現型と言えるからです。ところが、このような在り方自体は、その内に、活動や施策を教育の目的へ向かわせる原理をもたず、ともすると、「活動・施策あって学びなし」となる可能性を否定できません。しかし、「つながり」＝「意図的な接続」は、あらゆる活動・施策を教育の目的へと向かわせる原理となり、これからの教育の在り方をより質高いものにしていくことができるはずです。

さて、ここまでを踏まえた上で、少しずつ外国語教育へ論を戻していきましょう。

実のところ、こうした加速する変化の時代においても、古くから、(公)教育を巡るあらゆる議論の根底に脈々と継承されている「難問」があります。

すなわち、教育を巡る「公」と「私」の対立です。この対立は、変化が大きくなればなるほど、新たな形をもって、しかしその本質を同じくして議論の俎上に立ち現れるはずで

公と私の対立は、例えば学習指導の文脈では、「教え込み」と「内発的興味・関心、経験から」の対立という形で現れます。前者は、子どもの興味や関心、簡単に言えば学びたいことはさておき、この社会を維持・発展するために、全ての子どもに「一様」に学ばせなければならないことがある。一方後者は、全ての学びは、子ども個々の「多様」で内発的な興味や関心から始める必要がある。しかし社会の側は、それでは社会の維持・発展に必要なことを身に付けさせられないのではないか。

議論は、そうして繰り返されてきました。

もちろん上記は、少し極端な例です。現実的な感覚からすれば、両者を併用すればよい、そもそもそんなことを意識して学習指導に当たっていないといった考えもあると思います。

では、改めて、この難問を外国語教育で考えてみると、どうでしょうか。
あるいは形を変え、より建設的にこう問うてもよいです。



外国語教育は、個にとって、社会にとって、それぞれどのような意味があるのか。

さらにこれを煎じ詰めていけば、社会の変化に伴い個々の生き方が多様化しているにもかかわらず、なぜ全ての子どもに対し外国語教育を為さねばならないのか、という問いに行き着きます。

社会の側は、例えば加速するグローバル化の中で、あらゆる方面での競争が激化しているのだから、外国語能力を身に付けることは必須の意味があると考えられるかもしれません。しかし、ある特定個人は、自らの生き方には関係がないという理由から、外国語能力を学び身に付けることに全く意味を見いだせないかもしれません。もちろん別のある特定個人にとっては、社会のことはさておき、自らの生き方を追究するために外国語能力を身に付けることが特別の意味をもつかもしれません。

このように考えてみると、外国語教育にも「公」と「私」の難問が根を張っていることが理解できるのではないかと思います。上記の例からは、少なくとも、外国語を学ぶことに意味を見いだせない個人が存在する可能性を考えることができるからです。

この問いに対する回答は、結論を急げば、「共に生きる」ため、そして、よりよく「自らの道を拓く」ため、ひいては「普遍的な福祉」のためと行うことができます。

教育は、個＝私にとって、各々の「よりよく生きたい」という願いを実現する、換言すれば、「自らの道を拓く」ためにあります。しかし、皆が他者のことなどおかまいなしに自らの道を追究したらどうでしょう。「誰もが自由で対等」という感度が育まれず、実力によって限りある資源をどこまでも奪い争う社会になったらどうなるでしょう。誰もがもつよりよく生きたいという願いは、(生存)競争を勝ち抜いた特定の個や集団にのみにしか実現しません。ある一時点で競争を勝ち抜いたとしても、次の瞬間には、誰かに自らの生き方を(著しく)妨げられてしまうかもしれません。

I
小中一貫教育
理論編

II
外国語教育
理論編

III
外国語教育
実践編
全体・系統

III
外国語教育
実践編
小学校

III
外国語教育
実践編
接続・導入

III
外国語教育
実践編
中学校

IV
資料編

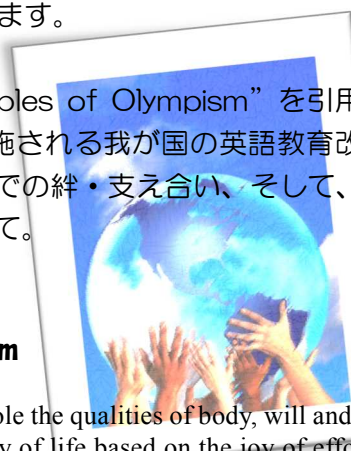
このように考えてみると、「共に生きる」ことは、誰もが自らの道を拓く基盤として不可欠（小中一貫教育理論編 p.13）であることが理解されるはず。そしてまた、各人の道がより豊かに拓かれるよう、社会をよりよいものにしていくために「共に生きる」ということでもあります。

加速するグローバル化は、私たちの身近な生活にも、様々な変化をもたらしています（外国語教育理論編 p.38）。私たちは、各々の道を拓くためにも、これまで以上に、言語や文化の違いを超え多様な他者と共に生きる感度が必要になります。だからこそ、外国語教育、あるいは「グローバル教育」は、外国語能力を身に付け、国際競争の場で活躍するグローバル人材の育成のみでなく、全ての子どもに、言語や文化の違いを超える相互承認の感度を育てていかなければなりません。

そして願わくは、「国際的な教育危機」（前同 p.42）において触れたように、この世界の誰もが自由で対等な存在として、必要な教育を受ける機会を保障され、これまで以上に、各々の道を拓くことのできる社会・世界が実現すること。外国語教育・グローバル教育、ひいてはグローバル化が目指す先は、ユニバーサリゼーションをその本質とした世界大での絆・支え合いであり、あらゆる境界を超える普遍的な福祉の実現に資することが、社会にとっての学ぶことの意味となります。

付言しておく、「共に」を基本理念に置き、「共生」と「人生」を目指す人間像に並列する「杉並区教育ビジョン 2012」は、上記した外国語教育に例を引くように、教育を巡る「公」と「私」の対立・難問を止揚し、両者が不可分に支え合う関係にあることを象徴しています。それは、言語や文化の違いを超えて「遊ぼう」と語りかけつながる子どもたちに、原初の姿をみることができます（前同 p.91）。ここでは、各々の願いが共に生き、よりよく実現しています。

最後に、“OLYMPIC CHARTER” から“Fundamental Principles of Olympism”を引用します。2020年東京オリンピック・パラリンピックを目途として実施される我が国の英語教育改革が、オリンピズムの根本原理とともに、あらゆる境界を超える＝世界大での絆・支え合い、そして、ユニバーサリゼーションのより一層質の高い実現の契機となることを願って。



Fundamental Principles of Olympism

1. Olympism is a philosophy of life, exalting and combining in a balanced whole the qualities of body, will and mind. Blending sport with culture and education, Olympism seeks to create a way of life based on the joy of effort, the educational value of good example, social responsibility and respect for universal fundamental ethical principles.
2. The goal of Olympism is to place sport at the service of the harmonious development of humankind, with a view to promoting a peaceful society concerned with the preservation of human dignity.
3. The Olympic Movement is the concerted, organised, universal and permanent action, carried out under the supreme authority of the IOC, of all individuals and entities who are inspired by the values of Olympism. It covers the five continents. It reaches its peak with the bringing together of the world's athletes at the great sports festival, the Olympic Games. Its symbol is five interlaced rings.
4. The practice of sport is a human right. Every individual must have the possibility of practising sport, without discrimination of any kind and in the Olympic spirit, which requires mutual understanding with a spirit of friendship, solidarity and fair play.
5. Recognising that sport occurs within the framework of society, sports organisations within the Olympic Movement shall have the rights and obligations of autonomy, which include freely establishing and controlling the rules of sport, determining the structure and governance of their organisations, enjoying the right of elections free from any outside influence and the responsibility for ensuring that principles of good governance be applied.
6. Any form of discrimination with regard to a country or a person on grounds of race, religion, politics, gender or otherwise is incompatible with belonging to the Olympic Movement.
7. Belonging to the Olympic Movement requires compliance with the Olympic Charter and recognition by the IOC.

Ⅰ
小中一貫教育
理論編

Ⅱ
外国語教育
理論編

Ⅲ
外国語教育
実践編
全体・系統

Ⅲ
外国語教育
実践編
小学校

Ⅲ
外国語教育
実践編
接続・導入

Ⅲ
外国語教育
実践編
中学校

Ⅳ
資料編